彼女は正義の味方だった

夜桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
彼女は正義の味方だった

【Ｎコード】
Ｎ５１９９Ｎ

【作者名】
夜桜

【あらすじ】
この話は平凡な高校生がある日、正義の味方と名乗る少女と出会って事件に巻き込まれるというちょっと変わったオリジナルストーリー。
現在連載中の銀レウスと違って本作品は既に完成してますので順次、あげていく予定です。

出会いは突然やってきた

学校が終わるとそこは俺だけの世界だった。
真っ直ぐ家に帰ってゲームをすることもあればそうじゃない日もある。とにかく俺にとって遊びは呼吸をするのに等しい行為だった。いや、それは今も変わらないか。
中でも特別、心躍る遊びがヒーローの真似事だ。公園で見繕った木の棒を立派な剣に見立てて、強さの証に少し大きめのスカーフがマントの代わり。修行という名目で無心に木の棒を振り回すこともあれば悪党から町を守るためのパトロールをして、遅くに帰っては親に叱られたのも良い思い出だ。
正直に言おう。俺は今も昔も正義の味方という奴に憧れてる。子供の頃は無意味に世界最強を目指してはいたが成長した今となってはちょっと方向性が違う。
悪党と戦う日々でなくてもいい。強いて言うならば正しいものは正しいと叫んで、間違ってることは徹底的に追求できるような男になりたいと願ってる。いや、それでもやっぱり男の性なのか、肉体的に強くなりたいっていう想いがあるせいか、部屋で筋トレしたりしてるのはここだけの話。
幼少から中学までの俺のヒストリーを辿ればおおむねこんなモンだ。ガキ大将と言えばそれまでだ。あ、今でもそれは変わらないか。
だが実際に、そういうチャンスが到来した時、果たして多くの男共はヒーローよろしく助けることが出来るだろうか？
例えば――ちょっとガラの悪い不良に女子が絡まれてたら？
例えば――見知らぬ誰かが蹲いて、車に轢かれそうな状況だったら？
例えば――フィクションの世界でしか登場しない悪の秘密結社が居たら？
いやいやいや、いくらなんでも三つ目はあり得ないだろうと思っ

た奴。それ正しい。つか、真っ当な反応。現に俺だってそんなの頭っから否定してたさ。世の中、悪い奴は沢山いるのは当たり前。でも今時世界制服を大真面目に狙うような集団なんて、言っちまえばナンセンスだ。高校生にもなってチルドレンハートを持つ俺でもジョークとして信じることはあっても本気にするほど馬鹿じゃない。

が、事実は小説より奇なりという諺があるように世界征服を企む組織は実在した。

「……」

俺だって未だに半信半疑なんだ。第一、世界制服と言ってもそいつらのやってることがまー草の根運動もイイトコで野望と行動が一致してなかったりする。で、世界制服を狙う組織があるなら当然、正義の味方も、、いる。

全く、一体全体何をどうしたらなんちゃってストーリーが現実を帯びてしまったんだ？　いやまぁ、もう過ぎたことだし自分の身近で起きた手前、黙って見過ごすことが出来なかったりする訳で……。

世間一般で言うところのゴールデンウィーク。ちょっと捻くれた人が言えばグータラウィークとも言うべき大型連休。連休と聞いてときめかない野郎はガリ勉君ぐらいで俺みたいな健全な学生はそりゃもう遊び倒すぜベイベー的なノリだ。なんか一部生徒の間で人気のない、如何にも保護者受けしそーな先公が宿題出したよーな気がしなくもないがそんなのカンケーねぇ！　宿題なんて連休終わってから提出――すると青春のアルバムにちょっと苦い思い出として刻まれるので一応やっておく。遊びを優先しつつ。

「よーし！　全員いるなー野郎どもー！」

点呼を取るまでもなく、おー！　と威勢のいい声が木霊する。本日の天気――快晴。気温・二五度。湿度・五パーセント。連休初日としてはまずまずのスタートだ。汗をかくにも暑すぎず寒すぎない気候とはまさにこのこと！

「いいかおめぇら、夏の甲子園はお前らが考えてるほど甘くない。

ツーベースヒットだの満塁ホームランなんて出来事は――ザラだぜ？」
少し演技を利かせて含みのある言い方をするだけでガキ共はおぉーっと感嘆の声を上げる。きっとこいつらの脳内じゃ有名どこのプロ野球選手たちの姿が想像されてるに違いない。
「そこで！　まず投手である小野、お前にはこの俺直伝の必殺カーブを伝授しよう」
すげー必殺技かよ！　きっと九〇度に曲がるカーブだぜ！　セイにぃなら絶対やるって！　わいのわいの……。
いや原田、いかに主人公補正が掛かった俺といえども九〇度曲がるカーブなんて無理だ。夢を見る時は寝る時だけにしてくれ。
「そして、野球の特訓に必要な物も用意してある」
特訓という言葉にガキ共の目が一斉にこっちを向く。ふっ、いくら携帯ゲームが高性能になろうと、ハイビジョン対応のゲーム機が登場しようとな、男という生き物――特に小学生は自分の好きな物が上手くなる為の特訓には弱いモンさ。
「お前たちを更なる高みへ上らせる為の必勝アイテム――それはコイツだぁああっ！」
声高々に宣言し、俺はリストバンド（勿論自前だ）を頭上に掲げてみせる。ただのリストバンドじゃない。これはそう、近くの廃材置き場を管理している人に話を付けてもらい、ウェイトになりそうなものを貰ってそいつをリストバンドに縫い付けたのさ。いわばこいつはオリジナル・パワーリスト。重さを小学生レベルにしてるのはご愛嬌ってことで。
「セイにぃ、何それ？」
「かの有名な巨神の大星にも登場したホームランバッター養成グッズだ」
「セイにぃ、それ大リーグ育成ギプスじゃない？」
「細かいことを気にするな」
小野の突っ込みを華麗にスルーしつつ、人数分の自作パワーリス

トを配る。重さは大体二キロぐらいだがガキには丁度いいだろう。つーか俺、よく人数分のリスト集めたな……。
パワーリストをガキ共がつけている間、俺は小野を呼んでカーブの投げ方を伝授する。教えると言っても俺がしてやるのはボールの握り方と腕の振り方。あとはひたすら実戦練習を積ませるのが俺流の指導。
「うしっ。全員行き渡ったな？　んじゃ早速守備練始めンぞー！」
号令と共に奴らはグローブを持って散り散りになる。
ここ――柊公園は今時珍しく遊びで野球ができるスペースが設けられた公園だ。遊具で遊ぶ公園というよりもサッカーやバドミントンをする為の公園と言ってもいい。
ガキ共がそれぞれの守備配置に付いたのを確認すると俺はその場で深呼吸をして、叫んだ。
「野郎どもー、甲子園に行きたいかー！」
『おおぉおっ！』
「俺のチームに弱率はいらないッ！　甲子園に行きたい奴だけ声を出せぇえ！」
『イエッサー！』
うむ。ガキ共は今日も気合充分みたいだ。それを確認し、手にした軟式ボールをひょいっと宙に放り投げ、素早く打つ。野球部にもリトルにも在籍した経験なんてないが、こいつ等の相手をしているうちに右と左への打ち分けぐらいは出来るようになった。我ながら器用なもんだ。
白球は低い放物線を描き、ライトへ。わりと本気で打ち込んだからよく跳ねるしよく飛ぶ。子供だからと言って手加減はしない。わざとらしく手を抜けば子供の権威は勝ち取れないことを、俺はよく知っている。
俺が強打した打球はあっという間にライトを抜ける。遅れてボールを拾い上げ、ファーストを経由してこちらへ投げ返し、それを更に打つ。ショートを守る石井が駆けるが間に合わないものの、レフ

トの遠藤が捕球する。成長したな、遠藤の奴。前まではショートに頼りきってる節があったんだが……。ほんの一瞬だけ、その余韻に浸りながらも俺は豪快にバッドを振り、声を出す。時間はあるけど遊び方を知らないガキ共を集め、地域の探検から始まり野球をやり始めて一ヶ月ぐらいは経つだろう。そろそろ交流試合と称してどっかの野球チームと試合させてやりたいとこだ。

しかし悲しきかな、我が美咲町には野球チームというものが存在しない。これは由々しき事態だ。デジタル社会がアナログな遊びを蹂躙して良い道理などある筈がない！　そのことを友人に話したら『キミはバカか？　あぁいやスマン、キミはバカだったね』とか言ってきやがった。少年時代を共に過ごし、昆虫採集や探検遊びに明け暮れたあの頃の友情は一体何処へ消えたというのだ。

昔の話だと？　男はいつまで経ってもガキだからいーんだよ。

「セイにー！　早く打って来いよー！」

「あ、わりぃ！」

いけね。俺としたことがつい感傷に浸っちまったぜ。折角のゴールデンウィークだというのに初っ端から疲れたような顔しちゃダメだろ俺！

二度三度頭を横に振って気持ちを切り替える。ファーストを担当する渡辺が勢いよく投げてきたボールをしっかり捉える。

（手応え、アリ……！）

ジャストミートとはまさにこのこと！　真芯を捕らえたバッドは気味のいい金属音を周囲に響かせてボールを高く打ち上げる。……しまった、ちと本気になり過ぎたな。

「なにやってんだよセイにぃー！」

「それじゃあ練習になんねーって！」

案の定、ガキ共からはブーイングの嵐。仕方ないのでサードを担当する井上を打席に立たせ、予備のボールを渡して練習するように言っておく。

「ツーアウト満塁。そういうシチョエーションだと思って挑め」

「何回の？」
「ツーアウト満塁といえば九回裏なのは常識だ」
そしてこのシチュエーションでバンドなぞ温いことは許されない。まかり間違ってもそんなことをしようものなら客席からはブーイングの嵐。翌日のスポーツ新聞には赤字で大々的なパッシングが待っている。プロの世界は厳しいぞ～。
「それ、セイにぃの頭の中だけじゃん」
「うるせっ。俺がいないからって練習サボんじゃねーぞっ」
釘を刺して、今度こそ俺は遠くへ飛ばしたボールを捜しに向かった。

（全く、我ながらよく飛ばしたものだ）
胸中で一人ごちりながらボールの散策をする。この公園は広いだけじゃなく、背の高い木も多く生息してる。ひょっとしたら木の上に……なんてことも充分考えられるので枝分かれしてる部分もしっかりと観察する。
「……むぅ……」
おかしい。あのボールの弾道ならそんなに遠くへは飛んでないと思ったんだが……誰かが知らずに蹴っ飛ばしたのか？　それとも公園で遊んでる子供の手に落ちたとか？　どれもあり得ないとは言い切れないが、今はそれよりボール探しが最優先。一応、あのボールは小野の私物だからな。無くしてしまえば弁償しなきゃならん。
「おっ？」
なんてことを考えながら探していた矢先、目的のボールは意外なところにあった。
公衆トイレの屋根。その上にちょこんと、申し訳なさそうに鎮座していた。なにか引っ掛けて取ろうにも長物になりそうなものは落ちてない。昔の公園なら棒切れ一本で勇者にもなれた俺が、今じゃ棒切れだけじゃ勇者になれなくなるとは……時の流れって奴は残酷だ。

少しばかりその余韻に浸るも、すぐにボールのサルベージに向かう。トイレから二メートルほど距離を取り、助走を付ける。
「とうっ！」
掛け声一つ。気合いを乗せて宙へ放り出された俺の身体はほんの数瞬の間、浮遊感に包まれる。その間に右手を伸ばして屋根の淵を掴む。ガツンッと、身体に軽い衝撃が襲うが余裕を持って耐えてから左手も淵を掴み、腕力だけでよじ登る。今でも欠かさず筋トレしてる俺に言わせりゃこんなの朝飯前だ。
何のための筋トレかって？　ほら、いざって時の為だって。引ったくりの現場に遭遇した時とか、か弱い女の子を不良から助けるためとかそういうシチュに遭遇してもいいように。
（うん？）
ふと、そこで俺は違和感を覚えた。ボールが違うとか身体の調子が悪いとかそんなものじゃない。なんかこう、トイレの下からゴソゴソと作業っぽい音が響いてる。聞き耳を立てて音源を探ってみると男子トイレからだった。
工事関係者か何かと疑りつつ、屋根の上から飛び降りて問題のトイレの方へ足を運ぶと――
「あっ……」
「……」
なんと言えばいいのだろう。つい目があってしまったと言えばそうかも知れない。が、俺が目撃した男たちは間違っても工事関係者ではない。じゃあ何者かと聞かれたら俺も返答に窮する。
まずは服装。一般的な私服はTシャツやワイシャツ、柄の入った長袖など様々だが概ねそんなとこだろう。だが彼らが着ているのはそういった服ではない。競泳で使われるような全身水着を服にしたバージョン。しかもより雑魚っぽさを演出するかのように服の模様はまるでガイコツ型の人体模型を移したような奴だ。見た目はアレだが、思った通りのことを言えばこれは戦闘服って奴だろう。それも特撮に出てくるようなタイプ。

「き、貴様……！　何者だ！？」
「いや、それはこっちの台詞だって」
つーかなに、何なんですかあなた達？　もしかしてこれ、特撮アニメの撮影現場？　でも今やってる特撮アニメにこんな服着た戦闘員が出てくるよーなのはやってないし……もしかして自主制作って奴？
「……ふっ、まぁいい。貴様が何者であれ、ここを見つけられたからには生かして帰す訳にはいかないからな」
「はっ？」
生かしておく訳にはいかないって……またえらく特撮アニメ的な展開だな。もしやこれ、どっかの映像研究部の撮影か？　が、そんな俺の予想を打ち砕くかのように下っ端らしき男が腰定めにあるホルスターから何かを抜き出してきた。
黒光りする鉄塊。何処か重量感があって、掌に収まるサイズの武器。あぁ、こりゃあどう見ても立派な銃だな。諜報員御用達っぽい外見なのがちょびっと残念だが……。
（いや呑気に構えてる場合じゃねーだろ俺！）
いち早く正気に戻った俺はショッカーばりの変態（今命名した）が人差し指を引くよりも早く動く。そして次の瞬間には銃口から何かが吐き出された。普通、拳銃ってのは銃弾を撃つものだが奴等が使ってるのはそういう物の類じゃなかった。それを肯定するかのように、引き金を引いた瞬間は発砲音がしなかった。マジで漫画の世界じゃねーかっ！
……一瞬しか確認できなかったけどなんか見た目とは裏腹にレーザーっぽい武器なんだな。当たったらやっぱ即死かな？
「こらお前！　大人しくしやがれっ」
「大人しくするかっ！」
棒立ちしてれば格好の標的になる。そのぐらいの常識は俺でも持ち合わせてる。よって今俺が取るべき最善の行動は逃走。逃げずに戦えって？　アホなことゆーな！　そりゃ確かに俺だって正義の味

方って奴に憧れてるしイジメられてる人間がいれば助けるけどな、今はそんな状況じゃないってことぐらい察して欲しい……！　武器も持たずに敵と戦うほど、俺は特攻野郎じゃないから！

トイレから飛び出すように逃げ出して、走りながら俺は周りを見渡す。遊具、樹、落ち葉、小枝、使えそうなものが何一つないというこの悲惨な状況……。あーくそ、素手で殴り合えってオチかこれは？

「へへっ。自分からわざわざ広いところに逃げるなんて、間抜けな奴め……」

うっせー、雑魚キャラオーラ全開のテメェらに言われたかねー！

つっても俺はその雑魚キャラ二名から必死で逃げてる訳だが……。

背中越しでショッカーが銃を構えた気配を感じる。やばい、今度は確実に撃たれるかと思ったその時だった。

「間に合ぇえぇッ！」

おおよそ、この場には似つかわしくない女の子っぽい声が響く。叫んだ側は切羽詰まった感じで言ったつもりでも、アニメの声優さんが叫んでる感じにしか聞こえない。

だがその叫びはただの叫び声で終わらなかった。俺がショッカー×二に撃たれるよりも一瞬早く、男たちが撃たれた。

「ぐはあぁあぁっ！」

「……」

いや、なんで撃たれたのにそんな如何にもっていう声を出すんだよ。なんかもう、本気でこれが精巧な特撮アニメの撮影現場なんかじゃないかと思ってきたんだが……。

なんてことを思いつつ女の声がした方を振り向けば日本人離れした容姿をした女の子が次世代型サブマシンガンを構えていた。あれって確かＰ９０っていう名前だったよな？　日本が定めた治安維持法は何処へいった？

「くそっ！　まさかこんな極東の地にまでお前らがいるとは……！」

「黙れ悪党！　この私の眼が黒いうちはこの国で好き勝手できると

思えば大間違いだ！」
　それ、絶対漫画の主人公が言いそうな台詞だな。けどこうやって派手な演出して登場するってことはこの女、特撮アニメのファンか？　でもさっき俺はショッカーの格好した奴等に殺されそうになったし……うーん。
　――なんて俺が呑気に考えている間にも彼女は動き回っている。
　動きやすさを重視したその服装は残念ながらパンチラとかそういうのは一切期待できないが、それよりも驚いたのは彼女の身のこなしだ。軽快なフットワークに無理のない動作。何より俺が目を奪われたのはそれら一つ一つの動きが綺麗に見えたからだ。
　動きの全てを言葉に表すなら跳ぶ、走る、構える、撃つの四つしかないだろう。しかしたった四つの動作しかこなしていない筈なのに俺は彼女の一挙一動に心を奪われていた。
（……一体全体、何がどーなってんだ？）
　ワンサイドゲームと言っても良いぐらい、少女とショッカー二名の戦力差は明らかだった。あいつ等が弱い訳じゃない、彼女が強すぎるんだ。呆気に取られながらしばし、目の前の光景に魅入るが男達は漸く諦めたのか、捨て台詞を吐きながら全力で逃げていく。……リアルで見るとシュールだ。
「――キミ、怪我はない？」
「えっ？」
　ふと、急に誰かに呼ばれたような気がして声がした方を振り向く。いや、正確には少し視線を動かしただけなんだが……。
「うわぁあ！　……いつの間に来てたんですか？！」
「今来たばかりだけど？」
　いや、そうだとしてもこんなに近くまで接近されても気付けなかったって、どんだけ放心状態だったんだ俺は。なんかもうさっきの出来事があまりに強烈すぎて自分がどうして公園にいるのかを忘れてしまいそうだった。
「そ、そっか……。で、俺に何か用でも？」

「どうしてここに居たの？」
「いや、どうしてと言われても……」
そもそも俺がここに来た理由は飛ばし過ぎたボールを捜す為だ。他意があってここに来た訳じゃないしあんなものを目撃することになるなんて露ほども考えちゃいなかった。
……果たしてこの説明だけで信じてもらえるだろうか？　いきなし口封じに殺されるなんてことはないよな？
「近所の子供たち集めて野球してたんだ。で、俺は飛ばしたボールを捜しにここまで来たところ、さっきのような状況になった」
「ふぅん。ゴールデンウィークなのに遊びに行ったりとかしないんだ」
いや、それはお前もだろ。世間じゃ大型連休に入れば友達とちょっと遠くへ出掛けたり家族で日帰り旅行したりするのが当たり前となってるが生憎とうちの家庭は違う。
あと今思ったんだけどコイツ、さっきと喋り方全然違くね？　雑魚っぽい奴と戦ってる最中は男勝りな口調だったけど今はもう普通の女の子っぽく喋ってるし……あれは戦いに対しての意気込みか何かか？
「――うん。キミの言うこと信じるよ。悪い人には見えないし」
「おう。税金も年金も納めてないがれっきとした善良な市民だ」
「あはっ。なにそれ」
軽いジョークで言ったつもりだったが、彼女はけらけらと笑った。どうやら俺のトークが受け入れられたようだ。高校の奴等じゃあ、こうはいかないからな。
「あのさ、一つ訊いても――」
「あっ、ごめんね。電話入った」
俺が質問しようとした矢先、彼女のポケットに入っている携帯が鳴り響く。なんと！　着信音は着信一という需要が全くなさそうな音だった！
「私だよ。……えっ？　でもそっちは――うぅー……分かったよ、

けど貸しだからね。それと私、今柊公園だから車出して。……分かった。じゃ」
何か慌しい感じのやり取りだったけど……家の人かな？　さっきは全然気にしてなかったけどこの女、身なりはかなり良いし、普通の女子とは思えない雰囲気がある。
「ごめん。もうちょっとだけゆっくり話したかったけど呼ばれちゃった。またね」
「ちょ、待って。君は一体……」
「私？」
走り去ろうとする彼女を俺は慌てて呼び止める。その願いが通じたのか、一メートルほど走ったところで足を止め、振り向く。
「……」
一瞬――いや、一秒ぐらいだろう。振り向いた時に見せてくれた彼女の笑顔が網膜に焼き付けられた感覚を今でも覚えている。なんてことのない公園の筈なのに、彼女が立ち止まり、笑いかけただけで世界が変わった気がした。
そんな、幻想的な世界から俺を引き戻したのは彼女が発した言葉だった。
「私は――正義の味方だよ」
たった一言。それは愚にも付かない言葉だけれど、それを口にした時の彼女はとても輝いていた。

（あれ、本気の自己紹介だったのか？）
ベッドの上で仰向けになりながら、俺は昼間の出来事を思い出していた。
正義の味方――彼女は確かにそう名乗った。
特撮アニメの世界じゃ当たり前のように普及してる職業（？）で、しかし現実世界においてはそのような人間はいないとされる存在。
俗に言う正義の味方って奴は多分、悪党を片っ端からやっつけるような人間のことを言うんだろう。そうでなくとも世の中にとって

正しいことをやり遂げられる人なんかも、きっとこっちにカテゴライズされるに違いない。
だが現実問題、正義の味方なんてものは存在しないと、俺の心は諦めたように囁く。確かにガキの頃はそれに憧れて、本気でなろうと特訓してた時期もあったけどいい加減、俺も現実って奴を見てしまうんだ。だから俺が今現在、目指す正義の味方ってのはきっとアイツから見れば絵空事でしかないに違いない。
冷静に考えてみろ？　あの時、咄嗟のこととはいえ、俺は満足に動けなかっただけでなく、満足に動くことさえ出来なかった。しかもそれっぽい女性にまで助けられる始末。恥もいいとこじゃねーか。
「……」
駄目だ、どうも調子が狂っちまう。彼女は正義の味方なんかじゃないって一蹴すればそれで済むような話なのに、俺はそれを頑なに否定してる。何も出来なかった自分が悔しいのは確かだが、ワクワクしなかったと言えば嘘になる。
例えるならテレビでしか会えないアイドルを間近で見て、話が出来た時の高揚感。誰しもブラウン管の向こう側にいる憧れの人と道端で会うなんてことは考えないが、いざその瞬間に立ち会えば驚きと感動でいっぱいいっぱいになる。俺の場合、状況が少々特殊だったせいでそうした感情を肌で感じることが出来なかったものの、時間が経つにつれてすごく貴重な体験をしたと思うのだが――
（彼女が戦ってるのって、やっぱり悪の組織って奴？）
特撮モノのヒーローが戦う理由は大抵、悪の組織が世界征服だの何だの、そういう物を企んでいて、それを阻止するのが王道だ。とすれば、彼女もまたそうした王道的な敵と戦っているのだろうか？
一瞬、そんな考えが浮かんだが――流石にそれはないだろうと思った。日本に限った話じゃないが先進国の警察機関はドラマのように幹部連中が腐敗してる訳じゃない。数人単位の規模で活動してる組織なら……まぁ、どうにか警察の目を欺くことは出来なくはないだろう。が、構成員の数が多くなればなるほど、そうした隠蔽は難

しくなるし、現実的な問題（分かり易い例を挙げるなら金）に直面し、やがて警察沙汰となる。認知度は低いけど日本の警察ってのは基本的に優秀だからな。

「……はぁ……」

訳も分からず溜め息を付く。この悶々とした思いを一体どうやって吐き出せばいいのか分からず、ベッドの上でごろごろしてる俺。しかしいい加減、思考の堂々巡りに飽きたので身体を起こして部屋にあるテレビの電源を入れる。キリよくバラエティ番組が終わり、今日一日の出来事を総括するニュースが流れた。

行楽地で窃盗、人が死んだ、年金未納云々、エトセトラエトセトラ……。

世間に感心がないって訳じゃないがさして興味のない俺はそれらの出来事をぼんやりと聞きながら机の周りを整理する。部屋はわりと綺麗に片付ける方なんだが同時に教科書やプリント類をその辺に置きっぱなしにしがちな俺は数日置きに部屋の整理をしなければならない。気分転換も兼ねられるから俺には丁度いいと思ってる。

『――今日の午後四時一五分頃、東京都新宿区二丁目にある雑居ビルで、極めて小規模な暴動事件が起こりました』

（……？）

学校から出されたプリントを一纏めにして、いつでも取りかかれるように机の上におこうとした時、ふと気になるニュースが俺の耳に飛び込んできた。都心――それも雑居ビルで暴動事件？　違法風俗店の検挙とかじゃなくて？

『現場は幾つかの弾痕と、刃傷の跡がいくつか残っており、雑居ビル三階で仕事してた人によりますと、五分ぐらい暴れる音がしてからピタリと止んだと話してます。警察では、暴力団組織の内部抗争と見て――』

「……」

そのニュースを見た時、俺の頭に浮かんだのは昼間の出来事だった。考えすぎかも知れないが、何となくその事件には彼女が絡んで

いるように思えてならない。けどあの娘が使ってた武器は銃弾じゃなくてレーザーだったし、刃物を使う素振りも見せなかったから俺の思い過ごしってことの方が充分考えられる。ちょっと珍しい事を体験したからと言って何でもかんでも関連性を持たせようとするとかどんだけ影響受けやすいんだよ、俺……。

（ただの偶然だろ。なに意識してんだ……）

仮に今回の事と関係があるとしても、だ。恐らくもう二度と、俺の生活圏に彼女が関わるとは思えない。思えないが――そのことを意識すると俺の心には小さな失望感と大きな虚無感で埋め尽くされてしまう。

「また会えないかなぁ……」

ペンを止めて、別れ際に見せた笑顔を思い浮かべる。

正義の味方――そんな存在、現実世界にある筈がないのに、俺は未だにその存在に憧れを抱いていた。

出会いは突然やってきた（後書き）

初めましての方は初めまして。そうでない方は銀レウス書けとか言わないで下さい。
この作品は私が初めて完成させたオリジナル小説なんですが訳あって陽の目を見ることがありませんでした。で、今日ふとこの作品の存在を思い出したのでこのサイトに投稿しようと思い、黒歴史の一部として公開しました。加筆とかはしません。というかめんｄ（ｒｙ修正ぐらいはすると思いますが本当、拙い作品ですので暇潰し程度に読むことを推奨します。マジで……。
でわでわ～。

転校生は正義の味方だった（前書き）

この作品に限って前書き必要か？　と思いつつ二話目を投下。
改めて読み返してみると確かにこの作品、とっつきにくい上にインパクトも薄いなぁと反省。

転校生は正義の味方だった

楽しかったゴールデンウィークもあっという間に終わり、登校日がやって来る。うちの高校は他の学校よりも一学期の中間が早く、ゴールデンウィーク前にテストがあって休み明けに答案用紙が帰ってくるという仕組みだ。

「ふぁ、ぁ……」

まだ脳の一部が覚醒してないまま、通い慣れた通学路を歩く。周りも皆、俺と同じように眠たげな顔をしている生徒がチラホラいる。学校があると分かっていながらつい、休みと感覚で遅くまで起きて要らぬ早起きをした結果がもたらしたものだろう。

だが、日々の習慣というのは実に面白いもので、どんなに意識がハッキリしなくとも毎朝、同じ時間・同じタイミングでやって来る存在に対しては鋭敏な反応を見せるものだ。

「うぉっ！？」

後ろから聞こえる軽快な足音。それを聞いただけで俺は反射的に身体を屈める。次の瞬間には頭上を何かが通り抜け、俺の横を女子生徒が軽やかに通り過ぎていく。

「むむっ、腕を上げたな」

「量産型とは違うのだよ」

無遠慮にラリアートをかましてきた上級生に向かって、ニヒルな笑みを浮かべながら俺は言ってやった。ふふん、俺の隙を突いたつもりだっただろうが俺の後ろはそう簡単には取れないぜ？

「じゃ、改めておはよ、せい聖ちゃん♪」

「いつも思うけど普通に挨拶しないんですか、燈華先輩」

「正義の味方たるもの、何時如何なる時でも冷静に対処できなきゃ駄目だぞ♪」

これっぽっちも悪びれた様子もなく、ウィンクしながらからかうように言ってくるこの人は二年生の五十川燈華。燈華先輩とは幼馴

染み――という訳ではなく、中学時代から付き合いだしたガールフレンドってとこだ。見た目のルックスも去ることながら、行動力もあるだけでなくとにかくあらゆる物事に対して前向きな姿勢でいる。
　例えば学生の誰もが忌み嫌う定期テスト――それさえも彼女からすればイベントの一つでしかなく、友人たち（何故か学年違いの俺も誘われる）とテストの点を競い合って総合点の低い子に罰ゲームを課したりと……まぁ有り体に言えば彼女は青春って奴を誰よりも謳歌してるんじゃないかと俺は思ってる。これで料理も得意というから世の男たちからすればまさにレベルの高い娘であることに違いはないが――如何せん彼女はあまりにもパワーがありすぎるだけでなく、我が校の野球部の四番相手に五連続三振をした話は今でも伝説となってる。……いや、これは単にうちの学校の野球部が弱いだけなんだが流石の俺も毎日野球やってる奴等が素人相手に三振するのはどうかと思うけど。
「聖ちゃんはゴールデンウィーク、ずっと遊び通し？」
「宿題ならちゃんとやりましたよ。そういう燈華先輩は？」
「家でゴロゴロしたりお菓子作ったり、そんな感じかな」
「なんて不健全な」
　これは由々しき事態だ。ゴールデンウィークというものを完全に舐めきってるとしか思えない暴挙ではないか。あの青空が顔を覗かせ、心地よい汗をかくのにはまたとない日々を、家でゴロゴロしながら過ごすとは……ッ！
「先輩がそうしてると知っていれば野球誘ったんですけどね」
「聖ちゃん、相変わらず近所の子供たちに人気だよね～。もう親御さんたちに顔覚えられてるでしょ？」
「いや、親に会ったことはありませんよ。遊ぶのは基本、外ですから」
　ただし、親子との会話の折に俺の名前が出てもおかしくはないが。お互い、面識なんてないがガキ共の話から推察するところ、あいつ等の親は共働きではないかと俺は睨んでる。家族旅行に行ったとか

そういう話をあまり聞かないから勝手に俺が推理しただけだが。
「あ、でも休み中に一つだけ大きなニュースがあったよ」
「また河川にアザラシが迷い込んだんですか？　個人的には捕獲したいところですけどね」
「どう考えても素人には無理でしょーが！」
燈華先輩の一喝と共にビシッ！　という効果音が付きそうな勢いでチョップしてくる。相変わらず手が早いことで……。
「全く……どうして聖ちゃんはそうやって話の腰を折るワケ？」
「人聞きが悪いですね。ただちょっと先輩をからかって楽しんでるだけじゃないですか」
「余計に性質悪いわよっ！」
やれやれ、これが俺流のコミュニケーションだってのに何故この人は冗談というものが通じない。と言っても俺の友好関係じゃ燈華先輩が一番付き合い良い方だからまだマシな方かも知れないけど。
「それで、何か先輩の興味をそそられることでも起きたんですか？」
「今頃真面目な顔しても遅いんだから」
「酷いわっ。あれだけ勿体つけてこっちの興味を引き付けておいて飽きたらすぐにポイ捨て！　私のことを弄んで楽しんでたって言うのね！？」
「うん」
「嘘でも否定してぇえ！」
「私が聖ちゃんのこと弄ぶワケないじゃない。嘘だけど」
「爽やかな笑顔を向けながら嘘というあなたが憎らしいいいっ！」
畜生、朝から俺の純情なチルドレンハートをメッタ打ちにされるとは……流石の俺もこいつぁ想定外だったぜ。だがな、俺もいい加減いい大人（未成年とか言わない！）だ。ここは一つ、大人の余裕を持って――
「あんまり子供っぽいと絶好しちゃうよ？」
「ハイ、ゴメンナサイ……」
女尊男卑とはよくぞ言ったものだ。一昔前なら男が強かったが今

は女が強い時代になりつつある。別にそれが悪いこととは思わないが――なんかこう、男としての面子というよりも頼られる感がなくなるってのは何処か寂しく思う。
　利用されるだけだって？　バカとハサミは使いようって言葉があるだろ。そんなのは全部解釈一つでどうにでもなるもんさ。勿論、俺に利用されて喜ぶ趣味はないけどな！
「で、始めに戻りますけどマジで何かあったんですか？」
「うん。一言で要約するとね……」
「……」
「おっと、そろそろお別れの時間がやってきましたのでこの話は次回ということで」
「焦らしプレイ！？」
「嘘々。なんかね、一年のクラスに転校生が来るみたいだよ」
「来るみたいって……どうして先輩がそんなこと知ってるんですか？」
「うん。昨日ちょっと学校に置きっ放しにしてたノート取りに行った時にね、職員室の前を通ったらなんか見慣れない娘がいたの。で、先生に聞いてみたら休み明けに編入してくる転校生だって教えてくれた」
「ほぅ……」
　転校生か。この時期……というかこんな町にやって来るなんて少し意外だな。うちの学校のレベルって中の中だし周りに良い高校なんてそれこそ沢山あるからわざわざここを好んで選ぶような奴は少ない。寧ろ滑り止めとして受ける奴が大半だ。かくいう俺は徒歩圏内で通えるのと必死に勉強しなくても入れそうという理由で選んだのはここだけの話。
「実は訳アリの転校とかだったりして？」
「アニメの見すぎだよ、聖ちゃん。……まぁ、見た感じ育ちは良さそうだったからあながち嘘とも言い切れないけど」
「そこに誰もが知ってるようなナントカ家のお嬢様というオプショ

ンが付けば完璧だな」
「まっ、どっちにしても僕にはあまり関係ないし。寧ろ聖ちゃんの方が重要なんじゃない？　あの娘と一緒のクラスになれたらいいなーとかさ」
「当たり前じゃないですか」
普通に考えて人生のうちに転校生になるのも紹介されるのも滅多にない機会だ。違う町から来た同じ年の生徒――たったそれだけでそいつはまるで俺達とは違った世界から来たような不思議な魅力がある。これで転校生が外人さんなら尚良いのだが流石に留学生とかいうオチはないだろう。外国人が住むような環境じゃないし。
そんなことを燈華先輩と話ながら歩いていると既に俺達は昇降口前まで来ていた。時計の盤に目を落とすと二〇分を少し過ぎてる。歩いて教室へ向かっても予鈴がなる前に到着するな。
「じゃ、聖ちゃん。また後でね～！」
一足早く上履きに履き替えて、爽やかな笑顔を残して立ち去り――いや、何か思い出したかのように先輩は階段前で急停止すると綺麗に一八〇度ターンをして駆け寄ってくる。何をしてくるのか分からず、反射的に身構える。そんな俺を無視し、先輩は三歩手前で失速し、かと思えばいきなり軽く踏み込みを入れて飛びついてきた。
「えいっ♪」
「はっ？」
思考停止。再起動までしばらくお待ち下さい。
……。
よし、自分がどういう状況に置かれてるかもう分かった。
軽く踏み込んで飛びついてきた先輩はそのままラリアートをする訳でも空中飛び膝蹴りを放つ訳でもなく、俺の腕に絡み付いてきた。それも部分的な発育が宜しいあれをそっと押し付けて。
「未遂だけど、襲ったお詫びね♪」
「……」
いやその……何といいますか、いくら親しい人であってもこうい

う状況に陥れば俺も男としてどう反応すればいいのか困ってしまうんだが？　しかも先輩はそうした懸念を見透かしてるかのように面白さを堪えるように笑ってる。……全部計算尽くしって訳か。
「じゃ。今度こそバイバイ、聖ちゃん！　転校生に浮気しちゃ駄目だぞー！」
「いつから先輩と恋仲になったんですかッ！」
俺の反論を右から左へ受け流し、けらけら笑いながら自分の教室へ向かっていく先輩。あの人、本当は休み中どっかで遊びたかったんじゃないのか？　普段よりずっと激しく絡んできたってことは遊び足りないってところだろうな。
（次からは先輩も誘っとくか）
あの人、ああ見えて少し意地っ張りだからなぁ。寂しくないって嘘言うよりも寂しくない振りをしつつ、気付いたら輪の中に入ってたりするし。それに先輩はあれでも子供はわりと好きな方だし面倒見もいい。流石に俺みたいに年下相手（それも小学生）としょっちゅう遊んだりはしないけど遊びの誘いってことなら多分、乗ってくるだろう。基本的に騒ぐの大好き人間だからな。
そんなことを考えながら俺は真っ直ぐ自分の教室――へは行かず、職員室の方へ足を向けた。呼び出しとか学級日誌を取る為とかそういう理由じゃない。もしかしたら転校生の顔を拝めるかも知れないと思ったからだ。
が、しかし。世の男共が考えることはいつの時代もやっぱり同じらしい。
（いやはや、これは……）
昇降口で先輩と話しこんでいた時からやけに騒がしいは思ってたがそれの正体がこれだったとは。
職員室の前は俺と同じように転校生がどんな奴なのか人目見ようと男子六：女子四の比率ですし詰め状態だった。しかも周りの反応からすると燈華先輩の言う通り、転校生は女であるらしい。出来ることなら顔もみたいとこだが流石にこの人山相手に分け入るのは至

難の業だ。それにそろそろ予鈴が鳴る頃だし。
「はぁ……」
一抹の無念を残したまま、教室へ向かう俺。引きずってる訳じゃないが楽しみにしてたものが期待通りにいかないとガッカリするよな？　今の俺はまさにそんな気持ちだ。つってもまだ望みはあるから悲嘆するには早い。運が良ければ俺のクラスに転校生がやってくる、という展開もなくはないからな！
予鈴がなるぎりぎりの時間に教室へ入る。別に規則がどうこうという理由で予鈴を気にしてる訳じゃないけど……ほら、たった五分だけでも宿題やノートの見直しとか今日やる授業の予習ぐらいは出来るだろ？　無論、休み時間は遊ぶ為に存在するようなものだが。
話しかけてきたクラスメイトに軽く挨拶を交わしながら自分の席に着き、早速昨夜やった宿題の見直しをしようとしたところで、新たに近づいてくる気配を感じ取った。
「珍しいじゃないか。皇がこんな時間に登校してくるとは」
「そうか？　いつもより少し遅いだけだろ？」
やれやれ……どうしてこいつは男と話す時は常に上から目線なんだ。高圧的な態度じゃないからまだマシな方だけどよ。
「まっ、君のことだから大方、職員室にでもよって噂の転校生がどんな子なのかチェックしてたんだろう？　あぁそうさ、きっとそうに決まってる……。君の考えることを言い当てるなんて造作もないことだからな」
いや、半分ぐらいしか合ってねーから。それに遅れた理由は燈華先輩に絡まれたからだ。
「今日は随分と機嫌がいいな、喜多川」
少し興味ありそうに言いながらもせっせと見直しを進める俺。
この男――喜多川宗谷と俺は腐れ縁という間柄だ。悪人ではないが御覧の通り、男に対してはこういう態度で接してるせいで男友達はあまりいない。が、女性に対してはわりと紳士的に振る舞う。しかも実家は金持ちと来てるからまさに女受けは良い。お陰で男友達

が俺だけというのが現状だがこいつはこいつで面白いトコがある。
少しばかり世間知らずなところとか。
「俺の機嫌がいいのは当然さ。なんと言っても今日、このクラスには転校生が来るからな」
「へぇ、そこまでは知らなかったな。……で、それとお前の機嫌とどういう関係があるんだ？　正直意味がワカラン」
「やれやれ、これだから小市民は……」
仕方がないなぁとでも言いたげに肩を竦め、やれやれとばかりに溜め息を吐く。そんな仕草を見て俺は――
「いや、別に興味ないから説明しなくていいぞ」
「……」
何気なく言い放ったその言葉がよほどショックだったのだろう、喜多川は表情を引きつらせ、額から脂汗をダラダラと流す。なんとも器用な奴だ。
「き……興味が、ない？　ははっ……なにを強がるというのだキミは……。俺はこう見えて寛大な人間だ、素直に気になると言えば教えて――」
「や、そこまでして知りたいとはこれっぽっちも思ってないから」
突き放すように言いながらぱらぱらとノートを捲る。ワンパターンと言うか、何と言うか……ここまで予想通りの反応だとマジで弄り甲斐がなくなるから突っ込み側も反応に困るんだよ。と言ってもコイツに言わせれば自分がボケ役になったことなんて一度もないそうだが。
「もういいか？　出来ればそろそろノートの見直しがしたいのだが？」
「……ふっ、ならここは特別に――そう、特別に！　説明してやろうではないか。なにせ今日の俺は機嫌がいいからな！」
だから誰も頼んでねーって。まぁここでそんな野暮な突っ込みを入れるほど俺も鬼じゃあない。ここは一つ大人の余裕を持って大人しく聞いてやろうではないか。あー、俺ってばチョー紳士。

「聞くところによれば我がクラスにやってくる転校生は女性だと言われている。それも家はかなりの金持ちらしい。教師達も何故こんな共学を転校先にしたのか不思議がってた程だ」
「いや、全然話見えないんですが……」
「そしてこの学園の中で、恐らく彼女が心置きなく話せる同族となれば、この俺のように家柄も人柄も申し分ない人間と限定されてくる。……分かるか、皇？　例えどれだけ野郎共が群がろうとも、所詮俺の敵ではない、ということさ！」
「いや色々と前提条件おかしいだろっ！？」
あれか、コイツの言ってることを要訳するとこうか？　うちのクラスにやってくる転校生は名のあるお嬢様。世間知らずな彼女は群がる男子に怯えまくる。そこでこいつが颯爽と現れて優しくエスコートするみたいなことをガチで想像してるのか？
「……」
あれ、何故だろう。なんか今そのシーンを想像したら喜多川がとんでもなく痛くて可哀相なキャラに見えてきた。俺の想像の中じゃ喜多川はその謎の転校生に一蹴されてあっと言う間に両手両膝を着いて項垂れる姿しか目に浮かんでこない。
「むっ？　どうした皇、急に黙り込んで？　さてはキミも俺のように転校生狙いだったのか？」
「安心しろ。お前なら玉砕確定だ。俺が保証しよう」
「ふっ……そうやって余裕ぶってるつもりだろうが、この俺が相手では分が悪いと危機感を覚えたのかな？」
「なに。傍観者の余裕って奴さ」
確かに俺も転校生に興味はある。そこは認めよう。しかしだからと言って喜多川みたいにいきなし口説きに掛かるほど、俺は軽薄な男じゃない。じゃあ恋に慎重かと言えばそうでもなく、まだまだ恋より遊びを優先したいお年頃だ。周りの奴等に言わせればそれは青春という輝かしい時間を無駄にしてるらしい。別に自分のやりたくないことをやってる訳じゃないし俺にとってはこうしてるのが一番

自然だから無駄にしてるって気持ちはないんだけど……むぅ。俺ってばそんなに奇人に見えるのか？

「傍観者……。そうかそうか！　キミもようやく俺との実力差を思い知ったという訳か！　あぁそうとも、君と俺とでは生まれも育ちも違うんだ。能力に差が出てしまうのは当然のことだ」

「あぁ、お前は（馬鹿という意味で）凄い奴だ、それは俺が保証しよう。……けどよぉ、この前体育の授業でやった五〇メートルの計測じゃ俺より一秒近く遅かったのは俺の気のせいだったかな？　足に自信のある喜多川君より、俺の方が早かったのも気のせいだったのカナ？　んっ？」

「……」

そう言われると反論する余地がなくなったのか、再び言葉を詰まらせる喜多川。おーい、生まれも育ちも違うんだろー？　だったらもうちょっと粘りとか上手い切り返しを見せたってもいいじゃないか。

「……ふっ、確かにあの時は俺の負けさ。しかし皇、お前は勘違いしてないか？　仮にも陸上は俺の本分だ。あの時、俺の得意分野であるにも関わらず負けたのは単に調子が上がらなかったからさ。人間誰にでも調子が悪い時はあるからな」

「もう少しマシな言い訳でもしたらどうだ？」

正直な話、今のはあまりにテンプレ過ぎてまったく笑えないどころか突っ込みすら出来なかったのが率直な感想だ。俺ならもっと上手く切り返せる自信がある。

例えば――

『よく思い出せ、あの時お前のタイムを計測してた時は追い風で俺の時は向かい風だった。それもスカート下の楽園が垣間見える程に強烈な風だ。そして俺は不覚にもそのパラダイスに目を奪われてしまったのだよ』

うむ。我ながら素晴らしい言い訳だ。それこそ燈華先輩ならノリノリで突っ込みを入れてくれるぐらいの出来栄えだと断言できる！

「分かるかね皇？　あの時キミが俺に勝てたのも所詮はただの――」
「喜多川、先生来たぞ」
一人勝手に熱弁する喜多川に釘を刺すよう、俺は黒板の方を指差す。ちょうど本鈴が鳴り、教室に担任の藤原奈津美が入ってきた。グレーのスーツに凛とした空気を纏わせての入室は、それだけで周りの喧騒を静まらせる迫力がある。
「よーし、全員席に着け！　特に男子、気持ちは分からなくもないから今回は大甘で見逃してやるが次にやったら内申に響くからな。覚悟しておけ！」
『しゃすっ！』
どんな挨拶だよ！　……と、思わず突っ込みを入れてしまう人もいるかも知れないがこれで生徒から見た藤原先生に対する評価というものが分かっただろう。基本、先生は規律を重んじるタイプだがどこかのお偉いさんみたいにネチネチと注意したりするような人じゃない。あくまで一般社会における常識を守るようにと生徒に指導してる。具体的な指導法は――体育会系みたいなノリと言っておこう。体罰じゃないぞ？
しかも藤原先生はただ厳しいだけじゃない。今時の教師にしては珍しく、生徒の悩みを真摯に受け止めて相談に乗ってくれるから生徒受けもよければ保護者からの評価も悪くない。
「はぁ……。この様子じゃしっかりと情報が回ってるようだし、今更前置きする必要もないだろうが――今日からウチのクラスに転校生が来ることになった」
今更その言葉を聞いても声を挙げてはしゃぐ生徒は誰一人としていなかった。藤原先生の話の腰を折った生徒はもれなくタイヤ引きグラウンド二十週というペナルティが待ってるからだ。因みに俺は過去一度体験してるが……あれは地獄だった。引っ張るタイヤが軽自動車用じゃなくて運送用トラックだから想像以上にキツかったのも今ではいい思い出だ。
「夜城沙耶、入って来なさい」

藤原先生に呼ばれ、件の転校生が静かに教室へ足を踏み入れてくる。女子の半分近くは値踏みするように観察し、男子の大半は拍手で迎えて――あれ？
（あいつが、転校生？）
どんな娘が来るのか楽しみにしてた俺だが、相手の姿が目に移った時、転校生への興味よりも驚愕が俺を支配した。
金紗色の長髪。正義の味方だと言った時に浮かべたあの笑顔。数日前あったばかりなのに、酷く懐かしく思える。
「……」
一度だけ、こっそり頬を抓ってみるがどうやら夢ではないようだ。しかしそれでも俺はまだ半信半疑だった。
だって、よりにもよって彼女が――ゴールデンウィーク初日に偶然出会ったあの娘正義の味方が転校生だったなんて……。流石の俺もこの展開は読めなかったぞ。
「今日からみんなと一緒のクラスになりました、夜城沙耶です。日本国籍持ってるけど海外暮らしが長かったからちょっと世間知らずなところがあるかも知れないけど良かったなら仲良くしてると嬉しいです。宜しくお願いします」
あー、つまり帰国子女って奴か。けど日本国籍持っていながら海外暮らしが長いってのは少し珍しいケースかもしれんな。いや、単に親の都合で海外に居たってだけかも知れないけど……。
「あー、何人かの生徒は気付いてると思うが彼女――夜城沙耶は、、あの夜城家の令嬢だが本人は至って普通の友好関係を所望してる」
藤原先生の説明を聞き、何人かの生徒はおぉーっと、純粋な驚きの声を上げる。俺も苗字を聞いた時は“まさか、な……”という程度の気持ちでしかなかったが……そうか、彼女はあの夜城家の娘だったのか。そりゃ全身から発せられるオーラが俺達庶民とかけ離れてる訳だ。
夜城家ってのは多くの食品企業を傘下に取り入れた名家であると同時に地元地域の活性化に尽力を注ぐことで俺達庶民の味方として

認識されてる財閥だ。具体例を挙げるなら失業者対策。過日オープンしたばかりの大型洋服店は失業者限定で雇用したってのは記憶に新しい。

それにしても――

（正義の味方で金持ちって、組み合わせ的に変だろ……）

その点だけが唯一の気掛かりと言えるのは恐らく俺だけだろう。そもそも金持ちと言えば普通、真っ先に思い浮かぶのが世間知らず、もしくは経営上手で常に黒服のガードマンに両脇をガッチリ固められてるイメージが強い。

けど今、俺たちの目の前にいるお金持ちのお嬢様にはそうした印象がまるで感じられない。確かに何気ない仕草や身体から発せられるオーラ（いや、あくまでそう感じるだけだ）は本物の匂いがするけど言動や身振り手振りでクラスメイトたちからの質問に答える彼女の動きは何処か庶民臭い。

（本当に何者なんだ、あの娘？）

五月上旬――それは俺の生活に新しい風を吹かせる切っ掛けとなった出来事だった。

中休みの間はとにかく話しかけられる状態じゃなかった。転校生が金持ちで美少女と来れば他のクラスや二年、三年も物珍しさに群がる始末。俺が彼女の立場なら間違いなく胃潰瘍辺りに悩まされるだろう。

が、そんな俺の些細な心配は杞憂らしく、夜城は笑顔で一つ一つの質問に答えていく。

好みの男性は？　どの国が一番印象的だった？　日本と海外との文化の違いは？　ナドナド……。

夜城に投げかけられた質問の数なんて、それこそ挙げたらキリがないが……まぁ彼女への質問会は概ねそんな感じだった。

（転校生も大変だな。初日から蝶よ花よと群がれちゃあ気疲れもするだろうな）

三時限目の中休み。俺は教室から離れ、食堂に設置されてる自販機まで来ていた。前の時間が体育だったこともあってか、結構喉が渇いてる。五百円硬貨を投入し、五〇〇ミリサイズのスポーツ飲料水を購入して教室へ向かおうと踵を返そうとして――

「あれ、燈華先輩？」

「ハァーイ、聖ちゃん。ご機嫌いかが？」

宮仕えよろしく、何処かの君主に仕える従者のようなノリで挨拶してきたのは燈華先輩だ。この時間帯に食堂に居るなんて珍しいな。いつもは自前の弁当と水筒を持参してるんだが……。

「先輩も飲み物ですか？」

「そっ。今朝はこの燈華ちゃんともあろうことに二度寝をしてしまった訳なんですよ～。ボクとしては出来る限り出費を抑えたいのですが喉の渇きを潤したいという欲求には勝てずにこうして食堂まで足を運んで来たって訳♪」

「あー、確かに二度寝ってすごく気持ちいいですよね」

例え時間が迫っていると分かっていても俺達みたいな人間はどうしても睡魔に打ち勝つことが出来ず、ちょっとだけと自分に言い訳しながら寝てしまうんだよなぁ。因みに俺は二度寝する為だけにわざわざ時間差で目覚ましをセットしてたりする。これのお陰で学校に遅刻するようなことはないが毎朝ゆっくり過ごせないのが玉に瑕だ。下手すりゃ朝食取る時間さえなくなるからだ。

「で、どうだった聖ちゃん？」

「どうって……燈華先輩ならもうチェック済みじゃないんですか？」

「焦っても転校生は逃げやしないよ。それにボク個人としては聖ちゃんの評価も気になるからね」

「なんだ。妬いてるなら素直にそう言って下さい」

「ふ、ふんっ！　今更ボクが一番だって言ったって遅いんだからねッ」

おぉ、流石は燈華先輩。咄嗟にネタを振ってもものの見事に切り返してくる。これが喜多川だったら絶対にこうはいかないから結構

嬉しかったりする。
「まぁ、俺個人の評価ですけど結構レベルも倍率も高いと思いますよ。受け答えもしっかりしてましたし」
なんと言っても夜城の奴、飛び級で大学卒業してるって話だ。飛び級で卒業してるならわざわざ日本の高校に通う必要なんてない――と思ったがその理由は単に日本に興味があったから、と本人は言ってた。
勿論、凄いのは勉強面だけじゃない。さっきの体育で女子はバスケをやってたんだが敵チームが放ったボールをリバウンドして、そこから一気にフィールドを駆け抜けてレイアップを決めたその姿は――正直、スッゲー格好よかった。夜城の運動力が優れてるのは公園での一件で知ってたけど比較対照があると改めて能力の高さを実感する。
そのことを先輩に打ち明けたら――
「ふーん。つまり、聖ちゃんの好みの娘ってこと？」
「なんでそうなるんですか？」
「だって、沙耶ちゃんのことを話してる時の聖ちゃん、結構楽しそうだったから」
それは……確かにそうかも知れない。けどその理由を話したところで先輩に信じてもらえるとは欠片も思ってないし、だからと言ってはぐらかして説明しても更に追及されるのは目に見えてる。本当のことが言えないって結構もどかしいもんだな……。
「そりゃあ、確かに夜城ぐらいレベルが高ければ目に留まりますけど、それはあくまでアイドルに恋するのと同じ感覚ですよ」
「とか言っちゃって～。本当は彼女のことが気になって仕方ないんじゃないの～？」
むっ。意外と鋭いな、先輩。なるべく顔に出さないよう勤めてた気でいたんだがどうもこの人の前じゃ半端な隠し事はあまり意味をなさないようだな。
「そういう燈華先輩こそ、俺が夜城と仲良くのが面白くないように

感じられるのは俺の気のせいでしょうかね？」
「うん。だって聖ちゃんがかまってくれないとからかう相手がいなくなるでしょ？」
　そんな理由で俺に絡んでたんですか、先輩！？　俺はいつから先輩の玩具になったんですッ！　少なくとも俺は弄られキャラなどでは断じてない！
「先輩なら俺以外にも男友達いるでしょ？」
「もぅ、聖ちゃんのいけずぅ。そんなんだから女の子の間じゃイイ人止まりだって自覚してるの？」
「今はまだ愛より遊びを優先したい年頃なので」
　自分でも何故そうなのかは分からないが、気付けば俺の友好関係は男女共に幅広いものになっていた。それは近所の子供と遊んでるうちに顔を覚えられたからかも知れないし、学校のスポーツ大会で積極的にチームを引っ張っていたことで目立ったからかも知れない。どっちにしても切っ掛けはそれこそ無数にあって、自分でもよく分からないうちに燈華先輩や喜多川を始め、色んな奴に顔を覚えられるようになった。つっても、本格的に異性と付き合ってる人（友達付き合いって意味だぞ？）と言えば燈華先輩ぐらいだったりする。喜多川は……まぁ、悪い奴じゃないがあいつは部活以外じゃ男と遊ぶよりも女と遊んでることの方が多い。一応、あんなんでも女子にも人気あるし。
「愛より遊びか……。ま、聖ちゃんらしいと言えばそれまでだけど、いつもそんな調子でいると女の子から告白されても知らぬ間に恥を掻かせることになっちゃうぞ！」
　言いながら、燈華先輩は出来の悪い弟にお仕置きするかのように額にデコピンを一発、入れる。爪の先っちょが掠って地味に痛い……。
「じゃ、ボクはそろそろお暇するけど聖ちゃんも早く戻った方がいいよ？　お姉さんとの約束だぞ♪」
　最後にそんな冗談を言い残して、先輩は軽い足取りで食堂を去っ

ていく。結局先輩は何が言いたかったんだ？

振り回す少年と振り回される少女（前書き）

区切るタイミングが分からず長くなってしまいました。一定の間隔で各話投稿できればいいんですが……難しいものです。（―　―）

振り回す少年と振り回される少女

昼休みを迎えた頃になってようやく転校生に群がる男子共は落ち着きを見せた。が、それでもこれ見よがしに一緒に食事をして距離を縮めようとする輩は後を絶たない。男って本当単純だと思いつつ、俺にはあまり関係のないことだと割り切って他の生徒に混ざって真っ直ぐ食堂へ向かう……筈だった。

「そこの人、待ってっ！」

「ん？　……夜城じゃないか」

表面上、何気なく声を返した俺だけど内申じゃ結構驚いている。三日前に公園で見た時から綺麗な娘だと思ったけど改めて近くで見るとやっぱ綺麗だなー、夜城って。

（むっ。いかんぞ俺。ここで顔がニヤけたらキショイ男ランキングに入ってしまうぞ）

例え俺がバリバリイケメンだったとしても人の顔を見ていきなり表情が緩んでしまうのは相手に変な印象を与えてしまう。ここは一つ、気の利いたジョークでも言ってフレンドリーなクラスメイトだという印象を与えておくか。

「ふっ……まさかそっちから尋ねてくるとはな。少々驚きだぜ」

「うん。私もキミに……えーっと……」

「皇聖だ。始皇帝の皇に聖人君子の聖と書く。……さて、夜城沙耶。君が直々に俺の元に訪ねて来たということはやはり例の件についてだろう？」

「……皇君。あなた、もしかして……」

「ご明察。君の想像通り、俺は……正義の味方だ」

「そう、正義の味方――て、あれ？」

と、ここでようやく俺が冗談で会話をしていることに気付いたらしく頭上にクエスチョンマークでも浮かべそうな勢いで首を傾げて、考え込んだ。

しかしなんだ。ちょっと漫画っぽく正体を明かすような展開を作ったんだが天然で話合わせてくるとかどんな偶然なんだ。こっちは夜城がノリノリで合わせてくれてるとばかり思ったからちょっと演技に熱入れちまったぞ。

「皇君……。今のって……ただの冗談？」

「程度の軽いコミュニケーションだ。難易度はそれぞれアマチュア、ノーマル、プロフェッショナルの三つから選べる。因みに今のはアマチュアレベルな」

「いきなりそんなの言われたら誰だって反応に困るよっ」

なんと！　最近の若者は冗談をコミュニケーションの一種として取り入れないというか……！　ゆとり教育の弊害は学力低下だけでなく一般教養にまで浸透してたとは……俺の読みが甘かったかッ！

「はぁ……。今のは聞かなかったことにしてあげるからさ、代わりにちょっと付き合ってくれない？　あ、もしかして皇君って学食派？」

「そういう日もあるが今日はサンドウィッチな気分でね」

俺の昼食スタイルは学食と購買を使い分けてる。うちの食堂は安いことには安いんだがメニューがそんなに豊富じゃないのが玉に瑕だ。せめて週替わり定食があればメリハリが付くというものだが……。

「それじゃ、決まりだね。あと、ついでって言う訳じゃないけど出来れば人気の少ないところで食べながら話したいんだけど、何処か知らない？」

「体育館倉庫」

「そんないかがわしいような場所は駄目ーッ！」

間髪入れず突っ込みが入ると同時に目の前で風が吹き上がる。それがアッパーだと分かったのはギリギリ夜城の攻撃を避けてからだが。

「むっ……実は皇君、結構凄い人？」

「言っただろ？　俺は正義の味方だって。もっとも、あくまで自称

だけどな」
「それ、理由になってないよ」
なんですと！？　正義の味方といやーあれだぞっ！　例え不意打ちかけられようがキュピーンと反応してバッと反撃して雑魚キャラをギッタンバッタン薙ぎ倒してから『お前、何者だ？』とか言いながら格好良くキメるんだぞ！
「……皇君が何考えてるのか分からないけど、多分皇君が思ってることは違うから」
「そんなことはない。俺の考えは男の浪漫学に基づいてる。だから間違ってるとは言わせないぞ、夜城氏」
「はぁ……。もう分かったからそろそろ本気で案内してくれない？　時間勿体無いでしょ？」
「そうだな」
夜城とのコミュニケーションもそこそこにして、頭の中で人気の少ない場所を検索する。
まず、食堂は当然却下。人気云々もあるがあそこは飢えた狼たちの戦場だ。とてもじゃないがゆっくり話なんかしてられない。教室は食堂に比べればずっと平和だが弁当派が陣取ってることが多いので没。となれば中庭が妥当なところだろう。時代なのか、中庭にはベンチがあるにも関わらず昼時に活用する生徒は驚くほど少ない。それでも全くいないって訳じゃないが昼休みをまったりと過ごしたいのであればそこ以外、考えられない。
「中庭でいいか？　全く人がいないとは保証できないが、そこなら人気も少ない」
「うんっ。……じゃあ早速行こっか、皇君」
夜城に催促されるように、俺は自分の分の昼飯を持って教室を出て行く。途中、クラスメイトが『早速ナンパか？』とか『沙耶ちゃーん！　今度は俺達と食べようなー！』だの『沙耶ちゃん、皇君は人選ミスだよ？』なんて言ってくる生徒とすれ違う。つーか最後の俺は人選ミスとかどういう意味だ？　言っておくが俺はこれでも紳

士には定評のある男だぞ。夜になると即狼に豹変する野郎共と一緒にしないでくれ。
夜城もそう思うだろ？　と、彼女に同意を求めるように話題を振ってみたら意外や意外。夜城の奴、何が面白かったのか急に笑い出しやがった。
「皇君、それ全然違うよ」
違うって、何がどう違うんだ？　誰にでも分かるよう５Ｗ１Ｈでの説明を要求する！
「多分、あの娘が言った人選ミスは良くも悪くもって意味だよ。良い人なんだけど恋人にするにはあと一歩足りないっていう、そういうニュアンスだよ」
「じゃあなんだ、昨今の女子は高収入、高学歴、高身長の三高主義なのか？　言っておくが俺は学生だし将来は中小企業に就職するような男だ。ましてやこの学園にいる時点で高学歴なんて望めやしない！　三高なんてもう流行らないと思ったが今になってブームが再熱してると夜城は言うのかっ！？」
「今時の子で三高なんて言葉、知ってる人いないよ？」
いや、それ言ったら夜城も現代っ子だろ。お互い、アウトローが過ぎるな、本当に。

そんな感じで夜城と世間話（殆ど俺が一方的に話してるだけだった）をしながら中庭へ向かうと運良く人がいる気配はなかった。適当なベンチに腰掛けて、コンビニのビニール袋からサンドウィッチと飲み物を取り出す。
「食べてからでいいか？　それとも食べながら話すか？」
「んー、食べながらじゃ駄目？　ちょっと行儀悪いと思うけど」
「あぁ。別に構わないぞ」
喋りながら食事をする、大変結構だ。世の中には食事中は一言も喋らないのがマナーだと言うような人間もいると言うからマジで信じられん……！　そもそも食事って奴は皆で楽しく食べる為のもの

なのに一切喋らないとか俺に言わせりゃキチガイもいいとこだ。
「じゃあ、早速本題入るね。……皇君は三日前のこと、誰かに話した？」
「いや、逆に信じる奴が居る方が珍しいと思うぞ」
「答えになってない。真面目に答えて」
えー、今の答え方じゃ駄目なの？　充分答えになると思うんだけどなぁ。
「三日前のことは誰にも話してない。けど、それを判断するのは夜城だろ？　それに実際問題、話したところでまともな奴は信じないと俺は思うけどね」
今ここで、俺がどれだけ話してないと宣言しても最終的に判断するのは夜城だ。これまでのやり取りで夜城が俺という人間を充分に理解して、その上で信用してくれなければ即アウト。正直、何が起こるかまるで想像が付かない。
「……分かった。皇君、冗談言ったりするけど嘘付くような人じゃないって信じてあげる」
「あぁ。俺ほど人がいい人間はそうはいなからな」
「自分で言うと嘘臭く聞こえるよ」
「そういう風に聞こえるのは俺の素直さに嫉妬してるからだよ」
「そこまでポジティブに考えられるのってある意味才能だよね……」
それは違うぞ、夜城。考え方は才能じゃなくて個性だ。人間、皆が皆同じじゃない。異なる価値観を持ってるから面白く思えるんだ。たまたま俺はポジティブに生きるという個性を持ってるだけで、似たような人間は他にもいる。夜城が俺の在り方を才能と称したのはきっと、俺が少し特殊だからだ。
「じゃあ次の質問――」
「待った夜城。それだとフェアじゃない」
夜城の言葉をピシャリと遮り、俺は言った。質問をすること自体は悪いことじゃない。ただ、一方的に夜城が質問して俺が答えるのは少々、不公平だと俺は思う。

「質問は交代制だ。そして相手の質問に答えられなければ次の質問には答えない。どうだ？」
「ん～……答えられる内容なら答えてあげるじゃ駄目？」
あっさり乗ってきたな。普通はもう少し疑うなり反発するもんだが……ま、妥協案に関しては当然っちゃあ当然かな。
「……良いだろう。承諾を得たところで早速質問するけど……夜城ってぶっちゃけ、正義の味方とかそういうオチ？」
「えぇ！？　た、確かに私は正義の味方やっているけど、どうして分かったの？！　ていうか皇君も本当は正義の味方なの？！」
「……」
ちょ、なんで正解しちゃうんだよ！　これマジか？！　実はドッキリとかじゃなくて夜城の奴はリアル正義の味方なのか！？
「いや、単にあてずっぽうで言っただけってのもあるけどお前、別れ際の時に自分は正義の味方だって名乗っただろ？　あと俺は正義の味方に現在進行形で憧れてるが多分、夜城が思ってるような正義の味方じゃあないぞ」
初めて夜城を見た時、まさかとは思いながら色々考えていたけど……本当にそうだったとは……。
「次は俺の番だな。……正義の味方やってるのは分かったけど、それって職業？　それとも政府の秘密組織とかそっち系？」
「違うよ。正義の味方はちゃんとした職業でもないし、ましてや政府御用達の組織でもないよ」
「じゃあ一体――」
「その前に、今度は私の番だったよね？」
うっ……そう言えば質問は一回ずつ、交代でしろと言ったのは俺だっけ。あまりの興奮についルールを破ってしまうとは……。俺もまだまだ修行が足りんな。
「あの時、皇君が会った人たち……私たちはソイソルって呼んでるけど、ああいう感じの人を何処かで見たことはない？」
「あの如何にも雑魚っぽい服を着てた奴等のことか？」

「そうそう、その人たち。見覚えない？」
「ふむ……」
言われて、俺は高校に入学してから今日までの出来事をザッと思い返してみる。
中学時代の友人たちとの旅行、近所のガキ共と遊んだ日、買い物で街をうろついてた時、エトセトラ……。
もしかしたらその昔、何処かで見たかも知れないが少なくともここ数ヶ月の間にあいつ等を何処かで見たという記憶はない。そもそも初めて見たのがあの公園だったぐらいだし。
「……すまん。何処かで見たっていう記憶はない。そもそも俺はあいう人間が居たこと自体が驚きだったし、見たとしたら強く印象に残ってるだろう」
「そっか……。ま、あまり期待はしてなかったし当然と言えば当然だね」
「力になれなくて悪いな。……で、次は一番聞きたいことだ。……夜城は、何の為にここに来たんだ？」
これが俺にとっての本題だ。夜城が何の意味もなくこの町にやって来たというのは考えにくい。そもそも彼女ほど立場に恵まれた人間ならばわざわざ転校なんて面倒なことをする必要がないように思える。
まぁ、今までの流れから考えるなら――
「……ごめん。それは答えられない」
やっぱりそう来たか。まぁこれは予想済みだからそんなに落胆はしなかった。それに俺の予想じゃあ転校してきた理由はこの学園の関係者の中に悪の組織に属する人間がいるという展開を予想してる。……自分で考えといてアレだが、発想が物凄くオタクっぽいな。
「じゃ、私からは最後の質問ね。……この学園に親が裕福な人間ってどのぐらい居る？　出来ればその人の名前とかも教えてくれると有り難いんだけど」
「妙な質問だな」

「皇君からすればそうかも知れないけど、私にとっては必要なことだから」
「……」
親が金持ちの人間か。友好関係が広い俺でも流石に友達の親の職業となると認知度は一気に低下する。ただ、俺に限らず自他共に親が金持ちだと認めてる奴なら知ってるが……話していいのだろうか？
……いや、良くないな。いくら質問とはいえ、安易に他人の秘密（と言っていいのだろうか、この場合）を喋るのは姑息な人間がすることだ。それにここで俺が『あいつとあいつだ』と話せば、それは友達を売るってことに繋がる。
「……俺の口からは言えない。ただ、この学園じゃそういう人間は少し聞き込みをすれば分かることだ。知りたければクラスメイトに訊くなりしてくれ」
だから俺は、無難にそう答えることにした。勿論、この言葉に嘘はない。そもそもこの町はそんなに大きくないところだから羽振りの良い人間ってのは自然と目立つものだ。そういう人から親の職業は何かと聞けば案外、実は凄いところに勤めてるってケースは結構多い。
「うん、分かった。……これで私からの質問は全部だけど、皇君は何かない？　質問は交代制だし、皇君はあと一回質問できるよね？」
「そういやそうだな……」
ぶっちゃけ、そこまで細かくルールを決めてた訳じゃないんだが……折角の機会だ。このラストチャンスを活用しない手立てはない。
何を質問するかって？　そんなのもう決まってる。
「なぁ夜城」
「なぁに？」
「仮面ソルジャーと傭兵戦隊、お前はどっちがより正義の味方っぽく思える？」
「へっ？」
「結論から言うなら俺はいずれも正義の味方というよりも二大イケ

メンアイドル勢力となりつつあるのが現状だと分析してる。イケメン、大いに結構だがその対象が子供ではなくご婦人に変わった時、それはもはや特撮アニメでも何でもないと思うのだが、夜城はどう思う？」

「急に何を言い出すの、皇君？」

「俺は至って真面目だ」

正義の味方と言えば仮面ソルジャーシリーズに戦隊モノ……これは絶対に外せない要素だと言える。何しろ日本男児の多くはこうした番組を見ることにより、誰もが一度は正義の味方に憧れるなり世界最強を夢見たりするのが世の習いだった。

しかしどうだ？　昨今のガキ共と来れば――

『僕にはそんなの関係ないよ』

とか。

『別に一番にならなくたっていいじゃん。人は人、他人は他人でしょ？』

とか抜かすんだぞ？　男に生まれた以上、勝ちに拘るのは当然の真理というもの。少なくとも俺が小学生の頃はそういう感覚が当たり前だったし、今でも目標は違えど勝ちに拘る男はいる。

しかし今は時代の流れという奴なのか、勝ちなんかどうでもいいとかいうガキ共の多さに俺は本気で嘆いたよ。

「どうなんだ夜城？　お前はどっち派なんだ？」

「……えっと、どちらかと言えば戦隊モノ、かな？　一応、それなりに縁もあるし」

縁がある、か。察するに遊園地のヒーローショーを見て憧れを抱いたって所だろう。テレビで見るヒーローと印象の違いはあったものの、生で見て怪人をやっつけるその姿に興奮したのは今でも覚えてる。

「そうか。夜城は多人数で戦う戦隊派だったか。俺としては仮面ソルジャーを贔屓して欲しかったとこだが……まぁ仕方ない。戦隊モノには戦隊モノの良さがあるからな」

「男の子って一対一で戦うヒーローが好きだよね。私はちょっと心細いかなーって思うけど」
「心細いって……夜城にも仲間がいるんじゃないのか？」
「う～ん……居なくはないけどね、固まって戦うよりは各地で戦った方が効率がいいでしょ？　それに私、ちょっとだけ浮いてる存在だから」
　浮いてる存在って……俺にはそうは見えないけどな。贔屓目を抜きにしても夜城は社交性もあるし正義の味方という点を除けば変わり者って訳でもない。……ひょっとして他の正義の味方（いや、居ると仮定しての話だが）が変わり者なのか？　会ったことなんてある筈もないから全部俺の勝手な憶測だが。
……なんてことを話しながら食事をしているうちにどうやら俺が今朝買ったサンドウィッチは既に無くなっていたようだ。う～む、二袋あれば足りると思ったんだが……まぁいい。
「ご馳走様でした」
「嘘！？　もう食べたの？！」
「もうって……そりゃサンドウィッチ二袋しか買ってないからそんなもんだろ？」
「私まだ食べてないよ～！」
　食べてないって……食べながら話そうと提案した人間が一口も食べてないってどんだけマイペースなんだよ。
　一通り俺に文句を言ってからようやく夜城も自分の弁当に手を付け始めた。丁寧に包まれた布を解くと高級感溢れる弁当箱が姿を現わした。やっぱり夜城、本物の金持ちなんだな。
「いいもの使ってるんだな。やっぱり弁当は使用人が作ってるのか？」
「ううん、ちゃんと自分で作ってるよ。……まぁ、自分で作ってるのはお弁当だけだし、朝食と夕食は作ってもらってるけどね。そういう皇君は自分でご飯作ったりしないの？」
「あー、たまに作るけど焼きそばとかスパゲティとかその程度だな」

俺の場合、作れないことはないが簡単なものしか作れなかったり良い物使って調理してもそれに見合った味にはならないってことの方が圧倒的に多い。それに最近じゃコンビニ弁当の方が下手な人間が作る料理より美味しく出来てるってことの方が多いから俺としては料理が出来ないからと言ってそれほどの不自由さは感じてないのが本音。

「へぇ、皇君は一応料理もできるんだね。ちょっと意外かも」

「男が料理をするのがそんなに意外なことか？」

「うん。だって私の知り合いでちゃんと料理できる人って殆ど居ないから」

そりゃお前、料理人に対する冒涜じゃないか。確かに家庭に限った話じゃ男よりも女の方が料理をしてるところは多い。しかし現実問題として料理を生業としてる人間の大半は男だという事実をちゃんと認識してるのか、夜城は？

なんてことを思いながら俺は美味しそうに自作の弁当に箸を伸ばしていく夜城を観察する。と言っても横で見てるだけじゃつまらないから好奇心のままに、どんなのを作ったのか覗いてみると――

「ちょ、昼から豪華じゃねぇかっ！」

「そぉ？　昨日の夕飯の残りもあるし別に普通だと思うけど？」

これが普通、だと……？　デミグラスソースが掛かったハンバーグにエビフライ（二尾で一組という超豪華使用！）の上に鮮やかなクリーム色をしたタルタルソースが付いたお弁当が普通な訳ある筈ない！　学食や惣菜コーナーにあるエビフライを見てみろ！　一尾しか入ってないが当たり前だがそれの殆どが身を伸ばして如何にも大きい海老を使ってますよ～的な小技を使って売り出されてるんだぞ？！

「夜城、いずれお前とはじっくり話し合わなければならないようだな」

「ふぇ？　わたし、皇君に何かした？」

「明日、学食のメニューを見てみろ。お前の弁当がどれだけ豪勢か

よく分かるぞ」
　いや、別にうちの学食が不味いとか手抜き料理しか出さないとかそういうことを言ってる訳じゃないぞ。いざ良いところを挙げようと思えば値段が良心的ななのとデザートも注文できるという点。
　……ま、まぁごく普通の学食じゃあないか。そもそもリーズナブルなお値段で食事を提供してくれる学食にあれこれ理想を求める方が間違ってるんだって！
「良く分からないけど……明日は学食を食べた方がいいの？」
「あぁ。社会勉強になるかどうはさて置いて、少なくともここの学生がどういうものを食べてるかはちょっとは興味あるだろ？」
「う～ん……正直なところそっちよりも人間観察をするには丁度いいかなって思ってるかも。多くの人が一度に沢山集まる場所だし、もしかしたら思いがけない情報が入ってくることもあるかも知れないし」
　情報が入ってくるって……学食をＲＰＧの酒場か何かと勘違いしてないか？　真面目に正義の味方をしてるのか、そうじゃないのか今ひとつ判断しかねないな。
　こうして弁当を食べてる姿を見れば本当にちょっとした財閥のお嬢様に見えなくもないし、到底マシンガン型のビーム銃（なのか、あれ？）を振り回して悪の組織と戦うヒーローには見えない。
　けど俺は実際にこの目でその現場を見ている。ただ、時間が経つに連れてやっぱりあの公園で起きたことは実は俺の想像力が生んだあり得ない幻想で、こうして彼女が目的の為にこの学園にやって来たのもたまたまリアルで転校生が来たのと重なってそういう風に思い込んでいるだけかも知れない。
　……あれ？　どうして俺は夜城が正義の味方なんかじゃないって頑なに否定してんだ？　本当の俺ならばここは両手を挙げて喜ぶとこだってのに……。
「私の顔に何か付いてる？」
「……あぁ。お前のほっぺご飯粒、付いてるぞ」

「えぇ！？」
俺の胸の内を悟られるようで咄嗟に幼稚な嘘を付いてみたがどうやら夜城相手にはこの程度の嘘で充分な効果があったようだ。夜城の奴、ご飯粒が付いてるかどうかなんて触らなくても分かるってのにわざわざ左手で頬を何度も触って確認してる。……なんか小動物っぽくて面白いな。
「何処にも付いてないよ～」
「あぁスマン、間違えた。頬じゃなくて額に付いてる」
「はぅッ！」
ボンッと……漫画ならそんな擬音が付きそうな勢いで顔を真っ赤にして大慌てで額をペタペタと触りまくる。同じネタで二度引っ掛かるとか、どれだけ騙されやすいんだお前って奴は……。
「ご飯粒なんて付いてないよぉ～！」
「ワリィ、どうやら俺の見間違いだったようだ。ま、人間誰にでもミスはあるんだ。許せ」
「謝っているようで実は上から目線ってどういうこと？」
「上から目線のように感じるのは俺が夜城より身長があるからだ」
「うぅ～……なんか皇君って屁理屈が上手なんじゃない？」
「屁理屈も立派な理屈だ。屁理屈という言い回しは論破できなかった人間の言い訳に過ぎんぞ、夜城」
大人は屁理屈が嫌いだと言うがな、俺に言わせりゃそれは逃げの一手だ。自分が言い返せないからと言って巧妙に自分を正当化し、まるで反論することが悪いかのようなあの言い回しは正直、好きになれない。と言っても俺があれこれへ理屈こねるようになったのも燈華先輩の影響だったりする。ただし、あの人の場合言い返せないような状況になると――
『男の子でしょッ！　女々しいこと言わず素直に認めなさい！』
とか言うんだぜ？　今は女性の時代というがこれはもう女尊男卑という言葉がピッタリな世の中ではないか！
あ、いや別に女性がエラソーにするのが不愉快だとかそういう話

じゃないぞ？　単純に性別を理由に差別するのは良くないという話をしてるだけだ。
「はぁ……皇君って実は友達いないでしょ？　人をからかうのはあまり感心しないよ」
「友達がいないとは失礼な！　それにこの程度、からかった内には入らないぞ、ノーカウントだ！」
「真顔で言い寄ってきたら誰だって信じちゃうよ」
うむ。確かにそれは一理ある。だが真顔で迫ってくれば相手も『まさかこういう事は言わないだろう』という固定概念を持たせて意表を突くことが出来る。
……まぁ、比較的この手の経験に浅い夜城はあっさりと――それはもう見てるこっちが面白いと思うぐらい見事にハマッた訳だがクラスの連中にこれやっても誰一人引っ掛からないぞ？　単純に相手にされてないだけなのここだけの話だが。
「ま、どっちが本職なのかは置いとくとしてだ。あまり根詰めすぎるのも考え物だぞ？　真面目なのが悪いとは言わないが肩の力を抜くことも大事だ。今のコミュニケーションにはそうした意味合いも含まれてる」
「へっ？　そうだったの……？」
「勿論だ」
うん、一割はそうだけど九割はからかって遊びたいっつー俺の欲求でしかないけど、この程度なら別にいいよな？
「うぅ～……なんか皇君に上手く言いくるめられたような気がしなくもないんだけどぉ？」
「きっと気のせいだ」

そんな感じで夜城と昼休みを過ごし、午後の授業も適当に消化して向かえた放課後。慣れた手つきで教科書を鞄に詰め込み、帰り支度を進めつつもチラリと夜城を一瞥してる自分がいる。俺の見たて通り、あいつは騙されやすく少し口下手なところもあるが社交性は

高く、一日の授業を全て終えた頃には既に仲良しグループの一つに仲間入りを果たし、これから何処かに遊びに行く約束を確約していた。（それでも諦めの悪い男子は玉砕覚悟で突っ込んで女子に邪険にされて追い払われて隅で白くなってる）

「ふっ……やはり彼女ほど高嶺の花ともなれば一筋縄ではいかないということか……」

そして俺の前にも一人、つい今し方夜城に断られた野郎が目に見えて落ち込んでいる。喜多川、お前がそれをやると俗物に毒されたお坊ちゃまにしか見えんぞ？

「何をどうしたらそんなに落ち込んでるかは知らんが良かったじゃないか。傷口は浅い方が治りも早いというからな」

「全く、キミという男は……。少しは空気を読んでくれたまえ」

「そうか。なら俺はこのまま帰るとしよう。こう見えて忙しいから」

「ち、ちょっと待てッ。こういう時は普通励ますものだろっ！」

「頑張れ以外に何を言えと？」

そもそも何を励ませばいいのさ？　それに逆の立場ならお前は俺に気の利いた言葉の一つでも掛けてやれると言うのか？　ここまで自己中な考え方ができる人間を目の当たりにすると呆れる以外、どうしようもなくなる。

「やれやれ、ちょっと自分が優位に立ったからと言ってそういう態度を取るとは……流石に勝者は余裕だな」

「？　何の話だ？」

「今日の昼休み、キミが夜城さんと一緒に昼食を取ったことは既に周知の事実だ。しかも彼女は他の人の誘いを断ってまでキミとの食事を所望した。どんな手段を使って夜城さんを篭絡したんだね？」

「ふむ……」

顎に手を添えて、言い訳を考えてみる。話の内容はともかく、当たり障りのない話題でこいつの興味を引けるとはハナから思ってない。信憑性を持たせつつ、こいつを納得させるとすれば――

「一目惚れという奴だ」

「なに？」
恋話に限る……そう俺は判断した。
「一目惚れだ。教室で俺の姿を見た時に自分のストライクゾーンに入った男子……それがたまたま俺だったという訳だ。しかし休み時間の間は知っての通りクラスメイトたちによる質問攻めの嵐。とてもじゃないが俺に声を掛けられるような状況じゃなかった。……ここまで話せば聡明なお前にはもう分かるだろ……」
「……」
そんな馬鹿な――――と言わんばかりの表情を浮かべ、硬直する喜多川。一目惚れなんて時代遅れも良いとこだってのに何故こうもあっさり信じてしまう？　……あぁそうか、やっぱりまともな高校生ってのは恋愛に飢えてるってことか。気持ちは分からなくもないが恋なんて大人になってからでも出来るだろうに。
「ま、夜城と昼食を取った経緯はそんなトコだ。……あぁ安心していいぞ喜多川。俺は別に争奪戦に参戦なんかしちゃいないからな、彼女を落としたいのであれば存分に頑張りな」
ぽんっと、呆けてる喜多川の肩を軽く叩き、鞄を引っ下げて教室を後にして放課後の予定を練っていく。真っ直ぐ家に帰ってから暇そうなガキ共を誘って遊ぶのも悪くないが、店を冷やかし回るのもまた一興。月の初めから金使うのは極力避けたい。
（そうと決まれば早速街に出るか）
思い立つ日が吉日。その言葉に従い、俺は足早に街へ向かっていく。他の高校では今が中間期間なのか、他校の生徒の姿があまり見られない。いつものこの時間なら通行人・学生の比率が五：五ぐらいでプチ歩行者天国状態なんだが……これはこれで新鮮に見えるな。慌しく人が歩く景色も好きだがたまにはこういうのも悪くない。
「……」
これと言った目的もなく街を散策して、目に付いた本屋に入る。当然、俺がチェックするのは漫画の新刊が置かれてるコーナーだ。……いや、今はこれと言って読みたい本がある訳じゃないんだが。

流石に漫画の立ち読みは出来ないので雑誌コーナーにある週刊誌に手を伸ばしてみる。……念のため言っとくが成人向け雑誌じゃないぞ？　興味がないと言っちまえば嘘になるけどな！
「あれ、聖ちゃんじゃない？」
「ん？　……あぁ、燈華先輩ですか。奇遇ですね」
急に聞き覚えのある声に名前を呼ばれたのでもしや……と思いながら振り向けば制服姿で菓子作り関係の本を手にした燈華先輩が屈託ない笑顔を浮かべて自分の存在をアピールしてた。
「先輩、その本タグ付いてますよ」
「そっち系のネタは流石に笑えないと思うな～、私は」
「ですよね。済みません」
平謝りしつつ、読みかけの雑誌を元の位置に戻して先輩と向き合う。
「先輩が菓子作りの本買うなんて珍しいですね。ネットで調べたりしないんですか？」
「そりゃあ今のご時世、作りたい料理があればネットで調べれば一発だけどさ、結局は必要な材料とか作り方の手順を覚えるにはプリントアウトしなきゃならないでしょ？　それにボクはそういうデジタルよりページを捲って調べるアナログな方が好きだから」
「手間掛けてますね」
少なくともしもし俺が先輩の立場なら即ネットで検索して必要なところをプリントアウトしてさぁ始めよう！　という流れを選ぶのはほぼ間違いない。だからと言って先輩のやり方が非効率だとかそういう野次を飛ばしたりはしないし、むしろそういうのが好きだという人間の気持ちも理解できる。
「聖ちゃんはエッチな雑誌を読んでたのかな？」
「んな訳ないですよっ！　……まぁ、ちょっとは読もうかなとは思いましたけど」
「エッチ、スケッチ、ワンタッチ♪」
「女の子が笑顔でそんなこと言うんじゃなりませんっ」

「なーに固いこと言ってるのよ！　……で、結局聖ちゃんは何してたの？」
「普通に暇潰しですよ。そういう先輩は……どう見ても買い物ですよね」
「うん。一応ボクも家庭料理とか作れるけど専門はコッチだからね」
そう言って先輩は手にした本を掲げ、少し自慢げに笑ってみせる。先輩がスイーツも作れるのは知っていたけどそっちがメインだったのは知らなかった。先輩の家に遊びに行ってご馳走してもらったことが何度かあったからてっきり、先輩は料理が専門だと思ってた。
「……あ、そうだ聖ちゃん。暇なんだったらウチに寄らない？」
「先輩の家ですか？」
「うん。実は昨日ね、お母さんが会社の人から十号サイズのホールケーキ貰って来たんだけど流石二人だけじゃ食べきれないから聖ちゃんにも手伝ってもらおうかな～って思うんだけど、どう？」
「ん～……」
先輩の家か……。考えてみれば先輩の家に上がり込むのは久しぶりだな。最後にお呼ばれされたのは……あぁそうだ、正月の時だっけ。俺の家庭が正月料理を一切食べないような家庭だって知ったら何故か先輩が強引に拉致って呼んだっけ。それにしても、、、君江さん、お盆も正月もろくに休んでないけどあの人は一体どんな仕事すればあんな多忙な日々を過ごせるんだ？　滅多に会わないからいつも尋ねる機会を失ってるしなぁ。
「……いいッスよ。今日はもうマジでどうしようか悩んでたとこですから」
「本当！？　……よかったぁ～、ようやく念願の犠牲者ゲットできたよ」
「犠牲者って何ですか！？」
まさか先輩……自分たちは少食ぶって多くを俺に食わす気か……ッ！？　別に甘い物が嫌いって訳じゃないがケーキを延々と食べ続ける自分はぶっちゃけ、想像したくねーぞ！

「先輩、ちゃんと食べて――」
「遠慮なんかしなくていいからね♪」
「いやだからせんぱ――」
「遠慮なんかしたら口に詰め込むぞ♪」
……ダメだ、目がマジだ。この人本気で俺一人にケーキ押し付ける気満々だ。どのぐらい余ってるかは全く想像できないが少なくとも余裕で糖尿病になれるぐらいはあるんじゃないか？
「ふと思ったんですけどおじさんはケーキ食いに参加しなかったんですか？」
「うん。お父さん今は海外出張中だし甘い物嫌いな人だから。それに聖ちゃんは男の子だから体重とか全然気にしない方でしょ？」
「糖尿病には気をつけてます」
「聖ちゃん、私より若いからそんなの気にしなくてもヘーキヘーキ！」
若いって……俺と先輩は一つ違いなだけだから燈華先輩も充分若いでしょ。んなこと言えばラリアット極められてアスファルトに口付けされそうだから黙っとくけど。
「聖ちゃん、今なんかボクに対してと～っても失礼なこと考えてなかった？」
「はっはっは……何を言うんですか。この俺が尊敬してやまない燈華先輩に対して失礼なことなど考える訳ないではありませぬか」
「なんかとーっても嘘っぽく聞こえるんだけどぉ？」
そりゃそうだ。わざとそういう言い方をしたし有耶無耶にするにはこのぐらいのわざとっぽさが丁度いいからな。
「それより先輩、行くなら早いトコ行きましょうよ。店の中でたむろしてたら周りの客に迷惑が掛かります」
「もう既に迷惑掛かってると思うけど……まぁいっか」
先輩は特に気にした風もなく、店員に品物を渡して清算を済ませる。そんな先輩の後姿を俺はぼんやりと眺める。先輩、基本的に細かいこと気にしない人だけど今のは少しぐらい気に留めとこうぜ。

舞い降りた非日常（前書き）

振り仮名編集しようと思ったけど編集メニューを見る限り、それっぽい機能が見えないのは何故？　……もしかして一度上げてからでないと編集できないとかそういうオチ？

そんな訳で簡単な補足。黒南風→くろはえ　と読んで下さい。

舞い降りた非日常

「お邪魔しました」
「またねー、聖ちゃーん！」
「またいつでもいらっしゃい」
「はい。その時はまたご馳走になります」
結局――
俺はケーキだけでなく燈華先輩の家で夕飯までご馳走になる羽目となった。本当はケーキだけ食べてちょっと雑談してから帰るつもりだったんだが、その『ちょっと』の間におばさんが帰ってきて半ば強引に押し切る形で夕飯（和風ハンバーグに麻婆豆腐という不思議な組み合わせだった）まで頂くことになった。
（すっかり遅くなったな……）
街灯が照らす夜道を歩きながら携帯のデジタル時計で時刻を確認する。
午後九時十七分。どうやら思ってた以上に話し込んでしまったようだ。今日は特に見たい番組もないし学校から宿題も出されてないし、パソコン弄って時間潰して適当なところで寝るか。
「……」
まだ五月上旬だと言うのに夜風には僅かだが夏の匂いがした。どんな匂いだと訊かれても返答に窮するが――まぁとにかく夏を彷彿とさせる夜風だってことは確かだ。肌寒くないところとか。
「……？」
ふと、通い慣れた道の途中にある児童公園の入り口付近に見慣れない影が目に映った。と言ってもここからじゃ距離があってぼんやりと輪郭が浮かび上がってるだけだから相手の顔までは分からないが一つだけハッキリしてることがあった。
（あっ、なんか三日前も同じよーなことあったな）
街灯にぼんやりと浮かび上がる服――右から見ても左から見ても

立派な幹部級の悪人御用達の服だった。ただし、今回は前回と違って仲間がいないが。
あの時は突然の出来事だったが流石に二度目になれば驚きもそこそこに。いくらか平静さを保つことが出来た。
落ちつけよ、俺。本音を余すトコなく暴露すれば今すぐ『そこまでだ、悪党！　貴様等の悪行を天が見逃してもこの俺は決して見逃しはしねぇ！』とか痺れるような台詞をビシッと決めて飛び蹴りの一つでも食らわせてやりたい。
けどな、いくらヒーローに憧れる俺でもいきなり襲い掛かるほど馬鹿じゃない。万が一の確率でごく普通の庶民だったら取り返しの付かないことになってしまう。だからここは大人の対応で――
「そこのお前」
――はい、速攻で呼び止められましたね俺。けどこの前の戦闘員みたいに好戦的な奴じゃなくて少しホッとしたのはここだけの話だぞ？
「少しばかり尋ねたい。六条星夜という男を知らないか？　写真はないが丁度キミぐらいの歳の子だ」
「……」
六条星夜――随分と久しぶりにその名前を聞いたな。久しぶりにその名前を聞いたせいかどうか分からないが、時間の経過と共に心が静まっていくのを実感する。けど何故この男からその名前が出てくる？
確かに俺は六条星夜のことを知っている。だがこんな見ず知らずの男に話す気にはなれないし、喋る義理もない。アイツには借りがあるから言わないとかそういう理由じゃなくて、本当に話したくないと思ってるから。
「……いえ。知りません」
「いや、お前は知ってるな？」
「はっ？」
知ってる、だと？　当てずっぽうで言ってこっちの動揺を誘って

情報を引き出そうという魂胆か？
「とぼけても無駄だ。受け答えをした時の声音ですぐに分かった。隠すだけ無駄だぞ？」
「……」
会って数秒しか経ってない人間の声音を聞き分けるとかどんだけ超人なんだテメーは。なんかもう、この前見た戦闘員と比べるともものすっごくレベルアップした感じが拭えない。
「大人しく喋った方が――」
「しからば御免！」
何やら雲行きが怪しくなってきたのを敏感に察知した俺の危機回避センサーは見事に拾い上げ、俺に撤退を命じた。
「やれやれ、正義の味方気取りの庶民はやはり逃げるしかないか」
「逃げてるのいではなく戦略的撤退だ！」
「逃げるも戦略的撤退も同じだぞ」
「違う！　俺はお前に背を向けて全力で走っているだけだぁあ！」
「何を屁理屈こねてるっ」
「はっ、屁理屈も立派な理屈だ！　六条星夜を知りたければ力ずくで吐かせることだ！」
もし願いが叶うならこう、格好よく戦いたいトコだが流石にそれは無謀過ぎる、そのぐらい良識は俺にもある。それにここで夜城に助けを求めるのも男として恥かしいし、本当に助けに来るとは限らない。だから俺は自力でこいつを倒す道を選んだのだが――
（あぁ、どうやって逃げ切ろう……）
悲しきことに、俺の拙い脳みそではやり過ごす方法がまるで浮かんでこない。ガキ共とヒーローごっこやってた頃はわりと策を練ったりしてたからアレだが今はもうそんなことをするエネルギーもなく、もっぱら野球ばっかしてる。そうした諸々の事情を鑑みてアイツに通用しそうなのはズバリ、走り回ること！　……我ながら地味だ。
「素直に逃げられると思うなよ、ガキが……！」

悪態を付くように男（仮に戦闘員Ａとしよう）は言うと、走りながら何かを取り出そうと腕をもぞもぞとさせる。何をする気か少し気になった俺は全力で走りながらチラリと後ろを振り向く。
手にしているのは黒い棒状の武器だ。一瞬、特殊警棒かと思ったがそんな俺の予想は見事に裏切られた。
「そらっ！」
掛け声と共に特殊警棒のような武器を何もない空間目掛けて上から下へ振り抜く。すると棒の先端が軌跡を描くように青白い光がバチバチと音を立てながら発光し、俺目掛けて蛇行してくる。
「ちょ、どんな武器だよそれ……！」
得体の知れない武器に対して文句を言った頃には電撃は背中に直撃して、俺はその衝撃で前のめりになって倒れる。それはもう、何処かの怪盗がジャンプして着地に失敗したかのような格好悪い倒れ方だった。
「……ッ。いってぇ～……」
受け身なんて取れる筈もなく、舗装されたコンクリートにモロ転げたせいで膝がもの凄い痛い。実際は大した怪我じゃないって頭で分かってても痛み慣れしてないとちょっとした怪我でも大きな怪我をしたような錯覚を覚えてしまうが幸い、俺はこういう怪我には比較的慣れてるのですぐに立ち上がることが出来る――いや、すぐ立ち上がれる筈だった。
（……っ。力が、入らない……？）
腕と脚、そして背中に力を入れてすぐに起き上がろうとするが思うように力が入らない。自分の身体を支えるなんて訳もない筈なのに全身に鉛を括りつけられたかのように動きが緩慢だ。踏ん張ろうとしても思った以上に筋肉が動かず、右へ左へ身体が揺れる。チクショウ、これじゃあほぼ歩いてる時と同じじゃねーか！
「ほぅ？　貴様、意外と丈夫だな。加減したとはいえ、普通の人間ならすぐには動けないくらいの威力はあった筈だぞ？」
やかましい、何を冷静に分析してやがる……。こっちは逃げるだ

けで精一杯だからほっとけっつーんだ。しかしそんな俺の切実な願いが届く筈もなく、戦闘員Aは再度、スタンガンを空振りさせて電撃を飛ばしてくる。

「……ッ」

またアレが身体に当たるのか――

そう思ったのが幸か不幸かは分からないが、結果的に俺は自分の身体を支えきれず、横から糸が切れた人形のように倒れ込み、一瞬遅れて青い光が脇を走り抜けて近くの電柱に直撃してスパークした。

「バカが……ッ。男ならしっかり立っていやがれ……ッ！」

しかも勝手に逆切れまで始めてるし……いや、今はそんなことはどうでもいい。二度に渡る攻撃を見て分かったことは俺では逃げ切ることなんて不可能だという残酷な事実。銃みたいな近代的な武器で一瞬にして殺されるのとは違い、痛みを伴って殺されると思うと背筋が凍り付いた。

ゴールデンウィーク初日に出会った奴等と対峙した時は危ないとは思ったけど自分が死ぬという気持ちはなかった。けど今は違う。人気もなければ逃げる足もない。多分、すぐに殺されるようなことはないだろうけど間違いなく、俺は今日この男に殺されるだろう。

「もう一度お前に訊こう……」

スタンガンの先端をバチバチと、音を立てながら戦闘員Aが近づいてくる。俺が満足に動けないことをしっかりと見抜いてるらしく、歩き方にはかなり余裕が見られる。

「六条星夜は何処にいる？」

「それを聞いてどうする気だ？」

何故こいつが六条星夜に拘るのか？　その理由を模索してみたが全く心当たりがない。少なくとも知り合いや親戚にこの手の人間が居るとは思えないし、命を狙われるような家……ではあるがそういうことをした覚えはない筈だ。

「酷く動揺してるみたいだな……」

まるで俺の胸中を見透かしたかのように、奴は言った。

「その男の心配をしてるなら安心しろ。俺の仕事は彼の保護だ」
「保護、だと……？」
何を言ってるんだ、こいつは？　人をいきなり襲っておいて保護とか言われても信じられる訳ねーだろ。
「これ以上は他人に話せるような内容ではない。こちらに殺す気がないと分かったところで話してもらおうか？　……六条星夜は何処にいる？」
「……」
果たしてこの男に事実を話していいのだろうか？　正直なところ、俺は迷ってる。殺す気がないとは言ってるがそれは多分、六条星夜に対してのことであって、俺に対しては殺意があると思っていい……いや、そう思うべきだ。それにどういう訳か、この男は大まかではあるが俺の考えてることを見透かすことが出来る。こんな訳分からないような男を相手に口を滑らすのは利口とは言える訳がない。
「あくまで黙秘、か。……それもいいだろう」
その瞬間、戦闘員Ａの瞳から感情の念が消えたのを俺は感じ取った。きっとあれは人を殺す時の目だと俺は本能的に悟った。
未練がないと見栄を張ればそれは大嘘になる。俺はまだ自分の人生を謳歌してなければやりたいことをやりきってない。何より子供の頃から夢見ていた正義の味方という野望すら叶えちゃいないのにどうしてこんなところで死ななきゃならないんだ！？
（上等……ッ！　逃げ切ってやろうじゃねぇか……ッ！）
男と会話をしてたお陰もあって、身体の痺れはだいぶ緩和されていた。どうやらこれはＲＰＧで言うところの麻痺効果がある訳じゃないようだ。
戦闘員Ａの右腕が振り下ろされる――そう感じた俺は後退するのではなく、敢えて前進した。近づけば近づいたでスタンガンの餌食になるが蛇行する遠距離攻撃を避ける術がないなら接近戦に持ち込んだ方がまだこっちが有利だ。
右腕が完全に振り下ろされると同時に青白い光を纏わせた電撃が

生き物のように先端から飛び出す。が、それを俺は側面に回りこむようにして避けてみせる。あの時、奴の方から近づいてくれたこともあってダッシュして距離を詰める、なんていう面倒な作業をしなくて済んだのは僥倖だ。

「……！」

「遅い……ッ！」

思わずそんな決め台詞を言いながら脇腹目掛けて握力で固めた拳を打ち込む。自称・正義の味方を名乗ってる俺は中学校の時は独学で空手を習得した。勿論、段位持ちの人間と戦ったりすればフルボッコされるのは目に見えてるが技の型や稽古の仕方はネットや入門雑誌を読んで自分で研究したもんだ。

あの時の俺は『何時の日か必ず出会うであろう犯罪者と戦う為の術』という名目で一人修行してたが……まさかこんな形で役に立つ日が来るとは思いもしなかった。

……本当、人生って奴は何が起きるか分からないな。もっとも、何時・何処で何が起こるか予想出来ないからこそ面白いんだが。

「くっ……、このガキ……！」

「やられっぱなしは性に合わないんで、ね……っ！」

気合い裂帛。右の拳にありったけの想いを乗せて二撃目を打ち込む。送り足で深く踏み込み、肩と肘の関節をフル稼働させて加速させる。拳には男の身体の遥か向こうを打ち抜くイメージを載せて……！

「ッ！」

ずしん、と……右拳に重い感触が残る。まるでサンドバックを素手で殴ったような手応えだ。脇腹なら肉の壁も薄くて俺程度の筋力でも充分なダメージが期待できると思ったんだがどうしてなかなか、戦闘員Aは非常にタフで、ほんの少しだけ表情を歪ませるだけの効果しかなかった。

「狙いは悪くない。だが――」

生徒に講義するように告げながら奴は上半身の力を溜めて、身体

を捻ってその力を一気に解放した。風を纏った拳は空気の壁を押し退け、俺の肩口を捉えた。
「っ！？」
ドカンと、まるで巨大なハンマーで横殴りにされたような衝撃が身体を突き抜ける。次に訪れたのは肩口を中心にした猛烈な痛み、そしてブロック塀に叩き付けられた衝撃。何が起きたのかさっぱり理解出来なかった。俺が肩口を打たれたことによって身体が地面から僅かに浮き上がり、そのままブロック塀に叩き付けられたということを理解するのに随分と時間が掛かった。
「ただの一市民であるお前が、俺に勝てるという慢心をしたのはお前のミスだ」
ぐぅの音もでない。というかわざわざ戦いを挑んだのは俺の思い上がり以外何でもない。雑魚っぽい服を着てればそこそこ細身の体躯をしてたもんだからつい出来心でやっちまったのは否定できない。
「これが本当に最後の警告だ。六条星夜について話せ」
「……」
ここら辺が限界かも知れない。どれだけいきがったところで俺は所詮、一介の高校生に過ぎなければヒーローなんていう器でもない。それにここで素直に六条星夜のことを話せば多分、俺は生き長らえることが出来る。
だがそれでも――
「言っただろ？　知りたければ力ずくで吐かせてみろってな……ッ」
――それでも俺は頑なに拒否することを選んだ。そして今まさにこの瞬間、俺の目の前にあった生存という道が音を立てて崩れ落ちた。
「そうか。……では、そうさせてもらおう」
そう言い切った男の瞳には最早、俺という存在は映ってないだろう。ただ機械的にスタンガンを振り下ろしてなぶり殺しにする。俺の最期は概ねそんなとこだろう。だがこれでこいつは……いや、こいつ等は二度と六条星夜に会うことが出来なくなる。

（はっ、ざまぁ見ろ。悪党）
せめての抵抗とばかりに胸中で戦闘員Ａを罵るだけ罵り倒す。スタンロッドの先端が俺の頭部を捉え、鈍重な痛みを刻みつけようと言わんばかりに迫ってくる。きっと俺は誰もいないこの夜道で痛みに喘ぎ、苦しみながら死んでいくのだろうと思うと君江さんには悪いことをしたと思う。
しかしどういう訳か、俺の悪運というものは存外図太いものらしく、切れる筈だった命綱は寸でのところで繋ぎとめられた。
「む……ッ！」
スタンロッドが振り落とされる――そう俺が思った次の瞬間、戦闘員Ａの表情が驚愕に変わったのが分かった。時間の流れが劇的に変化した訳でもないのに、俺はその変化をしっかりと網膜に焼き付けていた。
振り落とそうとしていた腕に急静止を命じてろくな力も溜めず真横へ跳躍する。一体何がと、思うよりも早く俺は理解した。
あの日、公園で見たのと同じ光弾が、数瞬前まで立っていた戦闘員Ａの頭を通り抜ければ是が非でも誰かから狙撃を受けたということを理解できる。
「くそっ、外したか」
そして俺の後ろで悪態を付く見知らぬ少女――いや、見知らぬ相手じゃない。夜城沙耶だ。あの日と同じように狙い済ましたようなタイミングで颯爽と登場した夜城は狩り立てるように二発、三発と続けて光弾を撃ち続ける。
「ふんっ、とんだ興ざめだ。せいぜい正義の味方とやらにこき使われて裏切られ、我々に話さなかったことを後悔するといい」
後悔？　一体何の話だ？　その言葉の意味を考えてる間に戦闘員Ａは脱兎の如くその場から離れていく。存外、早い撤退だなと思いつつも俺は苦労しながら光弾が飛んできた方向を振り向く。
「皇君、怪我はない？」
「大きな怪我ならないから大丈夫」

男に殴られた箇所はジンジンと鈍い痛みを訴えてはいるが骨にヒビが入ったとかそういう類の痛みではないことは分かる。ただ、肩を動かすとそれに合わせて灼熱のように痛みが焼き付いてくるのは無視できるものじゃない。

「嘘。右肩痛めてるじゃない。……上着、ちょっと失礼するよ」

俺の許可を待たずに夜城は上着のボタンを半分ほど外して肩を露出させ、ジャケットの内ポケットから湿布を取り出して貼り付ける。……常備、してるのだろうか？

「いつも持ち歩いてるのか？」

「うん。応急処置ぐらい出来るようにならないと身体がいくつあっても足りなくなるからね。……はい、これで終わり」

肩の処置を終わらせると夜城は手際よくゴミと余った薬をポケットにねじ込んでいく。湿布を貼る時は大抵、クシャクシャになって上手くいかないものだが応急処置慣れしてるだけあって、夜城が貼った湿布はシワが全くなく、綺麗に肩にフィットしていた。

「夜城に助けて貰ったのは二度目だな」

「そうだね。私も皇君が続けて襲われるなんて夢にも思わなかったよ」

それは俺も同意する。流石にあんなことはもう二度とないとばかり思ってたんだがよもや同じことを追体験するとは。全く、運がいいのやら悪いのやら……。

「それで、皇君。どうして襲われたの？」

「あー、襲われた理由か……」

さて。ここは正直に話していいものなのか。それとも適当にお茶を濁すべきか？

あの男と違って夜城は充分に信用できるのは分かるんだが、まだ気持ちの整理が付いてない俺としてはあと一歩、心の踏み込みが足りない。何より俺自身、気持ちの整理が出来てないから話すことに抵抗を感じている。

「どうも俺に用があった訳じゃないみたいだ。ほら、俺公園で雑魚

キャラと運悪く遭遇して結果的にとばっちり喰らって襲われただろ？　今回もそれと同じ」
「ふーん。……本当にそうなの？」
「本当だって」
口ではそう言ったものの、こういう時にだけ鋭くなる夜城に対して少し胃が痛くなる。昼間は驚く程あっさり俺に乗せられた癖に。……いや、もしかしたら彼女は基本、頭は良い方なんだろう。ただちょっと天然なところがあるからそういう風に思われるだけに違いない。
とは言え、これ以上深入りされたらまずいから何とかして話題を逸らすか。
「そういやさ、夜城は銃を武器にしてるけどどうして銃弾じゃなくてレーザーみたいな攻撃が出せるんだ？　やっぱり正義の味方だけが持てる特注品？」
「まぁ……そんなところかな？」
そう答える夜城は何処かはぐらかすように微笑を浮かべながら言った。そんなところって事は当たらずとも遠からずってことか。
「それより……どうして皇君の服の一部が焦げてるの？」
「あぁ、これか？　それは電撃飛ばされたから」
「へっ？」
俺の言葉を聞いた瞬間、夜城は呆気に取られたような表情を浮かべる。あれ、俺なんかおかしなこと言ったか？
「皇君……なんて言った？」
「いや、なんか男がスタンガンみたいな武器使って電撃を飛ばしてきたんだよ。それを何回か受けたけど別に何処か体調が悪いとかそういうのは――」
「そっちの方が深刻だよっ」
俺の言葉を最後まで聞かず、心底慌てた様子でズボンのポケットから携帯電話を取り出してすぐにコールする。
「もしもし黒南風、私。すぐ医療班手配して。……違う、私じゃな

くて学校の友達。……そう、すぐに準備して、じゃっ。……皇君、悪いけど今夜はうちに泊まってくれない？　一応検査しなきゃならないから」
「検査って、そんな大袈裟な……」
なんで俺の身体をそんなに心配するんだ？　強がりでも何でもなくて、本当に身体は何処も悪くないし後遺症らしき痺れだって残ってない。寧ろ日を改めて病院で簡単な検査をすればいいぐらいだと思うんだが。
「訳が分からないと思うけど今は大人しく言うこと訊いてくれない？　明日になるけどちゃんと事情話すから」
「……まぁ、夜城がそう言うなら」
それで納得したのか、夜城は一安心したような表情を浮かべる。俺にはイマイチ理解できないんだがどうやら俺が電撃をこの身に受けたことはかなり重要な問題らしいというのは何となく理解できた。
「あ、そうだ。泊まることになるんだから皇君の両親に連絡入れておかないとまずいよね？」
「ん、それなら大丈夫。君江さん――あぁ、俺の育ての親な。その人は滅多に家に居ない人だし今日も泊り込みだと思うから連絡は必要ないよ」
「滅多にって……その君江さんって何をしてる人なの？」
「分からん。いつも訊こうと思ってもタイミングが合わなくてな。詳細は知らないがとにかく忙しい人だ」
「ふーん……」
それ以上、夜城が興味を示すことはなく、自分を納得させるように何度か相づちを打つ。自分の親の仕事もまともに把握してないのかと言われると耳が痛いが事実として本当に君江さんがどんな仕事をしてるのか分からないんだ。ただ、日頃の君江さんを見て推理するに、何処かの研究所に勤めてるんじゃないかと俺は思ってる。これと言った根拠はないが、あるとすれば着替えの中に白衣があるから、ということぐらいなんだが。

夜城と取り留めのない話をしているうちに迎えの車と思われる高級車が俺達の前に停車し、運転席から身なりの良い執事（かなり若い！）が降りてきて、夜城に向かって軽く会釈する。
「お嬢様、こちらが件の？」
「うん。紹介するね皇君。この人は私の専属執事をしている黒南風砕牙さん」
「お初にお目にかかります」
夜城から紹介を受けた黒南風さんはペコリと上品に頭を下げてきた。多分、歳の頃は二十代半ばぐらいだろう。にも関わらずこの落ち着きよう……このイケメン男、デキる！
「初めまして、黒南風さん。夜城のクラスメイトの皇聖です」
流石に初対面の――それも付き人相手にギャグを吹っかけて反応を見て面白がるほど俺は野暮じゃない。いや、全くやらないって訳じゃないけど少なくとも今はそういうことをしていい雰囲気じゃないってことぐらいは俺にも分かるんだが――
『初めまして、黒南風さん。夜城さんと付き合っております、皇聖と申す者です。えっ、不純異性交際？　いいえ滅相もありません。夜城さんとはそれもう清らかな交際をしております。えぇ、それはもう神様に誓って健全なお付き合いしてると言えますよ、ははは』
と言う自己紹介が真っ先に思い浮かんだんだが？　……いやいやこれは末期症状とかそんなチャチなモンじゃあないぞ？　俺にとってはこれこそが普通なんだ。と言っても実際にそれをやったら流石にちょっとばかしやり過ぎかとは思うが。
「皇君、ちゃんと自己紹介できるんだ……」
「待て夜城。それは一体どういう意味だ？　それじゃあまるで俺が非常識人間だと公言してるようなものじゃないか」
「だって皇君、私が声を掛けた時真顔でボケたでしょ？」
「ボケって……俺だってＴＰＯぐらいは弁えるぞ？」
全く……何を言い出すのかと思えば夜城の奴、俺を何処ぞの非常

識人間と一緒にしやがって。そりゃ確かに昼休みに声を掛けられた時は一発ボケをかましたが何もそこで俺のイメージを固めなくてもいいじゃないか。
「皇様は大変ユーモアに溢れるお方ですね」
「く、黒南風さん……俺の考えてること分かってくれたんですね？」
「いいえ。ですが、それとなく皇様が突っ込みを入れたいのを我慢しているように見えましたので」
「黒南風さん……」
この人はなんて良い人なんだろう……！　どれだけ他人のボケに突っ込んでも、逆に俺がボケをかましても冷笑されるか無視され続ける俺から見たこの執事はまさに救世主のように見えてしまう……ッ！
心なしか、夜であるにも関わらずこの人の後ろから後光が刺して黒南風さんの包容力の高さを露わにしているように見えるのはきっと目の錯覚なんかじゃない！
「おい、見ろよ夜城……黒南風さんが輝いて見えるぜ？　これはきっと街灯のせいじゃなく、間違いなく黒南風さんの人徳の成せる業だ」
「うぅ～……それ絶対皇君の思い込みだよぉ～」
なんと！　いつも黒南風さんに当たり前のようにお世話をして貰っているから夜城にはこの偉大さが伝わらないというのか……ッ。
夜城、俺はいつしか人に奉仕されるのが当たり前の環境に慣れてしまったお前の未来を垣間見た気がしたぞ。
「皇様、何か良からぬことをお考えで？」
「何を言うんです、黒南風さん。俺は純粋に夜城さんの将来を心配してるだけです」
「良く分からないけど、多分皇君が心配するようなことは絶対にないと思うから安心していいよ」
「本当にそう言い切れるか？　五年――いや三年後になったら屋敷の使用人がちょっとミスしただけで『貴女要らないからクビね』な

んておっかないこと言うんじゃないだろうな？」
「そんな意地悪な姑なんかにならないよぉ～！」
いや、ならないよと言ってもそんな可愛く怒ってもちっとも怖かねーぞ。どんだけ頬を膨らませても可愛い顔がちょっと丸っこくなるだけだし一生懸命胸板叩いてもポカポカという効果音が付きそうな力だし……これで本当に正義の味方なのか？
「さて……お二方の漫才が終わった事ですし、そろそろ宜しいですかな？」
「はい、お願いします黒南風さん」
「どうして皇君が仕切るの！？　黒南風さんは私の執事さんだし皇君と漫才なんかやってないよ～！」
そんな夜城の言い分などこの場にいる誰もが聞き入れる筈もなく、黒南風さんは慣れた動作で後部ドアを開き、俺は足早に座席へ座り込む。それを見て夜城も渋々といった感じで俺の後に続いた。
「言いそびれたけど助けてくれてありがとな、夜城」
「今更って思うけど……どういたしまして。でも数日中にまた襲われるなんて皇君も運がないよね。普通に生活してる人がペインに遭遇するなんて滅多にないんだけど」
「ペイン？　それって組織の名前か何かか？」
そう尋ねる俺の質問に対して夜城は『うん……』と、短く返事をする。ペインは英語で痛みって意味だけど……何か名前に意味とかあるのか？
「もう一度訊くけど皇君、本当に襲われたことに関して心当たりがないの？」
「あぁ。全くないな」
というのは真っ赤な嘘で六条繋がりで心当たりがあるんだなーこれが。けど正直、このことはいくら夜城が相手でも話したいとは思わないし俺自身、出来ることならこのことは忘れていたい。
（六条星夜、か……）
正直、どうしてペインとかいう組織が今になって六条星夜に拘り

始めたのか俺には皆目検討が付かない。少なくとも俺が知っているそいつ六条星夜は何もない人間だから。
「……。皇君がそういうなら、私もこれ以上は何も言わないでおくけど今度からは外歩く時は気をつけた方がいいよ。ほら、昔から二度あることは三度あるって言うから」
「そこはかとなく根拠のない忠告だな。……まぁ素直に受け取っておくけど」

時を遡ること、数十分前のこと。予期せぬ第三者の登場に男はあの場から撤収し、誰もいないことを確認して脇道に身を潜め、ポケットから携帯電話を取り出した。数回のコール音の後、電話の向こうから別の男の声が届く。
「私だ。進展はあったか？」
挨拶もそこそこに、電話の主は単刀直入に用件を訊いて来た。彼は明らかに焦れている。この土地までブレッド正義の味方が目を光らせていることに。しかも奴等もまた、自分たちと同様に星夜の行方を追っている可能性が高いとの報告も受けている。組織としても何としても正義の味方よりも先に星夜を抑えておきたいと思うのが本音だ。
「いえ……。ですが、間接的な手掛かりなら掴みました」
「言ってみろ」
「この街の人間に住むある高校生はどうも六条星夜について何か知っているようです。残念ですが口を割らせる前に無粋な横槍が入ってしまいましたが……」
「それは確かか？」
「奴の態度から見てほぼ間違いありません」
「……」
しばしの間、二人の間に沈黙が流れる。彼が手掛かりを掴んでいるかどうかまでは分からないが、少なくとも奴は星夜のことをそれなりに知っていると見て間違いないだろう。何処まで知っているか

はともかく、ようやく掴んだ手掛かりだ。このままおめおめと正義の味方の手に渡らせる訳にはいかない。
「結構だ。お前は引き続き星夜の調査に当たれ。何としても正義の味方よりも先にこちら側に引き込め。手段は問わん」
「了解しました。……それともう一つ。どうやらこの街に派遣された正義の味方はシューティングスター光弾の射手のようです」
「なんと……」
その報告を聞いた途端、男が僅かに――本当に些細な変化ではあったが――驚愕の声を挙げたのを男は感じ取った。光弾の射手と言えばここ数年、海外の支部を虱潰しに叩いていた精鋭の一人であり、これまで何度も煮え湯を飲まされてきた相手だ。その彼女がまさか日本に来ているとは……。
「よかろう。こちらからはガイを送ろう。奴をそっちに送る以上――」
「確実な結果を出して報告にあがります」
「分かってるならいい。決して抜かるでないぞ、ベイ」
その言葉を最後に通信は一方的に切られた。もはや毎度のことなので男――ベイは特に不満を漏らすことなく黙って携帯をポケットにねじ込み、代わりに煙草を取り出す。
（さて。これからどう動くか……）
ボスには報告してなかったが、先のやり取りで聖が光弾の射手の庇護下に入る可能性が高くなった。面倒なので言わなかったものの、奴が彼女に対して協力的な態度を取るとも考えられなかった。根拠らしい根拠などないが、あの男はどうも星夜について語るのを頑なに拒否しているように見えたからそう思うのだろう。
それはいい。やり方次第では口を割らせる方法など、それこそ幾らでもあるのだから。が、どうしても一つ納得できないことが彼にはある。
（あいつが六条家から消えた時、奴はまだ子供だった。今更こっちの都合に合わせてくれるものだろうか？）

ベイが聞いた話によれば星夜が六条家から消えた原因は内部での折衝が原因だと聞いて居る。当時の幹部のやり方に異を唱え、実力行使の手段として研究の一部に携わってた自分が離反し、且つ正当後継者である星夜を屋敷から連れて逃げ出したと、記録には記されている。当時を知る者は少なく、僅かな手掛かりを頼りに星夜を探しているのが現状だが――常識で考えれば今まで普通に暮らしていた人間がいきなりこちらの都合に合わせてくれるとは思えないし、かと言って世界制服の為に六条家の血が必要だと言っても聞く耳など持たないだろう。正義の味方が自らの存在を隠し、水面下で活動するように自分たちもまた、影で動くタイプだ。こちらのことは全くと言っていいほど認識されてないと思ってもいい。

純血至上主義。そう言えば聞こえはいいかも知れないがその実態は古き体裁に固執してるだけの、時代遅れなやり方でしかない。頭に茶渋の付いた年寄り相手に実力主義のなんたるかを説いたところで説得できるとは思えないので黙ってはいるものの――

（やはり今の六条の人間はトップに立つべきではない……）

煙草を携帯灰皿へ入れて、一息付きながらガイは思う。彼らのやり方が甘いとは思わないが、今のやり方に固執していればいずれ敵対組織に先手を取られてしまうのは火を見るより明らかだ。どうせ付くなら有能な人間――そう、例えば若くとも実力のある者の下に付くのが利口だろう。ただ、そうするよりも前に今の仕事を片付けるのが先決ではあるが。

（さっさと片付けてしまおう……）

煙草の残り香を漂わせ、ガイは静かにその場を立ち去り闇の中へと消えていく。その姿を見届けた月は悪い未来を示唆するかのように、うっすらと黒雲が重なっていた。

屋敷での一時。（前書き）

折り返し地点です。あと３話４話ぐらいでこの話も終わると思いますのでもう少しだけお付き合い下さい。あと、作中にある説明は結構いい加減ですので突っ込みはナシで。

屋敷での一時。

『聖、薄々気付いてると思うけど――私は本当の母親じゃないわ』
混濁した意識の中、俺は目の前の女性――いや、違うな。これは夢で、君江さんが生みの親じゃないと白状した時のことだ。とは言っても、君江さんが本当の親じゃないのは何となくそうだろうと思ってたからそんなに驚かなかったのは今でも覚えてる。
『キミの両親は事故で亡くなって、貰い手がいなかったから私が引き取ったの』
何故、君江さんがそんなことを俺に話したのか？　切っ掛けははっきりと覚えてないけど多分、いつまでも隠せるようなことじゃないから俺に話してくれたんだと思う。ただ、これによって俺はある疑問を抱くようになった。
『お父さんとお母さんのこと、知ってるの？』
『えぇ。と言っても昔、職場が一緒だったってだけだけどね』
それがどうしても解からない。職場が一緒だったという理由だけで俺を引き取る理由になるのだろうか？　第一、俺は未だに君江さんの職業を把握してない。今まで知る機会はあった筈なのに、いつものらりくらりと躱されて、気付いたら連絡手段はメールとホワイトボードだけになっていた。一応、家に戻ってる時もあるけどいつもぐったりしてるから声を掛けるのが気まずくて声を掛けられないから俺は今でもあの人のことをよく知らない。
『聖、今はこれしか言えないけど覚えておいて頂戴。……いつかお前は選択を迫られることになる。だけど私は信じてる。お前なら必ず、正しい選択を出来る人間になるって』
言って君江さんは優しい笑みを浮かべながら幼い俺の頭を撫でてくれた。それはまだ俺が、一途に正義の味方を目指していた頃の、懐かしい記憶……。

「……あれ？」
ふと、目が覚めると先とはうって変わり、全くの別世界が広がっていた。
高い天井。我が身を包むふかふかのベッド。木製のサイドテーブル。真っ赤な絨毯。その他、高そうな家具がいっぱい……。えっ？
ひょっとして俺の知らないところで俺の部屋、模様替えされた？
だとしたら劇的ビフォーアフターレベルだぞ、これ……。
「んな訳ねーって……」
一通り胸中で乗り突っ込みしてからようやく俺は現状を把握した。昨夜は確か検査とかいう理由で夜城に半ば強引に屋敷へ拉致されてそのままCTスキャンっぽいことやられた後、夜も遅いということで一泊することになったんだっけ。……うん、ちょっと待てよ？
確か今日って平日だよな？
「……」
何となく、後ろ暗い気持ちを抱えたまま部屋に掛けてある時計に目をやると非常な現実がそこにはあった。
午前八時四十五分。何度見ても時間が巻き戻ることはない。つまり――
「完全にサボりじゃん、俺……」
あー、なんか色々ヤバい気がしてきた。外泊するって君江さんに言ってないのは平気だけど学校には連絡入れてないから今頃は君江さんに連絡いってると思うべきだ。殆ど放任主義の君江さんが雷を落とすことはないかも知れないけど、なんかこう……今更学校行くのってスッゲー気まずい。というかそこまで考えが及ばなかった自分の浅はかさ加減に腹が立ってくる。
だだっ広い部屋の片隅であれこれ悩み、どうしようか考えていると不意にドアをノックする音が俺の耳に届いた。
「皇君、起きてる？」
「夜城？」
聞き間違う筈もない、夜城の声だ。……てことは夜城も学校、サ

ボッたのか。転入早々、学校をサボるのはどうかと思うが相手は命の恩人だ。そこは敢えてスルーしてやるのが優しさってものだろう。
「入ってもいい？」
「ほぅ。夜城は本当に入っていいと思ってるのか？　扉を開けた瞬間、俺の下着姿を目撃することになった場合、俺は心に深い傷を負ってお前は責任を取らなければならなくなるぞ？　それでもいいというなら扉を開けることを許可してやらんこともないぞ？」
「うぅ～、そんなこと言ってももう騙されないんだからねっ」
「よし、なら開けてみろ。今なら業界用語で言うところのサービスカットに遭遇できるぞ。ラッキーだな、夜城」
「それじゃあまるで私が変質者みたいな言い方じゃない～！」
とか何とか文句を言いつつも、結局夜城は素直に扉を開けて部屋へ入って来て……一瞬でそっぽを向いた。ふっ、少し露出した背中を直視しただけで恥かしがるとは……何だかんだ言っても夜城はまだまだチェリーガールってことか。
「お嬢様、皇様のご冗談で御座いますよ。……皇様、失礼します」
と、ここで扉を開けて入室してきたのは夜城ではなく執事の黒南風さんだった。流石、この人は本気と冗談の区別をちゃんと理解してるな。どこかの転校生にも見習わせてやりたいぐらいだ！
「お早う御座います、黒南風さん」
「お早う御座います。ベッドの寝心地は如何でしたか？」
「夢から覚めるのが惜しいくらい最高の寝心地でした」
「それは何よりです。……それと皇様、着替えはこちらの方でよろしいですか？」
そう言いながら黒南風さんは小脇に抱えていた洋服を広げて見せる。昨日まで着ていた制服は――電撃攻撃でまともに着れるような状態じゃないので捨てた。
「済みません。わざわざ着替えまで用意して下さって。……ほら夜城、ちゃんと御礼を言うんだぞ？」
「どう考えても皇君が御礼を言う立場だと思うんだけど……」

チッ、ここで釣られてくれれば儲けモンだったんだが流石にそこまで甘くはねぇか。
それはさて置き、二人がこうやって俺の部屋に訪ねて来たってことは……やっぱりあれだよな？　夜城も学校休んでまで自分の屋敷にいるぐらいなんだし。
「大事なお話、ですよね？」
いい加減、対・夜城に少しだけ脱いだ上着を羽織り、簡単に身なりを整えてから本題を切り出す。夜城が善意で俺のことを助けてくれたことは事実だとしても、流石に何も訊かずにハイさよなら、なんてことはあり得ない。騙されやすいとはいえ、しっかりするところはしっかりしてるし事情を説明するって、昨日の夜言ってたからな。
「はぁ……。皇君さ、どうして私をからかってから本題に入るの？　普通に入った方が締りもいいと思うよ？」
「性分なんだ。諦めてくれ」
いくら俺でも空気を読まず冗談を振るようなことはしないけど、それ以外の時はもう反射的にからかったりちょっかい出したりする辺り、性分と言うよりも病気と表現してもいいと思うが……いや、流石に病気はねぇだろ俺。
「うぅ～、なんか納得できないよぉ。……まぁ、皇君に話があるのは本当のことだけどさ」
「お嬢様、それでしたら食事をしながらお話ししては如何です？　丁度お嬢様も皇様も小腹が空く頃でしょう？」
黒南風さんの言葉通り、確かに俺の腹はいい具合に空いている。昼食というに早過ぎるけど、朝食というのも微妙な時間帯だが……どっちでもいっか。朝起きて腹が空いたその瞬間が朝食の時間ということにしておこう。
黒南風さんと夜城に先導され、客室から食堂へ移動する。昨晩、御伽噺に出てきそうな屋敷の門を車で通った時点からなんとなく予

想は付いてたが――

（広すぎだろ、これ……）

真っ白なテーブルクロスに蝋燭立て。そしてなが～いテーブル。どのぐらい長いかと言えば机の上に乗ってそのまま連続してバク転出来るぐらい長い！

近くに控えていたメイドに諭され、椅子に腰掛けると別の入り口から配膳台を押してくる人の姿が見えた。気分はまさになんちゃってセレブってとこか。

……あとさっきから側に控えてるメイドさん達が時折、俺のことをチラ見してるけど……やっぱり快く思われてないのか？

「まさかお嬢様のご友人を屋敷へお呼びして給仕する日が来るとは……この黒南風、未だに夢の中にいるのではないかと思っております」

「初めて？」

正直、それは意外な言葉だった。出会ってからまだそんなに日は経ってないけど夜城の社交性はかなりのものだと思うし、既に友達と呼べる娘が何人かいるのを俺は知っている。

だからこそ、彼女が今まで友達を家に呼んだことがないというのは信じられなかった。

「はい。皇様は既にご存知かと思いますが、お嬢様は正義の味方の中でもブレッドと呼ばれる組織に属するお方です。そうした事情もあってか、お嬢様はいつも何処か友達に対して遠慮をなさってました……」

あの夜城が壁を？　けど俺、学校でアイツと再会した時はそんな印象なんて少しも感じられなかったぞ？

「黒南風さん、それ本当ですか？　俺――じゃなくて、私が学校で彼女と出会った時は親しみ易い印象があったのですが……」

「あれは皇君にペースを乱されたからだよー！」

ペース乱されたからって……それは別に俺のせいじゃないと思うぞ。俺に言わせりゃアレはちょっかい出して下さいよ～的なオーラ

が全開だったからてっきり、そういうタイプの人間だとばかり思ってた。
「ペースを乱された、ですか……。それは私としても興味ありますな。皇様、今度機会が御座いましたらその様子を是非教えて頂けますかな？」
「構いませんよ。……あ、どうもご親切に」
俺達三人の会話が一区切りしたところで空気を読んで配膳担当の使用人が朝食を目の前に差し出して来た。
メニューはクロワッサン。それも焼きたてらしくまだパンが熱を持っている。まるで朝早くからパン屋に並んで誰よりも早く焼きたてパンを手に入れたような気分だな。一度だけそれをやったことがある俺だが長続きなどする筈もなかった。金銭的な意味で。
「食べながらでいいから話、聞いて頂戴。……その代わり変なことは言わないでね？」
「夜城に隙がなければな」
「突っ込むの前提なんだね……」
ほんの少し肩を落としながら低めの声で項垂れるものの、いい加減俺との付き合い方が分かってきたのか、気を持ち直して俺の方を向いてきた。……これは、真面目に聞かないといけない感じかな。と言っても大体の予想は付くけど。
「結論から言うとね、私たちは六条星夜っていう人を探しているの」
やっぱりそうか。けどそうなると別の疑問が生まれてくる。
昨日会った男は組織に引き戻す為にあいつを探しているってのは何となく分かる。けど夜城があいつを探す理由についてはちょっと想像が付かない。
「そいつを探し出してどうする気か、訊いてもいいか？」
「……理由は話せない。でも悪いようにする気はないし、目的は保護ってことになってる。勿論、彼がペインに組するというなら話は別だけどね」
ふむ……つまり夜城たちは彼が組織に戻る前に捕まえて手出し出

来ない状況にするって訳か。
「ふと思ったんだが……彼を保護して何になるんだ？　それに夜城、事情は話せないと言っておきながらなんで今になって話そうと思った？」
少なくとも転校初日に行った質問会では、夜城はこの町に来た理由については話せないと明言している。にも関わらず今になって打ち明けるってことは間違いなく何か裏がある――そう考えるのは至極当然のことだ。
「そうだね……白状すれば私が――というよりも私たちが六条星夜を追いかけてる一番の理由は特異体質だからだよ」
「特異、体質……？」
何ともB級漫画的な用語が飛び出てきたものだ。まさか超能力が使えたりするような体質のことじゃあるまい？
「言葉のニュアンスで大体のことは分かると思うけど、要訳すれば超能力じみた力を使える人間のことを言うの」
マジですか夜城さん。なんかもう俺、この話に付いてこれる自信ないんですが？
「皇君も見たことあるでしょ？　私が銃口からレーザーみたいなのを射出したところ」
「へっ？　あれってああいう武器じゃないのか？」
「うん。銃はあくまで媒介として使っているだけのものだから……」
知られざる技術の応用でもアングラ世界で流通する武器の仲間でもなかったのか……。とするとあの男の電気も夜城と同列ってことになるのか？　何もないところから電気を出したんじゃなくて、スタンガンという武器を通じて自分の能力を具現化した結果、そうなった……と、解釈してもいいんだよな、これは。
「話を戻すね。……これは後の調査で分かったことだけど六条家の人間は代々、特異体質に対する抵抗力が異常に強い上に彼の血を元に作られた血清は特異体質持ちにとってはこれ以上ないほどの劇薬になる」

「普通の人には無害でも夜城みたいな人間に打つと死ぬのか？」
「そういう意味じゃない。ただ、その血清を打たれたらどうなるかは正直、私達の方でも予想が立たないから何とも……。でも劇薬だというのは科学班からの報告もあるから間違いないと思ってもいいから」
いいからって……この話、俺にはあんま関係ないと思うんだけど？
……いや、間違いなく関係あるんだろうなぁ。夜城がわざわざこんなことを話すってことは。
「けど、ここで一つ予想外のことが起きたの。……言うまでもないと思うけど、それは皇君のことだよ」
「俺が予想外？」
「そう。昨日の晩、黒南風さんに頼んで内緒で皇君の遺伝子検査を行った結果、皇君も彼と同じ特異体質だってことが分かった」
「……」
まぁ、ここまで来るともう驚かないよ。自分でも何となくそうなんじゃないかなぁ～とか思ってたし。
「つまり、こういう事か？　夜城たちは六条を保護する目的で追いかけていた。けどその過程であいつと同じ抵抗力が異常に強い特異体質持ちである俺の存在を知ったから自分たちに協力して欲しいってオチか？」
「有り体に言うとそうなるかな。勿論、協力と言っても危険なことをやらせる訳じゃないから。ただちょっと色々調べさせてもらったりするだけだけど、どう？」
「ふむ……」
顎に手を添えて少し考える素振りをする。夜城みたいに前線に出て戦えと要求してる訳でもなければ特別なことをしろと言ってきている訳でもない。俺がこの申し出を断る理由はなく、寧ろ有り難い話だと思ってるぐらいだ。
個人的な理由――正義の味方の活動に一枚噛むことが出来るということもあるが今回ばかりはそれは二の次。本音を言えばまたあの

男が何処かで俺を襲ってくるかも知れないという懸念があったからどうしようかと悩んでいた。
「いいぜ。俺としては渡りに船だからな。出来る範囲でなら協力するよ」
「……本当にいいの？　普通は怪しむところでしょ？」
「夜城が悪人じゃないのは今までの行動で分かるよ。それに知ってるだろ？　ガキの頃から正義の味方に憧れてたって話。好奇心があるのは認めるけど、だからと言って遊びでクビを突っ込もうなんて考えるほど、俺は馬鹿じゃない」
「……」
今度は夜城が黙り込む。恐らくは俺の言葉の真意を吟味してる最中だろう。自分で言うのも悲しくなるけど俺、夜城にはあまり信用されてないからちょっと不安なんだけ……大丈夫か？
「……うん、分かった。ここで私と話をしてる時の皇君はちゃんと答えてくれたらから信じてあげる」
「このギャップに惚れたか？」
「今ので恋をするほど私は軽い女じゃないよ」
そりゃそうだ。今時そんなんで一目惚れするような女なんて居る訳がない。
「けど夜城、協力するとは言ったけど具体的にはどんなことをすればいい？　承諾しておいて何だが、その……まるで検討が付かない」
「それは……」
「その件については私から説明しましょう」
夜城が言いづらそうに口篭ってると取り繕うように黒南風さんが口を挟んできた。
……夜城との話に夢中で今まで存在を忘れていたのはここだけの話だ。
「先程も申されましたように皇様がお嬢様のサポートをするようなことをするのでは御座いません。それに実際、協力と申されましても皇様は我々に血の提供をして欲しいのです」

「血の提供って……意訳するならサンプルが欲しいということですか？」
「左様で御座います。勿論、あくまで血液採取が目的でありますので非人道的な実験をする訳では御座いません。ただ、皇様は我々に血を提供して、研究する機会をお与えして下されば結構ですので」
「……」
どの辺が協力なんだ？　いや、始めからそう特別なことなんて期待しちゃいなかったけど……。こりゃあ夜城の奴が言いづらそうにする訳だ。
「……それだけ、ですか？」
「はい。たったこれだけのことで結構です。後のことは我々の仕事ですので。……もしや、皇様に限って気が変わられたとかそのようなことが御座いませんよね？」
「いえ、それはありませんけど……ただちょっと拍子抜けな感じなのは否めませんが」
そりゃあ、俺に出来ることが少ないってことぐらいは理解できるさ。でもな、なんかこう、男としては格好が付かないジャン？　だから俺個人としては血の提供以外にも何処かで何か役立つようなことをしてやりたいワケよ。
「じゃあ、決まりだね。血液採取は午前中でいいよね？」
「あぁ、俺はそれで構わない。……あぁそうだ、ついでに食事が終わった後でいいから電話貸してくれないか？　一応、家には連絡入れておきたいから」
「連絡？　……あぁ、それなら大丈夫だよ。こっちの方で連絡入れておいたし、向こうも事情を分かってくれたから」
「……？」
なんだ。今の違和感は？　今の言葉にそう深い意味はないように思えるけど、それとなく夜城の言葉に妙な言い含みがあるように聞こえたんだが……。
「……」

やめよう。考えたところで何か分かる訳でもない。それより今はこの空腹感を満たすことが先だ。特別珍しい料理が並んでるって訳じゃないんだがとにかくここのメシは美味い！　だからここでしっかりと味わっておかないと多分、俺は一生後悔すると思う。

「やっぱり皇君って、朝はしっかり食べる方なの？」

対面の席に座っている夜城がチマチマとクロワッサンを食べながら尋ねてくる。お嬢様育ちという風には見えないが、少なくとも夜城の食べるペースはとにかく遅い。どのぐらい遅いかと言えば俺がクロワッサン三つを食べ終えた頃にようやく一つ目のクロワッサンを完食しおえるぐらいのペースだ。

「そりゃあ、体調管理ぐらい出来て当然だろ？　……いやしかし、それを聞くところから推測するに夜城、まさかお前は正義の味方でありながら自分の体調すら満足に管理できないと言うのかな？　ん？」

「え～っと……そんなことはない、よ……？」

そんなことはない、ねぇ。だがな、そんなあからさまに視線を逸らして言い淀んでるお前を見ても説得力に欠けるぞ？　何より俺はそういう反応をされると外堀を埋めたくなる性分でな……。

「あぁそうか。そりゃそうだよな。まさか夜城に限って朝はギリギリまで寝たり朝食を抜いたりするようなダメダメなヒーローな訳ないよな？　いや本当スマンな夜城、どうやらそれは俺の思い過ごしだったようだ。……でもさ、夜城。それなのにどうしてお前の頭、アホ毛型の寝癖があるんだ？」

「えぇ！？　そ、そんな訳……ぁ……」

慌てて自分の頭を撫で、寝癖を確認しようとしたところで夜城は気付いたのか、動かしていた手をピタリと止めて俺に注目する。あぁやばい、そんな期待通りの反応されるとますます苛めたくなってしまうではないか。

「ん？　どうした夜城？　俺は別にお前を担ごうとしてあんなことを言った訳じゃないぞ？　言うなればあれは全部勝手な憶測だ」

「憶測？　……そ、そうだよね……。全部皇君の憶測だよね……」
「あぁそうだ。お前が俺のカマ掛けに勝手に反応して墓穴を掘った姿から推理した憶測に過ぎん」
「はぅっ！」
「ほっほっほ……なるほど。皇様はこのようにお嬢様をからかっておられるのですな。この黒南風、一本取られましたぞ」
「見てないで助けてよ黒南風さん～」
「私はお嬢様の執事で御座いますが、何も甘やかすだけが執事では御座いません。時には厳しく主に接することも執事の勤めです」
「黒南風さん絶対面白がっているでしょ？！」
うん、夜城それ大正解。だって付き合いの浅い俺から見ても黒南風さんの目が潤んでいるように見えるから。
多分、本当にこういう夜城を今まで見たことがなかったんだろうな。あいつ、根っこは真面目だから加減も分からないまま真面目に生きてきたんだろう。そう思うと少しだけ夜城のことを不憫に思いつつ、俺なんかよりもずっと凄い奴なんだということを思い知らされた。
（俺も少しは夜城見習って頑張るかな……）
正義の味方になりたいと思う一方で、現代社会ではそんなもの正義の味方になれないと悟る一方で、自分は一体何になりたいのか？
何か一芸に秀でてる訳でもなければこれになりたい！　という夢がある訳でもない。そういう意味だと確かな目標を持っていて、それに向かってしっかりと歩いている夜城が裏やしいのかも知れない。
朝食を済ませてから客室でしばし暇を潰した後、怪しげな道具を乗せて運ぶ黒南風さんと夜城が部屋に入ってきた。ただ血を抜くだけの検査だから特殊な機械に乗せられたりする訳じゃないってことぐらい分かってたけど……やっぱりそういうの期待しちゃうよな？
男だし。

「普通の血液検査とそう変わらないのか？」
椅子に座ったまま、アルコール液を染み込ませたガーゼを皮膚に浸透させながら夜城に訊いてみた。因みに黒南風さんはすぐ隣で血抜き作業と検査道具の点検をしている。
「んー、そうなるかな？　強いて違う点を挙げるなら血中に含まれてるＡＰ数値の測定ぐらいかな？　……あ、ＡＰ数値ってのはね、数値が高ければそれだけ能力に対する抵抗力が強いし、強力な能力持ちの可能性があることを示唆するの」
「へぇ……」
つまり、このＡＰ数値が低すぎれば能力者としての適正がないと見なされるのか。けど夜城は一括りに能力って言ってるけどやっぱり属性とかあるのか？
「興味本位で訊くけど、やっぱり能力にもカテゴリがあるのか？」
「んー、一応あるけど細分化はされてないよ。能力って言っても攻撃・防御・支援の三つの種類に分別してる程度だし。……あ、皇君なら検討付いてると思うけど私は攻撃型だから」
「夜城の場合、どっちかと言えば後方で回復魔法唱えるキャラだと思うんだがな」
言っちゃあ悪いが普段のこいつを見てると到底、そこそこの運動力（と言っていいのか？）を持ってるようには見えない。むしろ何もないところで転んだりあたふたしたりするのが良く似合う魔法使い系のキャラだろう。
「皇様、準備の方が整いました」
「あ、はい。では黒南風さん……お願いします……」
「では、失礼します……」
俺に断りを入れてから黒南風さんは注射器を手に持ち、これから刺すぞと言わんばかりにアピールする。うっ……注射の針が刺さってるところを見るのはどうも苦手なんだよなぁ。
「皇君、どうしたの？　顔色悪いよ？」
「いや、俺こういう見るからに痛い系は駄目なんだ……」

「ほっほっほ……心配いりませんぞ。なにせ痛みはほんの一瞬ですから」
　そんなこと分かってる。分かってはいても――どうも針が刺さってるところを見ると強い嫌悪感が出て気分が悪くなるんだ。そんな訳で俺は注射が血管に突き刺さるよりも前に視線を逸らし、力の限り目を瞑る。くそ、よもや夜城に俺の唯一の苦手なものを知られる日が来ようとは……皇聖、一生の不覚……ッ！
「皇君って、本当に注射が苦手なんだね。正直、すっごく意外」
「人間、誰しも得手不得手ってモンがある。俺に苦手なものがあったって不思議じゃないだろ？」
　少し嫌味っぽく言い返してみても夜城は『やっぱり意外だよ』と、呟く。目を瞑っているからどんな状況下分からないけど多分、俺の様子を観察してるに違いない。
　しばし何処となく気まずい沈黙が流れるがそれもほんの数秒の出来事。腕に針が刺さってる感覚が前触れもなくスッと消えていく。血液の採取が終わったのだろうと思い、そっと目を開けて――
「おっと、これは失礼。まだ採取の途中でした」
「しまった、フェイントか！？」
「フェイントでは御座いません。ただの冗談で御座います」
　いやいや大して意味変わらないでしょ黒南風さん！　ていうか本当マジでフェイントとかビックリしたわー。またあの細い針で腕を刺されるかと思うと気分が悪くなる。
「おや？　どうかなされましたかな皇様。顔色が優れないようにお見え致しますが？」
「わざと聞いてるでしょう、黒南風さん」
「さて、私には何のことやらサッパリ分かりませんな」
「ついさっきフェイント掛けた人間の言う台詞とは思えませんね……」
「ふぇいんと？　一体何の話で御座いましょう？　私、最近は物忘れが激しい上に流行り言葉には疎いものでして」

のらりくらりと俺の反論を受け流しながら採取した血液を試験官へ移し変え、見慣れない機械にセットしてボタンを押して機械を起動させる。真っ暗だった画面に光が灯り、緑色のディスプレイに曲線グラフが表示され、グラフの外側に文字が羅列していく。

「……」

画面に映し出された検査結果を夜城と黒南風さんはジッと見つめる。当然、門外漢である俺には画面に映ってる情報を理解することなど叶わない。グラフの外側の文字だってＸＰ数値がどうとか……もう完全に専門家の世界だ。

「思ってたより高くないね、ＡＰ数値」

「はい。しかし、このＸＰ数値が高いのが気掛かりですな」

「うん。珍しいケースだよね、これ」

一体何がどう珍しいのか俺はまるで分からない。が、分からないなりに考えてみた結果、どうやら俺のＡＰ数値は普通レベルだということ。そしてＸＰ数値が高く、俺という存在がイレギュラーであることを示しているということぐらいだ。

「夜城、ＸＰ数値が高いと何か良くないのか？」

二人がしかめ面で画面を睨んでいる姿を見て、思い切って俺は検査結果を訪ねてみた。出来ることなら色好い報告であって欲しいのだが……。

「うん、結論から先に言うと高いのが悪いって訳じゃないよ。ＡＰ数値は平均値より少し高い程度だから能力持ちってことに変わりはないから。でも、このＸＰ数値――簡単に言うと能力に対する防御力がＡＰ数値と釣り合ってないのが少し気になってね……」

そう前置きしてから夜城は簡単にＸＰ数値について説明を始める。

曰く、ＸＰ数値は能力に対する抵抗力を示すものであり、本来ならばＡＰ数値に近い数値であるのが正常らしい。その理屈で行けば俺はどうやらＡＰ数値よりもＸＰ数値の最大値が高いわりには平常時の数値が低く、俺を襲った奴の電撃を何度も受けて生きているのはおかしいそうだ。何か特別な能力持ちかも知れないと思って他の

データも調べてみたところ、どれもパッとしない結果だった。
「こうなってくるとやっぱり皇君の能力が関係してるのかな？」
「そう考えるのが自然でしょう。しかし、そうなると科学班の班長が出張中なのは痛いですな」
能力とか言ってる時点で充分非科学的だと思うんだが？　今ひとつ状況が飲み込めないが少なくとも科学班の班長がいなければ詳しい能力の属性を調べることが出来ないってのは理解できた。つまり、今回の検証はここで終わりってことだ。
「ゴメンね、皇君。科学班の班長が帰ってきたら再検査っていう形でまたここに来てもらうことになるけど、いいかな？」
「言っただろう？　俺に出来ることなら協力するって。……でだ、夜城。どうせ科学班とやらが帰ってくるまでやることもないだろうから――」
「学校にはちゃんと行こうね？」
む……夜城にしては珍しく俺の言いたいことを読んだな？　そりゃ確かに今から準備すれば三時間目には間に合うだろうけど……正直、時間が時間なだけに行く気が全くないんだが？
「なんだ、夜城。学校には風邪で休んでるって連絡入れておかなかったのか？」
「適当な理由付けて後から登校するって行っておいたから行かないと駄目だよ。あ、勿論皇君のこともちゃんと説明済みだから」
「余計なことを……」
別に学校が嫌いって訳じゃない。ただ、今から登校することに抵抗を感じるだけだ。それに俺は今、得体の知れない敵に目を付けられてると言っても過言じゃない。その辺の運動部に毛が生えた程度の実力じゃ結果はたかが知れてる。だから出来るだけ外へは出歩かないことに越したことはないが――
（やっぱコソコソ隠れるよりも打って出た方が性に合ってるな）
夜城の後ろに隠れて保身に走る――そんなダーティー且つ卑怯な凌ぎ方は俺の流儀に反する。状況だとか命だとか俺にとってはそん

なのは二の次。大事なのは長生きすることじゃなくてどれだけその日、その瞬間を一生懸命生きたかってことだ。あ、これ俺の座右の銘な。
「ほら、何落ち込んでるの皇君。早く学校行くよ」
「落ち込んでねぇって。……それより夜城、お前一つ大事なこと忘れてるぞ？」
「大事なこと？」
むっ？　なんだその『皇君にそんなこと言われるなんて心外だよ～』みたいな顔は？　今更学校へ行くことに反発しないがこのままじゃ俺は学校に行けないってことにどうしてこいつは気付かないんだ？
「大事なことって何？　宿題とかそういうオチじゃないよね？」
「そんな夜城沙耶さんに質問です。学校へ行くにはまず何をしなければならないでしょう？」
「……あっ！」
やっと気付いたか、夜城の奴。天然もここまで来ると笑いを通り越して感動するな。
あぁそうだよ。いくら何でも手ぶらに私服の状態で学校なんか行った日には生活指導を担当する教師の雷が直撃しちまう。
全く、本当にこいつは頼りになるのかならないのかイマイチ判断が付かないな。
「そういう訳だから夜城、ひとまず学校には寄らずに俺の家に寄ってくれ。あぁ勿論、俺に手ぶらに加えて私服で登校させてクラスの評判を落として不良呼ばわりしてクラス全員シカト的なイジメがしたいのであれば話は別だぞ？」
「うぅ～……皇君の中だと私、そんなに意地悪な転校生に見えるわけ？」
「そうだったら面白いな～と思ってるだけだ」

動き出す者。（前書き）

きりのところで終わったのは久しぶりです。
まだ残暑が厳しいですが朝と夕方は先月と比べてかなり過ごしやすくなった分、マシになったと言うべきでしょうか。でも夏が苦手な私にはまだキツい訳で……。

動き出す者。

制服に着替えた夜城を出迎えて、屋敷の外へ出ると既に黒塗りのベンツが待機していた。使用人としての性分なのか、俺達の姿を確認すると黒南風さんはわざわざ運転席から降りてドアを開けて俺達を中へ誘導する。夜城は慣れてるからともかく、庶民気質な俺にはそこまで丁寧なもてなしを受けるとくすぐったい気分になる。

俺達が席に付いたのを確認すると黒南風さんは再び運転席へ戻り、車を走らせながら俺のナビに従って家を目指す。屋敷から学校までの通学ならリムジンでも何の問題もないが俺の家は道幅が狭い為、リムジンでは曲がりきれない角が多い。仮にそうでなくとも細長いリムジンが市街地を走ればそれだけ迷惑だと思うけど……。

「そこの角を左に曲がってから車を止めて下さい」

屋敷を出てから僅か十分。あっと言う間に俺達は目的地周辺までやって来た。左へ曲がり、適当なところで車を黒南風さんは車を停止させる。

「出来るだけ早く戻って来てね？」

「夜城、そこは気をつけてねと言うとこだろ」

「別に気をつけることなんてないと思うけど？」

チッ、やはり夜城にこのノリを期待するのは無理があったか。そのことに少しだけ落胆するものの、すぐに俺は下車して足早に自宅へ向かう。流石にこの時間に君江さんが家に帰ってるとは思えないけど、なんか見つかったらどうしようという罪悪感がもやもやとして胸にこびり付く。

「……？」

玄関前まで来て何気なく家を見上げた時、ふと妙な違和感を覚えた。パッと見た感じは別に変わったところはないんだが……なんだ？　なんか妙な胸騒ぎがする。

「……」

分からない。俺は一体何を感じ取ったんだ？　自問しつつ鍵を開けて入ろうとしたが逆に鍵が掛かってしまう。えっ？　ひょっとして俺、鍵開けっ放しで朝出て行った？

（……いや、そんな筈はない）

昨日の記憶を辿ってみてもその可能性はないと、自信を持って言える。確かに俺は昨日、学校へ行く前にしっかりと戸締りをして出て行った。玄関の扉に鍵を掛けて、本当に掛かってるかどうかも確認したから間違いない。にも関わらず玄関の鍵が開いてたということは君江さんが家にいるかも知れないってことか？

（家に居るからって鍵掛けないのは無用心でしょう……）

胸中でこの場に居ない君江さんに忠告して、改めて鍵を開けて入って――思わず絶句した。君江さんが腕を組んで仁王立ちしてるから？　それだったら冷や汗ものだけどある意味状況はそれより酷い。

だって――玄関を開けて飛び込んだ光景は荒らされた形跡が傷痕として残っていたんだから。

「君江さんっ！」

堪らず、家主の名前を大声で呼ぶ。靴を脱ぎ捨ててリビングに駆け込む。

椅子が倒れ、花瓶の破片が広がっているが人の気配は感じられない。いつも通帳と印鑑をしまってある引き出しを確認してみたが抜き取られた形跡はなかった。それだけで物取りでないことは明白だ。

（まさか、君江さんが……っ！）

家に入る前から感じてた胸騒ぎがここに来てはっきりとした形で俺の心を掻き乱す。慌てちゃ駄目だと必死で自制心を働かせて君江さんの部屋を目指す。

ドアノブを捻って、扉を開ける。本棚にビッシリと並んでた本は床に乱雑している。引き出しも開きっぱなしで大事そうな資料がその辺に投げ捨てられてる。前々からどんな仕事をしてるか謎だったけど、ひょっとして君江さんの仕事って結構危ない系だったりするのか？

（くそっ、次から次へと……っ！）
苛立ちのあまり、壁に拳を叩きつける。自分の力ではどうすることも出来ないと分かってはいても家族の身に何かあって平然としていられる程、俺はドライな人間じゃない。頭では分かっていても感情が追いつかず、二度三度と壁を叩く。それで気分が晴れる訳がないが少しだけ落ち着きを取り戻すことが出来たのは不幸中の幸いだ。
（……そうだ、携帯……）
君江さんがこの家に居ない。それは分かった。なら残された手段は携帯に連絡して安否の確認を取るしかない。電話帳を呼び出して君江さんの番号にコールする。
『この電話は現在、電源が切られているか、電波の届かない地域にあります――』
「くそっ！」
電話も駄目か。安否が確認できない以上、後はもう君江さんの無事を祈るしかない。取り合えず学校行く準備する前に警察に連絡した方がいいだろう。そう思い、携帯から警察へ連絡しようとして――
「水を刺すようで悪いけど、警察は止めた方がいいと思うよ」
俺の行動を制止するように第三者の声が介入してきた。誰かなんて確かめるまでもない、夜城だ。
「なんで来たんだ？」
「皇君の叫び声が聞こえたから」
そうか、俺の声はそんなに五月蠅かったのか……。いや、今はそんなことを考えてる場合じゃない。
「夜城、警察は駄目だと言ったが犯人に心当たりでもあるのか？」
俺の質問に夜城は小さく首を振る。じゃあなんで警察は止めた方がいいなんて言い出したんだ？
「犯人に心当たりなんてない。……でも犯人の目的なら分かった」
「目的って、君江さんじゃないのか？」
「少し違う。犯人の目的は栂野君江じゃない、私たちと同じ六条星夜の確保。それが奴等の目的」

そう前置きしてから夜城はトランプサイズのカードを俺に差し出す。表の柄は見たこともないレリーフが彫られてる。多分、君江さんを襲った敵組織のエンブレムか何かだろう。
「灯台下暗しってよく言うわよね。正直、こんな身近に居たなんて完全に盲点だったわ」
身近に居た？　一体何の話をしてるんだ、夜城の奴は？
「皇君は知らないのも無理はないけど、皇君の育ての親……栂野君江さんは私たちの組織で科学班の班長をしてるの。だけど栂野さんは始めからこちら側の人間じゃない。十数年前、私たちが拾った人。そして私たちが拾う前の彼女は六条の姓を名乗ってた」
「……」
初耳だった。前々から君江さんは只者じゃないとは思っていたけどまさか君江さんの職場が夜城の科学研究部で、しかも昔は夜城と敵対関係にある六条家の人間だったなんて……。正直、あまりの展開に俺自身が付いて来れてない状態だ。
「……それで、夜城はどうするつもりだ？」
「栂野さんが六条の姓を隠してたってことは六条星夜である可能性が出て来たから探すわ。確かに性別を偽ってウチの傘下に入れば隠れ蓑としては最高の環境よ。私たちからしたらまんまとやられたってところだけど」
「……」
夜城の言い分は分かる。警察とは根本的に違う組織であるなら個人の経歴をより深く調査することはないだろう。そういう組織もあるかも知れないが夜城たちのところはそれをしなかった。だから今まで君江さんは身分を隠し通すことが出来た。
だけど――
「君江さんのこと、信じてやってくれないか？」
夜城は六条星夜の処遇に対して『悪いようにはしない』とは言ったけど正直なところ、今の夜城を見るとその言葉を信じるのが難しい。それに夜城は普段の時と戦う時とのギャップが激しいから本当

に何をするか分からない。
「それは栂野さん次第だよ。私が正義の味方である以上、悪は絶対に許しちゃいけない存在だから」
真っ直ぐな眼が――まるで俺の心の内まで射抜くような眼光が、俺の網膜に焼きつく。そこには普段のおどおどした夜城の姿なんて全く見当たらない。あの眼はプロの格闘家がリングに上がって相手を睨める時の視線そのものだ。
「ひとまず私はこの部屋を少し調べるから皇君は先に学校行ってて」
話はそこで終わりなのだろう。夜城は携帯を使って黒南風さんを呼ぶとすぐに乱雑した本をいくつか手に取り、ページを捲り始める。多分、俺が声を掛けたところで夜城が俺に興味を示すことなんてないだろう。だから俺は黙って君江さんの部屋を出て行くことにした。
「……」
パタンっと、扉の閉まる音が耳朶に強く残る。酷く静かな廊下はまるで俺の気持ちそのものを表してるように思える。
家族がピンチで、友達がその家族に危害を加えようとしている――君江さんも夜城も、どちらも俺にとって大事な存在で、どちらか一方を取ることなんて出来ない。それでも俺は選ばなければならない。揺らした天秤が掲げた方を手に取り、傾いたモノを切り捨てる覚悟を。

聖が部屋から出て行ったのを確認することもなく、入れ替わるように入室してきた砕牙に短く指示を飛ばし、黙々と資料を読み漁る沙耶。まだ君江が星夜であると断言は出来ないが大まかな筋は通っている。
六条星夜が六条本家から消えたのは十年前。そして君江が名前を偽り、夜城家に拾われたのも十年前だ。話の筋は通るし、何より当時の六条家は後継者争いの真っ只中だったと聞いてる。当時の星夜がそれなりの歳であることは容易に想像が付いた。
（後は、栂野さんが六条星夜だという証拠さえあれば……）

君江が名前を偽っているのは分かったが、正直なところ情報不足で君江が六条の人間だという確かな証拠は掴みきれていない。とはいえ、全く信憑性のない情報でもないので現状は『その可能性が高い』という程度のものなのだが……。
「……？」
何気なくページを捲ると、不意に一枚の写真が抜け落ちた。興味本位で写真を拾い上げてみるとそこに移っていたのは君江を始めとする六条家の人間。
そして――
「……そういうこと、だったの」
写真に写っているその人物を見て、誰に言う風でもなく呟く。どうして星夜が六条家を抜け出せたのか今まで謎だったがその写真にはその答えが示されていた。時間は掛かったが自分たちの読み通り、星夜はこの町にいた。
「黒南風さん、皇君は？」
「皇様でしたら今頃は学校へ行っていると思われますが、如何なさいましたか？」
「六条星夜の正体が分かったわ。これを見て」
事務的に告げると沙耶は写真を砕牙に投げ寄こす。空中に放り投げられた写真を器用にキャッチした砕牙は言われた通り写真に目を落とし――驚愕した。
「お嬢様、まさかこれは……」
「そう。星夜っていうぐらいだから女だと思ってたけどそれがそもそもの間違いだった」
淡々と告げ、砕牙から写真を受け取りそれを本のページに挟み直し、本棚へ戻す。君江が六条の姓を名乗っていたのは事実だろう。しかし彼女は星夜ではなく、彼を屋敷から連れ出した張本人。どういう意図を持ってそんな行動に出たかは分からないが、今一つだけハッキリしていることがある。
「黒南風さん、すぐに追いかけよう。まだ遠くへは行ってない筈だ

から」

後ろ指を突かれてる気持ちはあるが、正直なところ真っ直ぐ学校へ行く気分にはなれなかった。学校で授業を受けて放課後になった頃には多少なりとも落ち着くことが出来るかも知れないが、それでも俺は学校へ行く気分にはなれなかった。

（君江さんが巻き込まれた原因はやっぱり、俺だよな……）

家の現場と現状を鑑みれば俺に原因があるのは一目瞭然だ。しかも夜城は俺の家を捜査してるんだ。、、、、あのことがバレるのは時間の問題と言っていい。だから俺は敢えて学校へは行かず、こうして私服で町に出てる。……あぁ、藤原先生のメンチ切った顔がありありと眼に浮かぶわ。

（タイヤ引きグラウンド二〇周ぐらいは覚悟しとかないとなぁ……）

呑気にそんなことを考えつつも、どうすれば君江さんを助けられるかを考える。ついでに夜城の対応策も練らなきゃならない。

当たり前だが正面から戦うのは論外。夜城家ってのは表の世界でも結構幅の利く財閥だ。そうでなくとも人員を割いて俺を探し出すなんてことは容易い。となれば残る道は夜城自身の説得なんだが……まぁその辺については追々考えるとしよう。まずは君江さんの行方だけでも掴まないと。

（けど、どうやって行方を掴めば……）

夜城の話によれば警察関係者はあまり宛にはならないらしい。仮にそうでなくとも事実関係がハッキリしてないこの事件をまともに扱ってくれるかどうかさえ怪しい。そもそも君江さんが今、無事に逃げ延びているのか？　それとも既に捕まっているのかさえハッキリしてないんだ。せめてそれだけでも分かればもちっとマシな方針が立てられるんだが……。

あーでもない、こーでもないと一人悶々と唸っていると不意に携帯電話が鳴った。画面には公衆電話と記されていた。

「……はい、皇です」

『聖、私よ』
「き、君江さん！？」
深く考えずに電話に出てみれば相手は君江さんだった。こうして電話を掛けてきたってことは少なくとも君江さんは敵に捕まってない……と考えていいのか？
「君江さん、今何処にいるんですか？！」
『安全な場所よ。それより聖、あなたここ数日誰かに襲われたりしなかった？』
「それは……」
正直に話していい事なのか？　でも今のところ手掛かりが無いに等しい状況だし……。
「……六条星夜の件で襲われたよ。それと夜城沙耶って娘から君江さんの職業のことも知った」
『沙耶ちゃん今こっちに来てるの！？』
「来てますけど……君江さん知らなかったんですか？」
能力云々の件もこともあるから俺はてっきり君江さんもある程度の事情を知ってるとばかり思ってたんだが……。ひょっとして君江さん、夜城と面識薄いのか？　でも夜城のことちゃん付けで呼んでたからそれなりに親しいとは思うけど。
『……聖、もしかして夜城ちゃん……』
「多分、もう知っていると思う」
『……』
それだけで君江さんは俺の言いたいことを悟り、押し黙ってしまう。君江さんも何時かはこんな日が来るって予想はしてたんだろうけど今回は間が悪すぎる。そしていよいよという時が来れば、俺は

『聖、もう事情は察していると思うから説明は省くわ。……今、この町に六条家の刺客が二人いるわ。あなたを捕らえる為に』
「はい……」
『本当なら私が側にいて守ってあげなきゃいけないけど今、それを

することが出来ない状況なの。……けど聖、あなたならどうにか持ち堪えてくれるわね？』

「任せて下さい君江さん。君江さんだって知っているでしょう？俺は――正義の味方なんですから」

君江さんを安心させる為に強がってみたけど実際、君江さんがどうにかしてくれるまで持ち堪えられる自信なんてこれっぽっちもない。相手は戦いのプロに対して俺は素人丸出し。しかも俺の能力は未だにどういう物なのか分からない状態。逃げ切れるっていう確信はないけどここまで来たら乗りかかった船だ。是が非でもやってやろうじゃないか。

『それを聞いて安心したわ。出来る限り早く合流するからそれまで無事でいてね。……じゃ、切るわよ』

その言葉を最後に、君江さんは電話を切った。もう後戻りは出来ない状況だが元より逃げ場なんてない。いや、逃げ場がないっつーか単に逃げ回るだけだしそれはそれで男としてはちょっと情けない気もするけど……致し方ない、か。

（……ま、とにかく今は逃げるか）

別段、隠れ場所に宛がある訳じゃないがひとまず人込みの多い通りに出てどうするか考えよう。木を隠すには森っていうぐらいだからな。……あぁでも、こうなると分かればせめて足ぐらいは用意したんだが……流石に今、家に戻るのは危険か。鉢合わせなんかしたら大変だし。そう思いながら俺は商店街の方へ向かっていった。

聖が本格的な逃亡を始めた頃、学校は丁度その日のカリキュラムを終えていた。この日の授業は教員側の都合で短縮となり、普段の日よりも早く放課後を迎え、多くの生徒があの先公が口うるさいだの、駅前に新しい店が出来たなどと話しながら帰路に着いていた。

「……」

そんな中、一人だけ明らかに機嫌の悪い生徒がいた。

喜多川宗谷である。文武両道、容姿端麗、才色兼備、おまけに実

家は金持ちである彼は典型的な御曹司と言ってもいい。唯一、欠点らしい欠点を挙げるとするなら男に対してのみ、上から目線であることぐらいだろう。その彼が今、こうして悩んでいる姿は――実はそう珍しい光景ではない。

（皇聖め……）

結局、今日は登校することのなかった友人の顔を思い浮かべる。有り体に言えば宗谷は聖に対して強い劣等感を抱いている。成績で負けてる訳でも、容姿が劣っている訳でもない。なのに自分はただの一度たりとも、あの男に勝ったと思えた試しがない。

（何故、あいつばかり……）

あいつばかり、俺の欲しいものを手にしている――

何度も自問してきた問いを胸中で反芻する。能力で勝っていようとも、自分にはどうしても聖のようなカリスマ性がない。クラスの皆は彼のことを良く思っているし、クラスでの話し合いが暗礁に乗りかかった時は大抵、彼が率先して場を纏めていく。

無論、彼にもそれだけの能力はある。が、少なくともクラスメイトたちが選ぶのはいつも決まって聖であって、宗谷ではない。

昨日の一件もそうだ。新たに自分たちのクラスにやってきた転校生――夜城沙耶は他の誰でもない、聖に対して誰よりも強い好感度を抱いている。当人たちは否定してたし、聖も彼女には興味がないと言っておきながら気さくな感じで彼女と実に楽しそうに話をしていた。

嫉妬。羨望。宗谷の心像を言い表すなら概ねそんなところだろう。

「そこの君、少しいいかな？」

「何だね？」

不機嫌極まりない時に声を掛けられた所為か、いい加減な態度で対応する。教師か友人がその場に居れば彼の行動を見咎めていただろうが生憎と周りにはそういう人間は誰一人としていなかった。

「失礼。どうも私から見たあなたは心中、穏やかではないので何事かと思いまして」

「そうですか。でしたら放っておいて頂けますか？　こう見えても僕は――」
「皇聖に勝ちたくはないですか？」
「ッ！？」
　まるで自分の胸中を読み取ったかと思ってしまうほど、目の前の男は宗谷の気持ちを正確に言い当てた。不機嫌だとか、怒っている風に見えるという次元ではない。完全に心を読んでいると言っても差支えがないレベルだ。しかもこの男は聖のことを知ってると来ている。
「皇の知り合いですか？」
「知り合いという程でもないが……まぁ、似たようなものだと思ってくれて構いませんよ。……それより君に一つ聞いておきたいことがあります」
「何ですか？」
　不審に思いつつも、宗谷は特に考えず男の話に乗ってきた。それを見て、男は僅かに口元を吊り上げるが宗谷がそれに気付くことはなかった。
「君が劣等感を抱いている男……皇聖に勝ってみたくはありませんか？　もし君にその気があるなら私は協力することを約束します」
「ほ、本当ですか！？　……あ、いや。疑う訳じゃあないんだが、本当に勝てるんですか？」
「えぇ、本当ですとも」
　念を押すように訊く宗谷に対し、男は笑顔で答える。その表情から何かを汲み取ったのか、彼は実にあっさりとこの男の言葉を信用してしまった。
「そういうことなら是非お願いします！　……えっと――」
「ガイ、と申します。私を知る人間は皆、そう呼んでおります」
　その男――六条家から派遣された彼は、極めて友好的な笑みを浮かべてそう言った。

六条星夜の正体（前書き）

物語も佳境に突入しました。
一応、次回が最終回の予定です。

六条星夜の正体

電車を使って地元から離れて都心へ向かう。人が多く、人混みを利用できそうな場所と言えばやはり都心が一番だというのが俺の結論。六条家の人間に土地勘があるかどうかは別にしても日中の都会の地下駅は絶え間なく人が出入りしてる上に建物としての構造も複雑だ。これなら万一見つかったとしても人混みと地の利を活かして逃げ切ることが出来るだろうというのが俺の作戦だったんだが――

（思いっきり先手打たれるジャン……）

向こうがこちらの存在に気付く前に、適当な物陰に隠れて二〇メートル先の様子を窺う。いつかの公園で鉢合わせした時の戦闘員と全く同じ服を着た男が三人。ていうかあいつ等、町中でもあんな格好なんかして恥かしくないのか？　道行く人たちが皆、同じような反応してるから見る分にはちょっと面白いけど。

それはそれとして――問題はこの後、どう逃げ続けるかだ。雑魚キャラよろしく戦闘員がこっちに来てるってことはそれなりの人数を割いてこの地域に人員を送っていると考えるのが常識……うん、待てよ？

（鉢合わせたのは偶然か？）

いくら向こうに資金力があるとはいえ、何の手掛かりもなく包囲網を敷くことなんて無理だ。しかもここは俺の地元から何キロも離れた場所。偶然という理由だけで戦闘員と鉢合わせしたとは考えにくい。

では仮に――この鉢合わせが偶然ではないとしたら奴等はどうやって俺の居場所を特定した？　目撃情報か？　発信機か？　或いは人探しに特化した能力者の仕業か？

（……いや、今は逃げることだけに集中しよう）

それにまだこの鉢合わせが必然的なものという確証はない。本当にただの偶然ってこともありうる。俺はあいつ等に気付かれないよ

う、静かにその場から立ち去ろうとして――
「隊長、居ました！　あそこですっ！」
「よーし良くやった！　逃がすな！」
速攻で見つかりました。あぁもう、戦闘員ってのはどうしてこうもＫＹなんだ……っ！　戦闘員の姿を確認せず、俺は迷わず全力で走り出す。ワンテンポ遅れて三人の戦闘員（うち一人は隊長らしい）が後を追う。周りの人も、駅員も何かの撮影か何かだと思っているのか、遠巻きに物珍しそうに俺達の様子を観察するだけで特に何も言ってこない。
のんびり歩く通行人の間を縫うように駆けながら頭の中で地図を組み立てていく。定期券があるから改札口で足止めされるようなことはなくても今はまだ地下に潜伏しておきたい。日中よりも夕刻の方が人混みを利用しやすいっていう算段もあるから。
「六条星夜、大人しく我々に捕まるのだ！」
「はいそうですかと言って捕まる馬鹿がどこにいる！？」
「仕方ない……ならば力ずくで貴様を捕らえるとしよう！」
いや、お前ら始めから実力行使してるジャン。……なんて突っ込みを入れつつ電光掲示板を見上げてダイヤの確認をする。今すぐに乗れるような電車は三本。出発が早い順番に並べると急行、各停、快速だ。どの電車に乗るか少し考えたが俺は急行を選ぶことにした。
「はっ、はっ、はっ……」
長い階段を三段飛ばしで、それも全力疾走していけば流石に息切れも起こす。運動は好きでしているが本格的なトレーニングをしている訳じゃない。勿論、それでも普通の人よりは体力があると自負できるが階段ダッシュはやっぱキツイな。
階段を駆け上がり終え、行き着く間もなく電車へ逃げ込み、車両から車両へ移動する。乗客は不審がって俺を見るがそんな視線を気にする余裕なんてなかった。
（来た……っ！）
駅構内で発射を告げるベルが鳴り響くと同時に窓越しに戦闘員の

姿が見えた。奴等は俺が電車に乗っていると踏むや否や、真っ先に乗り込んできた。大丈夫だ、まだ俺がどの車両にいるかはバレてない。いや、それはもう時間の問題なんだが大した問題じゃない。奴等に気付かれないよう、最後の車両移動をした俺は扉が閉まる寸前で電車から降りる。軽く跳躍して、駅へ降り立つのと背後で扉が閉まる音がしたのはほぼ同時だった。

『！？』

電車が動き出し、窓越しに戦闘員三人が驚愕に染まった顔色でこっちを見つめているのが分かった。あぁ本当、ここまで見事に策にハマってくれるとやられ役以外何でもないな。

「良い旅を」

聞こえる筈がないが、遠ざかっていく三人に対して決め台詞を吐く。奴等の姿が完全に見えなくなったのを確認してから駅構内へ舞い戻る。取り合えずこれで少しの間は大丈夫だろう。

（と、その前に……）

駅構内を適当にうろついて、看板を頼りにトイレを発見した俺は一目散に個室へ入る。デカい用を足す為ではなく、服装チェックの為だ。とはいえ、夜城の家で一度着替えているから服に発信機が取り付けられてる可能性はないと思うがな。

「……」

襟の裏から靴下まで入念に調べる。それらしいモノが付いてる気配も服に縫い込まれている感じもない。となれば人探しに特化した能力者がこの場所を割り当てたのか？

「……」

その可能性を少し検討してみたがすぐに違うのではないかと思った。第一、もしそうなら駅にはより多くの人員が割かれている筈だ。それこそ、さっきみたいな小手先の技なんて通用しないほどの人数を。不可解な点は多いが、こうして考えたところで分かる訳がない。とにかく今は逃げるのが先決――

（ん……電話？）

トイレから出た時、ポケットに入れておいた携帯が小刻みに振動する。また君江さんかなと思いながら俺は素直に電話に応じた。
「はい、もしもし――」
『皇君だよね？』
「……」
相手の声を聞いて、思わず足を止めてしまった。
夜城だ。それもいつものようにのんびりした口調じゃない。銃を手に取り、敵と戦う時の彼女だ。
『それとも、こう言った方がいいかな？　、、、、六条星夜って』
「好きに呼べばいい」
やはり夜城はもう俺の正体に気付いたようだ。
俺が――皇聖の本名が、六条星夜だってことに。
『皇君、私たちに協力するって言ったよね？　それなのにどうして私たちの所に出頭しなかったのかな？』
「出来ることなら協力するって言ったと思うけど？」
『そう。……じゃあついでに訊くけど、大人しく捕まってくれない？』
「大人しくねぇ……」
正直なところ、夜城が穏便にことを運んでくれるという保証はない。かと言って六条家に戻る気なんて毛頭ないがその旨を夜城に伝えたところで今のコイツが理解してくれるかどうか怪しい。
そもそも、俺が正体を隠していたのは俺の中では六条星夜という男はもう死んだことになってるからだ。流石に実家が特撮アニメみたいな悪の組織ってのはちょっと意外だったけど、俺にとってそんなのはどうでもいいことだ。だって、俺の家族は栂野君江、ただ一人なんだから。
「どうすれば俺はお前を信じることが出来るんだ？」
『どうって……』
「お前は仲間だった君江さんを疑って、あまつさえ逮捕しようとした。俺にとっての君江さんは本当の母親も同然だ。なのに夜城、お

前はその君江さんのことを信じようとはしなかった。だから、俺はお前の言う穏便って言葉が信じられない」
『皇く――』
「捕まえたければ捕まえればいいさ。勿論、それができたらの話だがな」
捨て台詞っぽく言って、通話を切る。夜城のことを嫌いになった訳じゃないが今回の件に関してはあいつのことを信じろと言われても俺にはそれが出来ない。思い切り私情挟んでるってことも、子供じみた理屈だってことも重々承知してる。
けどさ、そんな簡単に疑うようじゃ家族や仲間とは言えないんじゃないかな？　信じるって言葉は言うほど簡単じゃあないし、何より一度信じた相手は何があっても信じきらなきゃならないものだと俺は思ってる。
ともかく、これで夜城がどう出るかは分からないがしばらくは何処かに身を潜めて様子を窺うか。
「なんだ、誰かと思えば皇じゃないか」
「えっ？」
と、いざ移動をしようと思った矢先、急に後ろから聞き覚えのある声に呼び止められ、思わず動揺してしまう俺。恐る恐る振り向けば制服姿の喜多川がそこに立っていた。
「なんだ北側か。脅かすな」
「むっ？　何故かキミの言葉に妙な違和感を覚えずにはいられないのだが……？」
「自意識過剰だろ？」
あー、本当はコイツをからかう余裕なんて全くない筈なのに長年の経験のせいか、つい反射的にからかってしまった。次からは人をからかうのも少し自粛しとくか。
「それより皇、私服でこんなところに居るということは……サボりかね？」
「悪い喜多川。今ちょっとマジに忙しいんだわ。お前の言い訳なら

明日聞いてやるから」
「僕は学校をサボってないぞっ。……それより皇、何か訳ありだというなら僕に話せ。内容によっては協力してやらなくもないぞ？」
「はっ？」
　な、なんだぁ？　今日のコイツは一体全体どうしたってんだ……。いつもなら純度一〇〇パーセントで上から目線で話すというのに今日のこいつはエラく腰が低いな。
「お前、頭打ったか？」
「やれやれ……人が親切心で優しくしてやっているというのに、本当にキミという男は無礼者だね」
　ふむ……きり返し具合からして一応こいつは本物の喜多川だな。男にも優しくする喜多川ってのはちょっと気持ち悪いがここは素直にコイツの好意に甘えてみるとしよう。と言ってもこいつが承諾してくれるかどうかはまた別問題だが。
「……実は今、追われてるんだ。あぁ一応言っておくと誇張でも冗談でもなく本当に追われてるんだ」
「ついに刑事事件にまで発展するようなことでもやらかしたのかね？」
「いや、警察関係じゃない。訳は話せないがとにかく俺はある人に追われてるから必死に逃げてるところだ。そして俺はその追っ手に捕まる訳にはいかない」
「ふむ、不明瞭なところが多々あるが……キミがとてつもなく困ってるということだけは理解した」
　そりゃお前、追っ手から逃げてるぐらいなんだからとてつもなく困ってるのは当然じゃないか。というか何？　なんでこいつこんなあっさりと俺の言い分を信じるんだ？　……いや、今はコイツにかまってる場合じゃなかった。
「そういう訳だ喜多川、今は一秒も惜しいからこれで――」
「いいだろう。協力してやろうじゃないか」
「失礼す――て、えっ？　それマジ？」

当然、こんな見通しの悪い事情説明を聞いても協力なんて得られないとばかり思ってた俺は足早にその場を立ち去る気でいたんだがこいつの口から出たあまりに意外な一言を聞いた時、自分の周りだけ時間が止まったような錯覚を覚えた。
「何をそんなに驚いた顔をしてるんだ？　この僕が協力を申し出てるんだ。もう少し嬉しそうな表情をしたらどうだ？」
「あっ、いや……そういう訳じゃなくて……」
なんつーか、フツーに意外っていう気持ちと『こいつやっぱり偽物なんじゃね？』的な感情が俺の中でグルグルと回ってる。
考えてもみろ。喜多川と言えば男子には猫の額の如く狭い心で、女子には大空のように広い気持ちで接するのをモットーにしたキザ男だぞ？　俺みたいな物好きでもない限り、こいつとまともな会話をする生徒（当然男子限定だが）なんて一人もいない。
その喜多川が、腐れ縁であるとはいえこの俺を助けるなんてことは過去に一度もなかった。こいつが心変わりしたと言えばそれまでだし、信じてやりたい気持ちもあるんだが……。
「まさか皇、友人であるこの僕を疑うというかい？　何処かの組織に追われて疑心暗鬼になるのは勝手だが、それのせいで正常な判断が出来なくなるのはキミらしくない」
「……」
何処かの組織――何でもないように言ったつもりだろうが俺はそれを聞き逃さなかった。
確かに俺は追われてるとは説明したが、数を限定した覚えはない。それに普通、これだけの説明を聞いたところで組織に追われてると推理するのは無理がある。追われてもせいぜい数人程度と考えるのが常識だ。
そして奴が発した言葉が意味するのはただ一つ――
「安心しろ、喜多川。俺は至って冷静だ」
「そうか、なら安心した。早速――」
「お前は信用できない」

目を背けず、ハッキリと俺はそう告げると同時にその場から離れた。奴が操られてるかどうかはさして問題ではない。厄介なのは今の一連のやり取りでこちらの位置がバレしまったかも知れないという懸念が強まったこと。くそっ、友人の顔を見たら気が緩んでしまうとかどんだけ逃亡者としての自覚がねーんだ……ッ！

「なっ……待て！」

俺がその場から離れると同時に喜多川がその後を追う。瞬発力なら俺の方に分があると思ったんだが、あろうことか俺は喜多川が伸ばした腕にあっさりと掴まれてしまった。おいおい、運動力なら俺の方が上だった筈だろ？

「一方的過ぎるぞ皇。何故僕が信用できないのかハッキリさせろっ」

「じゃあ訊くぞ喜多川。お前……夜城とは上手くいったのか？」

「夜城？　……あぁ、勿論さ！　この僕が女の子を傷つけるような真似をする筈がないのはキミもよく知ってるだろ？」

「あぁ、良く知ってる。……けどな喜多川。お前いつから夜城の彼氏になったんだ？」

「何時からって、そんなの決まって――」

「俺が知っている喜多川は確かに軽い男だ。だが、節操なしに女を作るほど馬鹿じゃない」

こいつの前では補足する気はないが喜多川と夜城がまともに話したことなんてただの一度もない。そもそも転校二日目にしてお互い学校を休んでいるんだ。それに俺は上手く言ってるのかと聞いただけであって、恋人関係のそれを尋ねた覚えはない。

「そういう訳だ。今のお前を信用するほど俺は盲目じゃないんでね」

これ以上、こいつに付き合う義理はない。掴まれた腕を振り払おうと力を入れて――

「……やっぱり、お前って嫌いな奴だ」

「！」

なんだ。急に喜多川の雰囲気が変わったぞ？　それまでは普段の喜多川だったけど、急に怒り出したというか何というか……まさか

コイツ、操られてるとかそういうオチか？
「大人しく僕に頼っていればいいものを……庶民のクセに何エラそうな態度取ってるんだよお前……ッ！」
ここが駅内であることも忘れたのか、力任せに腕を手繰り寄せ、ボディーブローを穿つ。片腕を封じられた状態だったせいで上手くバランスが取れず、思い切り体勢を崩してまともに受けてしまう。
「……っ、馬鹿、落ち着けッ。今は人目が――」
人目があるから余所でやろう――そう提案するよりも早く、二撃目が鳩尾辺りに入る。激痛の余り、堪らず足を崩してみっともなく身体をくの字に曲げて倒れ込む。
「そうだよ……お前はいつもそうだ。お前の周りにはいつも人がいて、楽しそうに笑ってる。僕だって周りの奴等に見下されないよう頑張って勉強したさ！　なのにどうしてお前だけ得してるんだよ！　不公平じゃないかッ！」
「喜多川、お前……」
それはこいつがずっと前から抱いてた俺への劣等感だろう。なまじずっと腐れ縁をしていたから全く気付かなかった訳じゃないけど正直、喜多川の奴がそこまで思いつめていたとは思ってもみなかった。
俺の知っている喜多川宗谷という男は自分の生まれをステータスの一部だと思い、常にそれに見合うだけのことしてきてる奴だ。そういうこともあってか、俺と喜多川は中学時代、何かにかこつけて良く勝負をしたものだ。
喜多川が勝った種目もあるといえばあるが、俺の勝ち星の方が多いのは紛れも無い事実。何よりあいつはあの性格が災いしてか、知り合いがいても友達と呼べるような存在がいなかった。それは男子に限った話じゃなくて女子でも同じこと。あいつのことを面白い奴だと言う人は多くいても友達と言ってくれるようなクラスメイトは一人としていなかった。そしてその事実は今も変わらない……。
「知ってるぜ、お前。皇って名前は嘘で本当は六条星夜って言うん

だろ？　ハッ、本当は僕以上のお金持ちだってのに、そうやって内心では僕のことを見下してたと思うとマジで腹が立つよ」
　それは違う。俺はただの一度も自分が六条家の人間だと胸を張って言えたことがないし、ましてやお前のことを見下したつもりもない。だって俺は、自分が六条家の人間だってことをまだ受け入れられてないんだ。
「俺を六条家に突き出すのか？」
「まぁ、一応そういうことにはなってるんだけどさ……ほら、お前って正義の味方だろ？　僕はそういうのが大嫌いだからお前のこと、徹底的に殴ってやろうと思ってるんだ」
「……」
　もう間違いない。こいつは正気ではなく誰かによって操られてるだけだ。いくら男を見下すような喜多川でも平気でこんなことを言うような人間じゃないってことは俺がよく知っている。
（流石にここじゃ人目に付くな）
　既に数人単位での野次馬が俺達の周りに集まりつつある。今はまだ映画の撮影か何かと勘違いしているがこのまま事が荒立てば警察が来て事情聴取をされるのは言うまでもない。
「じゃ、そういうことだから。覚悟はいいか？」
「いつでも行けるぜ！」
　格好良く決め台詞を吐きつつ、俺は奴の言葉を引き金に全力で背を向けて駆け出した。卑怯？　正々堂々戦え？　そんなことより命が大事じゃボケ！　そのことを俺は昨日の夜、文字通り身を以って味わったからな！
「な……っ！　お前、逃げる気か！？」
「逃げてるんじゃねぇ！　戦略的に立ち回ってるだけだ！」
「なら何故僕に背を向けている！」
「ハッ！　背を向けてるのではなく後ろを向いて走ってるだけだ！
　悔しければ今度こそ俺を捕まえてみなッ！」
　売り言葉に買い言葉。傍目からみれば小学生同士の喧嘩のそれに

近いやり取り。当人である俺達は至って真面目だ。
俺達のことを物珍しさで見つめる通行人をガン無視して駅構内を全力で疾駆する。何はどうあれ今の俺にできるのは逃げ切ること。間違っても戦おうなんて思っちゃいけないのは分かる。分かるけど……あーもう悔しいなぁコンチクショウ！

「お嬢様、六条星夜の足取りが掴めました。神那岐駅です」
「そう。すぐに人を手配して」
砕牙の言葉を機械的に聞き入れ、事務的に指示を出した沙耶はぼんやりと車の窓に映る景色を眺めていた。まだ昼時だというにも関わらず町は人で溢れ返り、自転車が徐行運転しつつ歩道を走る。若いＯＬの肩にぶつかったサラリーマンがペコペコと謝り、女性は怒りを露わにし、小言をぶつけている。ちょっとぶつかっただけなんだから許してあげればいいのにと思いつつも、それ以上の感情は湧いてこなかった。
『お前はその君江さんのことを信じようとはしなかった』
電話越しで宣告した、彼の言葉が頭の中でループ再生される。自分のしていることが間違ってるとは思わないが、それが必ずしも良い結果を残すことが叶わないことを自分は知っている。しかしだからと言って今更、乗りかかった船から下りることなんて彼女にはとても出来ないし、そもそもリタイアするという選択肢なんてある筈がない。
だと言うのに――自分の心は今、濃霧に覆われ、進むべき方向を見失いつつある。
（私、何がしたいんだろう……）
自問して、考えてみる。するべきことは分かっていても、自分が何をしたいのか？　少なくとも沙耶にはそれが分からない。幼い頃から正義の味方としての訓練を受け、数多の敵と戦い、法で裁けぬ悪を捌いてきた。それは一族の責務であると同時に自身の誇りでもある。決して人に知られることでもなければ褒めてもらえるような

ことでもない。しかしそれでもこの活動はやり甲斐があると思ってる。だから今日まで直向きに努力し、期待に応えてきた。
　しかしそれは結局、夜城沙耶がやりたいことではない。だから自分には本当にやりたいことなんてないのではないかと、最近は思い始めていた。少なくとも聖と出会うまでは。
（私にはあんなに楽しそうに生きることなんて、出来ない）
　皇聖。六条家の一人息子であり、正当な後継者である彼は間違いなく夜城家に仇なす存在である。だが本人を見るとその考えが揺らいでしまう。
　六条家のことを少しも意識させない正義感溢れる行動力。真っ直ぐな瞳で正義の味方になりたいと叫ぶその姿。悪事を正しく悪いことだと叫ぶ勇気。本来ならばああいう人間が正義の味方であるべきだというのに、自分には彼のような素直さがない……。
「随分とお悩みのようですね」
　信号待ちをしている間、沙耶の様子に気付いていた砕牙がそれとなく沙耶を気遣う。自分では平気そうに振る舞っているつもりでも長い間、付き添ってきたこの執事には隠し事は無理のようだ。
「……黒南風さん……」
「何で御座いましょう？」
「……。皇君、やっぱり逮捕しなきゃ駄目なのかな？」
　敢えて六条の姓でなく、皇の姓を出してみる。彼が星夜であることは紛れもない事実だが、どうもそっちよりも今現在名乗ってる名前の方がしっくり来るのだ。
「お嬢様もご存知とは思いますが、六条星夜が本家の当主となり、正当後継者としての力を付ければいかに夜城家と言えども対抗手段がなくなってしまいます」
「うん……。分かってる」
「ですから、夜城家としては何が何でも六条家よりも先に彼を逮捕しなければなりません。ただ――」
「ただ……なに？」

「――いえ、執事である私がどうこう言える立場ではないのでこれ以上はなにも。……ですがお嬢様、これだけは忘れないで下さい。私に限らず、執事というのはいつでも己が仕えている主の味方で御座います。例えお嬢様がどのようなご決断を下そうとも、私は最後までお嬢様の味方でいます」

最後まで味方でいる――

執事ならばそうするのは当然のことなのに、改めてそれを言われると執事という存在は本当に頼もしい存在なんだと実感する。

「それに、私から見たお嬢様は既に結論が出ているようにもお見えですぞ？」

「私、そんな風に見える？」

「はい。……しかし同時に、お嬢様の心は尤もらしい理由を並べてそれに気付かない振りをしていらっしゃるようにも見えますが」

「……」

砕牙に指摘されたことに対して、何も言い返せない自分に気付く。

否――言い返せないのではなく彼の言葉に納得しているのだ。こうしたいという気持ちは確かにある。だがそれをもう一人の自分が否定している。どちらを選択しなければならないのか、なんてことは考えるまでもない。けれどもここで理性に従えば、きっと自分は酷く後悔するような気もする。

かと言って、残った選択肢を選んだとしてもそれは今までの自分を否定するのと同じことだ。今まで自分はこうして生きてたというのに、今更その信念を簡単に曲げられるほど、彼女は単純ではない。

どちらを選んでも後悔するのは明白。しかし今はどちらかを選択しなければならない。そうしなければ本当の意味で最悪の結末が訪れるかも知れないのだから。

「黒南風さん、私は――」

決意を口にしようとした瞬間、二人の間に着信音が割り込む。間が悪いと思いつつ、律儀に彼女は電話に応じる。

「はい。夜城です」

『私よ、沙耶ちゃん』
「栂野さん？」
予想外の人物からの電話に思わずオウム返しをする沙耶。そして彼女の返事を待たず、君江は用件を告げる。
『単刀直入に聞くけど沙耶ちゃん、聖を助ける気はない？』

彼女は正義の味方だった（前書き）

最終回です。どんでん返しとかそういうのはありませんがお付き合い頂けたら幸いです。

彼女は正義の味方だった

地下駅から地上に出て、建物の間を走り抜けると寂れたブランコとジャングルジム、砂場がある公園に出た。周りは雑居ビルに囲まれてるうえにすぐ側の道路を歩く人影も殆ど見えない。

（よし、ここなら誰かに通報される心配もない）

正直、この前みたいな男が相手だったらどうしようもないけど相手が喜多川なら話は別だ。一日中逃げ回るっていう手もなくはないがそれだと俺の体力が持ちそうにない。よってここは各個撃破に努める。

「ふっ……ようやく観念したか？」

周囲の状況を確認し終えたと同時に道路側から喜多川が姿を見せる。洗脳（あくまで俺の見立てだが）されてるとはいえ、身体能力が上がる訳ではないらしく、軽く息を切らせながら俺との距離を縮めていく。

「観念とは心外だな。せめて腹を括ったと言って欲しいものだ」

「この僕に大人しく殴られ倒される覚悟かい？」

「いーや、どっちかと言えば戦う覚悟だ」

喜多川との距離は目測で凡そ三メートルを切った。大丈夫だ、こいつの身体能力なら俺も良く知っている。体育の授業でも俺がこいつに負けたことなんてただの一度もない。それにこいつは喧嘩に対する知識もないと俺は踏んでいる。

「僕と戦うだって？　ハハッ、随分と面白い冗談を言うじゃないか……ッ！」

俺の言葉を挑発と受け取ったのか、俺との距離を二メートルを切ったところで喜多川が急に加速し、一気に距離を詰めてきた。フェイントも何もない、単調な動き。初撃は恐らく右からのフック。喜多川の体勢から推測するに、攻撃目標は顔ではなく脇腹辺りの筈……！

「――！」
集中する。下手に攻撃に出て相手に反撃の隙を与えるよりは防御に徹して確実に反撃できる機会を探った方が勝機が高い。そう判断した俺は右側から迫って来る攻撃に対して右肘でガードする。所謂、エルボーガードという奴だ。勢いがそんなに無いとはいえ、裸拳で肘を殴れば当然、拳に相応のダメージを負わすことが出来る。
「ぐっ……、お前……！」
「俺は仮にも正義の味方に本気でなろうとしてた馬鹿野郎だぜ？　独学だが戦い方ぐらいは習得してるぞ」
流石にここまで本格的な戦いはあの男を除けば今回が初めてだが、今でも暇を見つけては公園でシャドーをするのは俺の日課だ。喧嘩なら本当に数える程度だがあるが到底、実戦と呼べるような内容じゃない。言うなればこれは俺の初実戦デビューとも言える。にも関わらず、俺は自分でもビックリするぐらいリラックスして戦いに望んでいた。
（あぁそうか……。相手が喜多川だからこんなに落ち着いているのか、俺）
冷静に自己分析してみた結果、俺が落ち着いていられるのはこいつを無意識にあの日、遭遇した男と比較してるからだ。確かに今の喜多川は正気の状態よりも良い動きを見せるが、それだけだ。ベースはあくまで喜多川だし、何より居心地を悪くさせるような闘気がない。一言でまとめるならコイツはやり易いんだ。と言っても防御一辺通しで勝てるほど甘くはないからこっちが攻撃する隙も作らなきゃならないけど……。
「くっ……そうやってまた僕のことを見下すつもりか？　そうやって余裕でいられるのも今のうちだぞっ」
……今思ったんだがこいつ、さっきから雑魚キャラばりの台詞ばっか吐いてないか？　なんかもう俺に倒されるフラグが総立ちしているように見えるのは気のせい――じゃあないよな。いつもの俺ならここで気の効いたジョークでも言ってやってるところだが今の俺

にはそんな余裕なんてない。
僅かな小休止を挟み、再度接近を試みてくる喜多川。ただし、今度はジワジワと歩み寄るような移動だ。そして充分な距離をつめたところで一気に加速してタックルしてくる。しっかり反応したつもりで避けたが躱しきれずバランスを崩し、それを見た喜多川がラッシュを掛けてくる。
（……っ。喜多川の奴、段々と上手くなってきてるな……）
最初の方は動きもぎこちなかったけど攻撃の回を重ねるごとに硬さが取れていってるのが分かる。あとこれは洗脳の影響かどうか分からないけどエルボーガードしてるから相当拳を痛めている筈なのにこいつ、全然そんな素振りを見せやしない。やはり意識を刈り取るにはこっちも手を出さなきゃ駄目ってことか。
（それなら……っ）
左からの攻撃をガードしながら一気に距離を取る。離れまいと肉薄してくる喜多川。そのまま砂場まで逃げ込むと同時に上体を捻りながら姿勢を低くし、右手で砂を振り上げながら喜多川の顔面目掛けて投げ付ける。即席の目くらましってところだ。
「う……っ！　よくも僕の顔にそんな汚いものを――」
奴が台詞の途中なのは百も承知だがこれは特撮アニメの撮影じゃないから律儀に待つ必要なんてない。側面に回りこみ、充分な距離を詰めて顎に掌手を打ち込む。
「――！」
突然の衝撃に身体がついて来れず、糸が切れた操り人形のように倒れ込む。意識までは奪えなかったがすぐには回復しないだろうが――
「さっきのお返しだッ」
言うなり、喜多川は立ち上がりと同時に砂を無造作に掴み、投げ付けてくる。咄嗟に右腕で目を庇うが完全には防ぎきれず、右目に砂が入り一時的に視力を奪う。
（浅かったか？　いや、そんな筈はない……）

格闘技に熟達している訳じゃないが少なくともさっきの一撃はキチンと顎を捉えていた。だが現実として、喜多川の奴はすぐに立ち上がってきた。一応、効いている素振りは見せてたから全く効いてないって訳じゃないだろうけど……洗脳の影響で打たれ強くなったのか？　だとしたら結構厄介だな。脳への攻撃は下手すりゃ障害が残る恐れがある。殺る気満々の敵ならまだしも、こいつはそういう類の人間じゃないから出来るだけ頭部へのダメージは避けたい。

（いや、迷うな！　今の喜多川と戦うことに躊躇すればこっちがやられちまうッ！）

見えにくくなってる右側に注意を払いつつ喜多川が視界から消えないよう正面に捉え、牽制するように睨む。向こうも片目だけで俺を見ているのか、それとなく動きが緩慢になっているのが分かる。

喜多川が正面に立ち、両腕で壁を一枚作るよう構えながらゆっくりと肉薄してくる。くそ、アレやられると懐が遠く感じるんだが……アイツ、無意識にやってるのか？　……いや、今は余計なことを考えず作業をするだけだ。

「はっ！」

掛け声と共にステップインと一緒に打ち込まれる右ストレート。見切ったつもりで動いたが左頬を殴られる。予想してたよりもずっと重い打撃に少々驚くが決定打には程遠い。と言っても何発も受けたら危ないがな。

（よしっ。この距離なら取れる！）

向こうから接近してきたのはこちらとしては好都合だ。要らないダメージを貰ってしまったがそれは手数料としておこう。喜多川が身体を引くよりも早く右手で手首を取り、背を向けるよう身体を捻りながら左手で二の腕をガッチリ掴む。後は腕と上体の力を利用しつつ、左足で思い切り蹴り上げるよう足を上げ、右足でしっかりと踏ん張りを効かせる。柔道の代名詞とも言える必殺技、一本背負いだ。

「くっ、こんな技で僕が――」

喜多川の言葉を待たず、俺は力を振り絞り地面に叩きつけることだけに専念する。体重が五〇キロ強ある人間を投げるのは苦労したがどうにか不恰好ながらも投げ付けることが出来た。

「……ッ！」

腕を通して衝撃が伝わる。喜多川は一本背負いなんて大したことないと思ってたようだがその実、路上において柔道技は非常に強力な技となる。人間の拳は殴り続ければ腫れるし、下手をすれば骨折してしまう。だが柔道の投げは拳を痛めることがない。しかも落下地点はアスファルト。畳みなら受け身を取ってそれで終わりだがコンクリートで固められた地面では例え受け身を取ったとしてもダメージは免れない。とはいえ、俺も本格的に柔道習ってた訳じゃないし動画を見つつ遊びの中で覚えただけだから本家からすれば練度も完成度もあったものじゃないけどな。

一本背負いの余韻で動けない喜多川に追い討ちを掛けるように全体重を乗せた掌打を鳩尾に落とす。未曾有の衝撃と激痛が身体を支配し、喜多川の顔が苦悶の色に染まる。

「止めておけ、喜多川。喧嘩で俺には勝てないぞ」

「勝てない、だって？　ふざけるなよ、勝てる勝てないは僕が決めることだ……ッ」

裂帛の気合いと共に跳ね上がるように起き上がり、不安定な姿勢のまま強引に攻めに転ずる喜多川。フェイントも策もない、ただ正面から攻めてるだけの行動に対し俺は造作もなく顔面に拳を打ち下ろす。

だが――

「なっ……！」

俺がそれを確認するのと喜多川の拳が俺の顔を捉えたのはほぼ同時だった。捨て身で放たれた拳は深く入り、衝撃が突き抜ける。顔が大きく仰け反って側頭部から地面に不時着する。大した威力じゃないのに、不意を突かれたその一撃は想像以上に効いた。

（やべっ、足に来た……っ）

すぐに離れなきゃならないというのに俺の身体は言うことを聞いてくれやしない。一刻も早く動かなければならないのに足に力が入らず、避けようにも避けることが叶わない。
「――！」
不自由な身体に悪戦苦闘しながら上を見上げると肩肘を突き出し、全体重を掛けて攻撃を仕掛けようとする喜多川が眼に飛び込んだ。衝撃に備えようとするがあいつの肘が脇腹に突き刺さる方が速かった。
「あっ、が……ぁ……」
瞬間、過去最大級の痛みが俺の身体を襲った。鋭く食い込んだ肘はかつてない苦痛を与え、鈍りのように身体の芯に残る。たまらず脇を抑えてうずくまるがその直後に腹に蹴りが入り、俺を混乱させる。
呼吸をしようにも痛みで思わず息を吐き出してしまう。自分が必死で酸素を求めているのに供給量が足りない気がして更なる酸素を求めようと肺が呼吸を命じるが、痛みをそれを妨げる。
相反する二つの命令が脳内で目まぐるしく出て、身体が上手く動いてくれない。
「ハッ！　いいザマじゃないか！　キミみたいな庶民が僕を見下すからこうなるんだ！　正義の味方になる？　そーいうのはな、世間じゃ偽善っていうんだよッ！」
ありったけの罵詈雑言を浴びせて、それでも飽き足らず何度も蹴りを入れてくる。最初に受けたような痛みはない。身体が慣れてきたってこともあるけど充分な力が入ってないからだ。そう判断できるようになった頃にはようやく脳も冷静さを取り戻してくれたのか、思うように身体を動かせるまで回復していた。
相変わらず頭上では喜多川が何かを言ってるがそんなのは耳に入らない。甘く入って来そうな蹴りを見定めて足を取る。起き上がりと同時に取った足を掬い上げようとするが体中が痛みを訴えるように叫ぶ。その痛みに平伏しそうになる心をどうにか繋ぎ止め、力を

一気に解放する。
急に足を取られたことでバランスを崩す喜多川。突然のことに慌てふためく姿が、その仕草が全てスローモーションで再生されてるかのように俺の脳裏に焼き付く。辛うじてバランスを取っている喜多川にトドメを刺すよう足をしっかりとホールドしたまま倒れ込むようにタックルを決める。すると自分でも驚くほど簡単に姿勢を崩すことが出来た。
一瞬の浮遊感。そして衝撃。無我夢中での攻撃だったからそんな余韻に浸ることもなく、そのまま寝技に持ち込む。幸い、喜多川と俺はそれほど体格差がなかったのでどうにか取り押さえることが出来た。
（締め技で落としたいとこだが流石にそれはまずいだろうな……）
技の掛け方ぐらいは知っているが俺は専門家じゃない。下手すりゃ落としたことに気付かずそのまま締め続けるなんてことになりかねん。よってここはより確実にダメージを与える方法に出る。
腕を取り、打撃を打ち込みやすい体勢と角度を保持し、肘関節の側面（丁度身体の内側に位置する場所）目掛けて穿つ。
「〜〜〜〜っ！」
予想外の痛みに悲鳴をかみ殺す喜多川。そりゃそうだろう。押さえ込んだ時、お前は馬乗りになってたこ殴りにされるか締め技を想定してただけに鋭い痛みに対しては全く警戒してなかっただろう。
「驚いたか？　よく学校で椅子の角に肘がぶつかった時に痺れるところを狙い撃ちさせてもらったぞ」
多分これは誰もが一度は体験したことのある痛みだ。何かの弾みで肘が椅子の角にぶつかった時、ごく稀にズキッと、鋭い痛みが走ることがあるよな？　その部分はファニーボーンと呼ばれてる。何度もやれば流石にまずいが一撃だけでも効果は充分らしく、さっきの俺みたいに痛みに堪えてながら患部を抑えている。
「授業料だと思って受け入れろ。で、もう二度と喧嘩で俺に勝とうなんて馬鹿なことは考えない方がいい」

それは別に見下してるからとかじゃない、俺からの純粋な忠告だ。人間誰しも得手不得手があるように、この漢に喧嘩は全く向いてない。むしろそんなことする暇があるなら少しでも将来の為に知識を蓄えておくべきだと俺は思う。腕っ節が強くったって今の時代、格闘家にでもならない限り何の役にも立たないからな。

ともかく、喜多川が痛みに屈服している間に早くこの場から離れて――

「何処へ逃げようと言うんだ、六条星夜」

「っ！」

名前を呼ばれ、振り向く。その瞬間、俺は確かに驚きのあまり息が詰まったのをハッキリと認識した。

昨夜、俺を襲った電気使いの男。それだけでも手に余るってのにその隣には細身の男が待機してる。……やばい、これ完全に逃げ場ないジャン。

「友達相手に随分と時間を浪費したな。……全く、こんな男が次期当主だと思うと心底嫌気が差すな」

「だったら見逃してくれないか？　その方がスッゲーありがたいんだけど？」

動揺を悟られないように軽口を叩きつつ、冷静に二人を見比べる。俺を襲った男は左手をポケットに入れたままだが多分、あそこにはスタンガンが入っているに違いない。

対する、細身の男は特に何かを持っている様子はない。見た目も理系っぽいし白衣に眼鏡なんて組み合わせからして直接的な戦闘要員ではないってことは何となく想像が付くんだが……。

「いえ、それが私共としても簡単に見逃して差し上げられない事情がありましてね。残念ですが星夜さんには大人しく捕まって頂くしかないんですよ」

俺の提案を一蹴するように白衣を着た男が答える。そりゃそうだ。詳しい事情は知らないが少なくとも六条家は今頃になって第一子である俺を必要としてるんだ。しかもこいつらは見た限りじゃ下っ端。

そんな奴等に拒否権がないのは火を見るより明らかだ。
「ふぅ……困ったものですね。素直に申し入れを聞き入って下されば私としても余計な手間を省くことなく、穏便に任務を遂行できると思ったのですが……」
「ガイ、この男に妥協案を提示したところで無駄だ。こいつは大人しく従うよりも戦って勝ち取る選択をする人間だ」
「そのようですね。全く、ベイに楯突いただけのことはありますよ」
ガイと呼ばれた白衣の男は何処か面白そうに笑い、ベイと呼ばれた男は左ポケットからスタンガンを取り出す。いきなり実力行使に出るとかどんだけ気が短いんだこいつ等は。
（いや、そんなことより今は逃げ切ることだけに集中するんだッ！）
不幸中の幸いとも言うべきか、俺の身体はそれ程ボロボロではないからまだ思うように手足を動かすことが出来る。状況は最悪であることに違いはないがもしかしたら……という淡い希望は抱いている。というか今は藁にも縋ってないと心が折れそうだが――
「ソイソル、この男を捕らえろ」
ガイが指を鳴らすと何処からともなく全身網タイツの戦闘員が現れ、俺を取り囲む。あぁくそ、これで文字通り完全に退路を断たれたじゃねぇか……ッ！
「キーッ！」
近くにいたソイソルとか言う雑魚キャラが如何にもな叫び声を挙げながら飛び掛ってくる。あまりに不用意な接近だと思いながら俺は当たり前のように顔面目掛けて拳を打ち抜く。するとどうだろう――これまた面白いようにソイソルの身体が空中で大きく回転して派手に地面へ不時着する。えっ？　なんで今のでやられたりする訳？　これじゃあまるでかませ犬じゃねーか。だがそんなことで他のソイソルたちが臆する筈もなく、二人三人と続けて俺に飛び掛ってくる。一人ずつならともかくまとめて襲われてしまえば瞬く間に取り押さえられる。だからここは防御に徹するのが一番だ。
腕を伸ばしてくるソイソルから巧妙に逃げつつも袋小路にだけは

追い込まれないよう必死で逃げる。だがこの時の俺はあることを完全に失念していた。
「ふんっ、隙だらけだぞ？」
「！」
しまったと……そう思った時にはスタンガンを媒介にした電撃が俺の身体を直撃した。バリバリという効果音でも付きそうなくらい、身体が痺れて四肢の自由を奪おうとするが、目の前に迫ってくるソイソルを見た瞬間、動かないだろうと思っていた身体が急に動いてくれた。
「……」
その様子を見ていたガイは顎に手を添えて考え込む素振りを見せ、ベイは驚いた様子で俺を凝視する。自分でもなんで急に動けるようになったのかは謎だが、そんなことを考えてる余裕なんて一秒もない……ッ。
（突破するならベイにした方がいい！）
見た目だけで判断するなら如何にもインテリ系のガイにした方がいいかも知れないが奴の実力は未知数。それならある程度、手の内が分かっているベイのいる側から突破した方が逃走できる確率が高いと俺は判断した。
「この俺を簡単に抜けるとでも思ったか？」
しかしそれは所詮、確率の話であって現実の話ではない。充分な距離を取ってフェイントを混ぜて抜こうとするがあっさりと見抜かれ、簡単に取り押さえられてしまう。悪足掻き程度に力の限り抵抗してみるが片腕で簡単に抑え込まれた。
「コイツでも喰らって大人しくなるか？」
右腕で俺を押さえ込みながらベイは左手に持ったスタンガンをこれ見よがしに見せつけ、スイッチを押してアピールする。あれを首裏に押し当てられればあっと言う間に意識を奪われ、バットエンドを迎えてしまうのは明らかだがハイそうですかと素直に頷けるほど、俺は利口な人間じゃない。最後の最後まで抵抗して何がなんでも逃

げ切ってやるという想いだけで抵抗するものの、それを嘲笑うかのように奴の左腕が無慈悲に降ろされ――

「――！」

スタンガンの電極部分が押し当てられるよりも早く、変化は起きた。何かに気付いたかのようにベイが飛び退き、かと思えば俺のすぐ上を何かが高速で通り過ぎた。何が起きたのかと思い、上体を起こしながらその方向を振り向くと――

「君江さんッ！？」

なんとそこには、育ての親である君江さんがいるではないかっ！

しかもなんか黒い忍者衣装なんか着込んじゃって……。君江さんって確か技術部の人間じゃなかったっけ？　人づてに聞いた話だからあまり信じちゃいないけど……。

「ふんっ、誰かと思えば裏切り者のご登場とは……。わざわざ俺達に殺されに来たとでも言うのか？」

「あら？　私が年中引き篭もってるだけの女だと思ったら大間違いよ」

あぁそうか。そういえば君江さんも昔は六条の姓を名乗っていたんだっけ。だからコイツ等が君江さんを裏切り者と言うのは納得できるんだけど……やっぱり今でも信じられないな。君江さんがその昔、六条の姓を名乗っていたなんて。

「それより聖、立てる？」

「えぇ、まぁ大丈夫です」

気丈に答えながら起き上がって、上着やズボンに付いた汚れを叩き落とす。君江さんが手にしている武器は日本ではポピュラーな手裏剣と小太刀サイズの忍者刀。科学者って言うぐらいだからもっと近代的な武器を想像してたんだが……。

「合図したら一気に走りなさい。そして公園を出てからまっすぐ東に向かって頂戴」

「分かりました」

事情を訊きたいのはやまやまだが悠長に構える隙など皆無に等し

い。君江さんがどうして夜城に組したとか、六条家を見限った理由とか、知りたいことは山ほどあるけどそれは全部終わってからだ。
「やれやれ、まさか疾風の君と呼ばれてた貴女と戦う日が来るとは、人生何が起こるか分からないものですね」
「そういう貴方は何者？　少なくとも私が居た頃にはアンタみたいなヒョロイ男なんていなかったと思うけど？」
「えぇ。私は裏切り者である貴女に代わりに補給された人員ですから」
　眼鏡をクイッと上げて、何処か愉しそうに語るガイ。今までの素振りや会話からしてこいつが君江さんに勝てるとは思えないんだが……。
「ですが、何事も油断は禁物ですよ？」
「っ！」
　その言葉を引き金に、ハッとした表情をする君江さん。かと思えば電光石火の早業で手裏剣を後ろへ投げる。釣られるようにして振り向くとちょうど喜多川が手裏剣を避けていた。
「なっ……うそ、だろ？」
　それは喜多川が立ち上がったことに対してではなく、超人的な回避を見せたことへの驚愕。ついさっきまで俺と戦っていたあいつはあんな動きを見せなかった。しかも今の喜多川はなんか様子がヘンだ。……いや、俺と対峙した時から様子がおかしかったけど今はそれ以上の違和感を感じる。なんていうか……死んだ魚の眼でこっちを見てるような気がするんだが。
「余所見をしたな？」
「ッ！」
喜多川に気を取られた隙を突かれ、ベイが電撃を飛ばしてくる。完全に不意を突かれた形での攻撃はあっさりと決まり、一際大きな音を立てて君江さんの身体を貫く。
「ふんっ。昔のお前ならあの程度の奇襲など造作もなく避けられたというのに……夜城家では相当ぬるま湯に浸かっていたようだな？」

「あら、言ってくれるじゃない……」
電撃を受けた直後であるにも関わらず、君江さんはすぐに忍者刀を構えて俺を庇うように立ち回る。さっきからずっと逃げ出すタイミングを伺ってるんだがその隙が全くない。……ま、向こうに言わせりゃそれは当たり前っちゃあ当たり前なんだが。
「けどベイ、貴方如きが私に勝てるとでも思ってるの？　私にただの一度も勝てなかった貴方が……」
「見くびるな、君江。昔の俺と一緒にすると痛い目を見るぞ」
言いつつ、ベイは右ポケットから新たなスタンガンを取り出す。左手に持ってるのと全く同じタイプのように見えるが……まさか映画でいうところ二丁拳銃的な奴か？
「スタンガンの両手持ち……なるほどね。確かに私も覚悟を決めないとまずいかもね」
そういう君江さんの表情は険しくなっていた。前には六条家お抱えの幹部に後ろは操られてる喜多川（それも異様に強くなってる！）に加え、外堀を埋めるように待機してるソイソルとかいう雑魚キャラ達……。
「（聖……）」
ふと、何の前触れもなく君江さんが小声で俺を呼ぶ。ベイから少しも眼を離さないままで。
「（三秒後、眼を閉じて耳を塞いで。良いわね？）」
「えっ……？」
俺の承諾を待たず、君江さんは電光石火の如く手裏剣で二人を牽制する。飛来してくる手裏剣に対してベイが最小限の力で全ての手裏剣を弾き落とし――
「ハズレ。こっちが本命よ……ッ！」
ベイが手裏剣に気を取られた僅かな隙を突いて、懐から円筒状の物体を取り出してピンを抜く。それが何なのか理解するよりも早く、俺は言われた通り眼を閉じ、両手で耳をちからいっぱい塞ぐ。
刹那――巨大な音と光がその場を支配した。対テロ組織で特殊部

隊が使うスタングレネードって奴か……！

「今よ、早く！」

君江さんにせかされるように俺は疾駆した。喜多川とソイソル、そしてガイは光と音の余韻で動きを封じられたがベイだけは違った。誰よりも早くダメージから回復して俺の行方を阻もうと立ちはだかる。だがそれでも俺は足を止めない。ここで止まってしまえば俺は君江さんの信頼を裏切ることになるからだ。

スタンガンが光り出し、電撃が飛んでくる。そう認識した時、俺の前に別の影が躍り出た。影の主を確認することもなく、俺は真っ直ぐベイの横をすり抜け、未だフラフラしてるソイソルを押し退けて全力で公園から去っていく。

だが――

（これで本当に良かったのか……？）

後ろを振り向かず、指定された通り東へ向かって走っているけどその実、俺は酷く悩んでいた。冷静さを欠いてた訳じゃないし、俺が取った行動は多分正しいものだと思う。普通に考えて、正義の味方気取りの俺が手助けしようと息巻いたところで何も出来ないのは自明の理。

それは違う――

いや、そんなことはない。だってそうだろ？　これはゲーム感覚で参加できるようなものじゃない、本物の戦いだ。俺に限っては命を奪われるようなことはないにしろ、俺が足を引っ張ることで君江さんが死ぬことは充分考えられる。だから俺に出来ることなんて何もないじゃないか。

本当にそれでいいのか――？

「……」

走って逃げなきゃならないのに、急に足を止めて道の真ん中で棒立ちする。本当にそれでいいかって？　そんなに良くないに決まってる。君江さんの言葉に従うってことはつまり、俺のかぞく栂野君江を見捨てるってことじゃないか。

（これじゃあ、夜城と同じじゃねぇか……）
数十秒前に取った自身の行動を振り返り、心底自分が情けない野郎だと思う。偉そうに大口叩いたクセに、ちょっとトラウマと遭遇しただけで逃げ腰になってそれを正当化しちまってるんだ。その選択は世間から見れば正しいものであり、皇聖からすれば間違いでしかないってのに……。
俺は――無意識に自分を押し殺していた……。
なら戻るべきか？　紛いなりにも今でも無謀な夢を見続けてる自分を騙さない為にあの場へ舞い戻って助けようとして、足手まといになるか？　いや、足手まといになるとは限らない。少なくとも俺への殺害命令は出てないからそれを逆手に取れば或いは……。だがもし喜多川を盾にされたらどうだ？　いくら家族を助けるとは言え、その為に友人を見殺しにして――
「～～～～っ！　あーもう！　面倒なこと考えるのは後回しでいいだろッ！」
思考の螺旋に囚われる前に額に一発、ゲンコツを入れる。恐ろしく原始的な手段だが実際、俺みたいな単純な人間はこれやるだけで随分と落ち着きを取り戻すことが出来るもんだ。……あぁ本当、周りに人がいないのがせめてもの救いだなぁ。
とにかくこれで腹は決まった。足手まといとか喜多川がどうとかもうそんな面倒なことは考えず、ただ君江さんを助けることだけを考えよう。後で叱責されようが説教受けようがそんなのは知らん！
その時はその時で考えればいい！　そう思い、一度来た道を引き返そうとした時、曲がり角から見覚えのある人影が目に飛び込んできた。
「何処に行く気？　六条星夜」
「その声……夜城か」
何とも最悪なタイミングで遭遇しやがる。つーかお前、少しは空気読めっつー話だよ。
「急いでるんだ。退いてもらうぞ」

「栂野さんを助ける気？」
まるでこちらの事情を知っているかのような口ぶり。まさか夜城の奴、一部始終を見てたのか？
「事情は分からないけど今のあなたに栂野さんを助けられるって本気で思ってるの？　身体はボロボロ、しかも敵は一度キミに恐怖を植え付けた幹部クラスの人間。上手くやりあったところで勝ち目なんてないよ」
「勝ち負けの問題じゃない」
厳しい表情で俺を凝視する夜城を睨み返すように見つめ、俺は力を込めてその言葉を口にした。戦う時の夜城は別人かと思うほど表裏が激しいがこうして対峙してみると改めて分かる。夜城が口先だけで正義の味方になったんじゃないってことが……。
「前に一度言っただろ、あの人は俺にとっては家族も同然なんだ。例え俺が悪名高い六条家の人間だったとしても、家族を思うのは当たり前のことだ」
「そう。……でも、キミは一つ勘違いをしてる」
勘違いだって？　一体何を言っているんだ夜城の奴は。
「確かにあいつ等はキミの確保を命じられてる。でも場合によっては殺害することも許可されてるのよ。……分かる？　あの場に戻ればキミは高い確率で殺されるってこと。死ぬのが怖いなら――」
「それでもだッ！」
夜城の台詞を遮るように、大声で夜城の言葉を否定した。
「俺だって死ぬのは怖いって思うさ！　けどな、たった一人しかいない家族を失うってのはある意味死ぬよりも辛くて悲しいんだ。自分の死は一瞬でも人のそれはきず深い後悔として残っちまう。そして俺は傷を負う前にそれに気付くことが出来た。だから、君江さんを助ける」
「……」
依然として厳しさを保ったまま、夜城の視線が俺を射抜く。夜城に伝えたいことは全部伝えた。それでも駄目というならやっぱり俺

は彼女と戦わなきゃならない。それは悲しいことだけど、失うものの大きさを考えれば仕方のないことだ。元より俺は欲しいもの全てを手に入れられるほど器用な人間でもなければスーパーマンでもないんだから。

「……」

二秒、三秒とお互い無言での睨み合いが続く。このままこう着状態になるのではないかと危惧し始めた頃、夜城の方から沈黙を破った。

「……やっぱり皇君は根っからの正義の味方なんだね」

「夜城……？」

えーっと……これ一体どういう状況？　なんかいきなし夜城が俺を元の呼び名で呼ぶしいきなし微笑みを向けたりとか……一体全体どうなってるワケ？

俺が一人で混乱してる様子に気付いてる筈なのに夜城はそんなの何処吹く風とばかりに歩み寄ると服の下から手の平サイズの金属棒を渡した。

「これは……？」

「うちの開発チームの作った特殊警棒。今は収納状態だけど棒の長さは小太刀ぐらいまで伸びるから」

「そ、そうか……。けど夜城、なんで急に――」

「栂野さんを助けたいんでしょ？　だったら早く行こっ」

そうだった。今は悠長に話してる場合じゃない。どうして夜城が急に協力的になったかは置いといて、これに便乗しない手はないんだ。

「行くぞ夜城。優しくふんわり且つエキセントリック的に登場するぞ」

「分かった――て皇君、冗談なんか言ってる場合じゃないでしょ！」

うん、分かってる。分かってるんだけどなんかさっきのお前を見て急に懐かしさっつーか何というか……まぁそういうのがこみ上げてきたからつい、いつものノリで言っちまっただけなんだ……。い

や、本当今の俺、超マジだから、な？

時は少し遡り、聖が逃げ出した直後の現場にて――

「閃光弾とは賢しい真似を……。だが、俺にそんな小手先の技は通用しないぞ！」

覇気を纏い、咆哮と共に二つのスタンガンで電撃を溜め、一秒足らずで放出する。先のものとは威力も速さも比べ物にならないその一撃に対して、君江は手裏剣を頭上に投げる。するとどうだろう。真っ直ぐ標的へ向かう筈だった電撃は急遽、方向転換をするように手裏剣が向かった方角へ軌道修正しようとする。

（……ッ。やっぱりそう上手くはいかない、か……）

完全に軌道が逸れた訳ではないが、逃げる時間だけは確保できただけでも上出来だと思いつつ、君江は忍者刀を抜刀する。先の電撃を受けた際、君江が隠し持ってる金属製の武器は帯電状態になった。それはつまりベイの能力である電撃を引き付けやすい状態にある。君江はそれを逆手に取り、攻撃の軌道を逸らそうとわざと手裏剣を明後日の方向へ投げたのだ。結局失敗に終わったけれど。

攻撃の軌道が僅かに逸れたことに多少驚くものの、ベイは休むことなく電撃を飛ばす。スタンガンで宙を切る度に鞭に変化した電流が蛇のような動きをして君江に襲い掛かり、それらを一つずつ確実に忍者刀で切り払う。

「おっと、疾風の君。僕の人形がいることも忘れないでもらおうか？」

「くっ……！」

ベイが繰り出す攻撃の間隙を埋めるように宗谷が側面に回りこみ、野獣のような動きで腕を振るう。斬り伏せたい衝動が襲うが自制心を働かせ、どうにか身体に防御を命じる。相手がソイソルのような人間ならまだしも、彼は巻き込まれただけの民間人だ。無闇に殺してしまえばそれは正義の味方としてのポリシーに反する。

（この子を止めるなら元凶を叩くのが一番なんだけ……ど！）

強引にガイへ接近しようとすればベイから手厳しい電撃が飛んでくる。致命的な損傷を受けない限り、操られた人間は半永久的にマスターの指示通りに動く。行動不能になるまで叩くのも一つの手だが、ベイがそれを許すとは思えない。
「また隙を見せたな？」
「！」
宗谷をどうにか引き離し、ベイと向き合おうとしたその瞬間、君江は見た。両手にスタンガンを持った男が自分の懐深く潜り込んでいる姿を……。
まずいと、思った時には既に二つのスタンガンが脇腹に突き刺さり、電流がダイレクトに流れ込む。悲鳴を上げるよりも早く、引き離していた筈の宗谷が既に距離を詰め、無造作に君江の腕を掴み、そのまま力任せに地面へと投げ付ける。
「あぐっ！」
意思とは無関係に声が出る。ダンッと、衝撃が背中を襲うが大したことはないと自分に言い聞かせ、立ち上がろうとするが全く力が入らない。
（くっ、力が入らないというより身体が麻痺してる状態ね……）
その事実に気付き、舌打ちをする。いくら身体が痺れているとはいえ、完全に動けない訳ではない。たったままの状態でならまだ反撃のしようもあるが仰向けのままでは流石に攻撃のしようがない。
「もう少し骨があると思ったんだが……とことん失望したよ、疾風の君」
「女の扱いがなってないわね。そんな乱暴ばかりしてるとモテないわよ？」
言ってから、『聖の軽いノリがうつ伝染ったかしら？』と思う君江。いや、もしかしたら彼ならばもう少し気の利いたジョークを混ぜるかも知れない。と言ってもこの場にいない人のことを考えたところで答えが出る筈もないが。
「遺言があれば聞いてやらないこともないぞ？」

「そう、じゃあ言わせてもらうわ。……聖のことなら諦めなさい。あの子はどうしたって六条家には戻らないから」
「それならそれでいい。その時は奴を殺して俺が新たな当主となる」
「！」
その解答は君江にとっては予想外のものだった。近代社会となった今も六条家の跡取りは直系の人間でなければならないという不文律が存在する。それは自分が六条家に籍を置いてた頃から健在だったのだが――
「血に囚われるだけの時代は終わったさ。……まぁ、気が向いたら俺の身代わりとして傀儡の当主にしてやらないこともないがな」
会話はこれで終了だ。そう言わんばかりにベイは懐からナイフを取り出す。確実に心臓を刺して終わらせるつもりだろう。未だ麻痺する身体に鞭打って動こうとするが依然として自分の身体は言うことを聞いてくれない。このままでは自分が避けるよりも早く、鈍い光を放つ凶刃が心臓を穿つだろう。
（聖、ゴメンね。あなたのこと守れそうにないわ……）
この場にいない彼に謝罪し、眼を閉じて痛みに備え、ベイは無慈悲に腕を――
「俺の家族に手ぇ出してんじゃねぇぇッ！」
――振り下ろそうとした刹那、場違いな叫び声がその場の空気をぶち壊した。

君江さんが目の前で殺されそうになったのを目撃した瞬間、俺は全力疾走していた。限界まで走って駆けつけていたつもりだったんだけどやっぱ大事な人のピンチになると真の力が解放されるんだなッ。
（つーかこれフツーに走ってたんじゃぜってぇ間に合わねぇ！）
そう判断した俺は一瞬の躊躇もなく、大きく跳躍してベイにドロップキックをかましてやった。格好良さもクソもあったもんじゃないが取り合えず気分は晴れた。やられっぱなしは性に合わないから

な。
「聖……？」
「はい。言いつけ破って済みません」
君江さんを一瞥してから俺は特殊警棒を抜き、ベイを見据える。夜城は既にソイソルの駆除に取り掛かっている。これだけ騒ぎを起こしているのに警察が駆けつけ来ないってことはやっぱ、コイツ等がここに来る前に何かしらの手を打ったんだろう。……いや、今はそんなことどうでもいいか。
「……っ。驚いたな、まさか一度逃げ出した弱虫がもう一度戻ってくるとは思わなかったぞ？」
「知らないのか？　真打ちってのはな、いつも遅れて登場するもんなんだぜ？」
「そうは言うけど皇君は一度逃げたでしょ？」
ソイソルと交戦しているにも関わらず、夜城から手厳しい突っ込みが入る。あぁくそ、やっぱり雑魚相手だとそんな余裕があるのかよ。
「だが、戻ってきたのは失敗だったな。確かに俺達はお前の捕獲を命じられてるが、同時に殺害権も与えられてる」
「ハッ、始めから捕らえる気なんかない人間が何を言ってる？」
「……」
図星だったのか、ベイは言葉を続けず黙り込む。別に根拠があった訳じゃない。ただコイツは初対面の時から出世欲が強いっていう印象があったから多分、本能的に大人しく従ったところで殺されるだけだと思ったんだろう。
「来いよ、悪党。そして教えてやるよ。いつの時代も悪は必ず滅びるってことをな！」
「減らず口を……」
皮肉を込め、吐き捨てるように言うとベイは一瞬にして電気鞭を形成し、それを飛ばしてくる。あれを見るのは初めてじゃないからある程度の特性は熟知している。不規則に動いているように見える

があれは目くらましだ。攻撃のタイミングは接近してから気持ち一拍待ってから。
「おりゃあ！」
腹の底から声を出して気合いを入れて特殊警棒を振り下ろす。たったそれだけで電気鞭は簡単に霧散した。……おぉ、ここに来るまでの説明でこれが能力に対する抵抗力が強い武器だってことは聞いてたけどやっぱ自分の目で確かめると感動の度合いが違うな。初めて会った時なんかは無抵抗も同然だったし。
立て続けに二発、三発と電気鞭を飛ばすベイ。だが一度タイミングを掴んだ俺にそんな攻撃など通じる筈はない。タイミングさえ合えば防ぐのはそれ程難しくはないし、電撃の速度だって目で追いきれないって程じゃあない。
「ふんっ。ならこれはどうだ？」
鞭では駄目だと判断したベイは更に距離を取る。そのままアイツに肉薄しようとしたが溜めモーションを見て、その考えを改める。俺と奴との距離があり過ぎるから技の発生前に出を潰すのは無理だと即断した俺はすぐさま回避運動に勤めるべく同じように距離を取る。
僅か一秒で電撃の溜めが終了し、両手を頭上にかざす。ベイの頭の腕で小規模ではあるが電気の球体が形成され、俺をロックオンする。
ベイが腕を振り下ろすのとその球体がビーム状に変化して高速で飛んで来たのはその直後だった。
「聖ッ！」
背後で君江さんが悲愴に満ちた声を上げる。それに対して夜城は何処か楽しそうに俺を見てる。
「皇君、まだ動ける？」
「あぁ。大丈夫だ」
夜城の言葉に答えつつ、特殊警棒を握り直して俺は接近する。電撃を受けたせいで服がかなりボロボロだ。これは少し高い請求をし

なきゃ割りに合わないな。
「……ッ。お前、たった一日で何があったと言うんだッ！」
「たった一日で強くなれるほど人間は優れてないよ。あの時と違う点を挙げるながら彼は能力の使い方を覚えただけ」
俺の言葉を代弁するように、夜城が自慢の銃をベイに突きつけ、発砲する。純白色のレーザーが等間隔で射出されるがベイはそれら全てを際どいところで躱してみせる。
「皇君の能力は純粋に能力に対しての抵抗力をあげるもの。でもそれは常時発動するタイプじゃない、本人の気分とか体調に左右されるタイプ。まぁ、私もそれに気付いたのはついさっきのことなんだけどね」
そう――俺が始めからこの身に宿っていた能力は防御力を底上げするという、非常に地味でヒーロー向きとは言えない力だった。俺のＸＰ数値の最低値と最大値に大きな開きがあるのはその辺が原因だと、ここに来るまでに夜城が教えてくれた。そりゃあ、確かにこれを夜城から教えてもらった時は自分でもショボイと思ったけど、これって裏を返せば訓練次第では敵の攻撃を無力化できるって知った時はスゲーって思ったよ。
しばし感動の余韻に浸ってた俺だがすぐに本来の目的を思い出し、ベイに急接近して特殊警棒をナイフのように突き出す。俺如きの実力で当てることが出来るか不安だったけど夜城に気を取られてたことが功を奏し、当てることが出来た。
「ぐっ……！」
「隙だらけだよ」
ベイがよろけたところに夜城が手厳しいコースを狙って中距離から狙撃してくる。そのうちの何本かは外れたけどベイの反撃を封じることは成功した。
「皇君、あまり無茶しないで。ベイは私が引き受けるからあっちの相手してあげて」
「チッ、仕方ねぇ。ヒーロー役は譲ってやるよ」

軽口を叩きながら全力でベイから離れて、ガイと喜多川を視界に収めるよう位置取りを調整する。奴に背を向ける形となるが夜城ならバッチリフォローしてくれるだろう。だから俺は夜城の方に敵が流れないようにすればいい。
「賢明な判断……と、言いたいところですが星夜、キミに友達と戦う覚悟があるというのですか？　彼の身体はボロボロ。下手をすれば何てことない一撃が致命傷に繋がりかねない彼と戦う覚悟が」
「……」
害の質問には答えず、黙って奴だけを見据える。思えばこいつは定位置からあまり動こうとはしない。もしかしたら操作系の能力にはそれ相応のリスクがあるかも知れないと俺は踏んでる。
「やれやれ、嫌われたものですね。……喜多川、始末してもいいぞ」
ガイの言葉に従うように喜多川は一度だけ頷くと、真っ直ぐ俺に向かって突撃し、俺がガイへ特攻を決めたのはほぼ同時だった。
「マスターである私を叩く。策としては悪くありませんが、今の彼は壊れかけてるとは言え、君よりずっと早いですよ？」
その言葉を証明するように、奴との距離が二メートルを切ったところで袖口を掴まれる。力任せに振りほどこうとするがしっかりと腕をホールドしてくる。
「柔道には両手で袖をしっかりと掴む技巧がある。六秒立てば反則になってしまうがここは路上。それに一度掴まれば脱出なんて――」
「随分、安く見られたなものだな」
それが挑発だと分かっているさ。けどなんかこいつの喋り方は俺の神経をいちいち逆撫でしやがる。何ていうか……このガイとかいう男は生理的に受け付けないんだ。
「俺を――」
ホールドする喜多川ごと引きずりながら距離を縮めていく。大方、腕を取ってからガッチリホールドするつもりだったんだろうがそれなら最初にダッキングなんかを決めて体勢を崩すべきだったな。
「――舐めんじゃねぇぞ三流がッ！」

力の限り声を張り上げ、特殊警棒を反対の手に持ち替えて渾身の力を込めて振り下ろす。頭は流石にまずいので狙いは肩。かなりの大振りだが完全に学者肌のコイツがそれを避ける術など持っている筈がない。
「ひっ！　ちょ、ちょっと待て――」
肩口を押さえ、見っともなくうろたえるガイが酷く滑稽に見えて思わず吹きそうになるがどうにか堪えながら、トドメの一撃とばかりに鳩尾に特殊警棒を叩き込む。散々高みの見物決めといていざ自分の身に危険が迫れば命乞いだの取引だの言うとかマジ古典的な小悪党じゃねーか。……まぁ、そう思える時点で俺も大概アニメの見すぎかな。
そして俺の目論見通り、奴の集中力が途切れた影響か俺の腕にしがみ付いていた喜多川はぐったりと地面に突っ伏した。ふぅ、取り合えずこっちはこれで一段落ってとこか。
「夜城ー、こっちは片付いたぞ。手伝いが必要か？」
「平気」
チッ、可愛げのねぇ女だな。まぁいい、夜城が平気だって言うならまずは君江さんの元へ行くべきだな。
「驚いたわよ。聖が沙耶ちゃんと知り合ってたってこともあるけど、あの沙耶ちゃんが死んだ家族以外の人にあんな風に喋るなんて」
「夜城が時々人格変わるのって、その辺が原因なんですか？」
「えぇ。……と言っても、こればかりは本人のプライベートに関わることだから私からは何も言えないけどね」
「分かってます」
俺も人の過去を根彫り葉堀り穿り返す趣味もないしな。気にはなるけどそれはアイツの口から語ってくれるまで待つことにしよう。そう思いながら夜城の方に目を向けると丁度ベイに接近戦を挑んでいるところだった。銃ばっか使うからてっきり近接戦闘は苦手とばかり思ってたんだが……。
「くっ……流石は夜城家の次期当主と言ったところか。衰えた疾風

の君とは格が違う」
「当たり前よ。だって私、現役なんだから」
皮肉の類は一切込めず、思ったことを口にしたように告げて、尚も接近戦を仕掛けてくる夜城。カポエラ（いや、テコンドーか？）を習得しているのか、肉弾戦は主に蹴り技が多く、その足技は正確に急所を捉えてる。だがそれはあくまで牽制目的に過ぎず、隙が出来れば間髪入れず銃で追撃を仕掛けてくる。
最初は性別と体格差で夜城の方が早くスタミナ切れを起こすのではないかと懸念してた俺だがどうやらそうなる前に決着は付きそうなムードが漂ってきた。
ベイが力任せにスタンガンを持った腕を振るう。それを夜城はスウェーで流し、適度な距離を取ると同時に出力を抑えたレーザーで弾き飛ばす。あぁもう、見ているこっちが鮮やかに思っちまうじゃねぇか……ッ！
「幕引きよ、ベイ。私自らが引導を渡してあげるわ」
「ふんっ、生憎こちとら諦めが悪い性質でね。今日のところは大人しく引き下がらせてもうらよ」
負け惜しみか？　と、誰もが思ったが次の瞬間、余ってたスタンガンを限界以上の出力を出し、電撃を四方八方に放電する。狙いなんてあったものじゃない、完全にデタラメな動きだ。その不規則な動きに付いて来れず、俺と君江さんは反射的に地面へ伏せた。
「クッ……待ちなさい……！」
この場にいた誰よりも早く夜城はダメージから回復し、足音だけを頼りに応射する。だが行動に移るのはベイの方が早かったこともあって、簡単に奴を逃がしてしまった。
……えっ？　ちょ、なんだこれ？　ギャルゲーで言うところのバットエンド？　途中でフラグ回収し損ねたからこうなっちゃったって訳！？　しかもなんか夜城の奴はまったりしてるし！
「ちょ、夜城！　今すぐアイツ追いかけなくていいのかよ！？」
「うん。身元は割れてるし今回私に与えられた任務は戦闘じゃない

から」
　あー、はいはいそういうこと。要は任務外のことはしないってことね。そのことを指摘されて冷静になってみれば今は無理して戦う必要なんかないよな。ちょっと反省……。
「それより栂野さん、怪我の具合はどうですか？」
「えぇ、思ってたよりも酷くはないわ。……それより沙耶ちゃん、、、、、、私の言った通りの展開になったでしょ？」
　と、ここで急に含みのある笑みを夜城に向けて面白そうに語りだす君江さん。えっ、なに？　今度は一体何なんだ？
「君江さん、何の話ですか？」
「えぇ。実を言えばね、これは賭けだったの。聖が口先だけじゃなくて本当に正義の味方を目指す覚悟あるかってことの、ね」
「あの、皇君？　一応言っておくけど皇君が六条家の人間だったのは本当に知らなかったことだから変な誤解はしないで、ね？　ただ、私は栂野さんの悪巧みに一枚噛んだだけというか、その……」
　いや、全っ然状況が分からないんですが？　君江さんと夜城で俺を担ごうとしたのは分かるけど何処から何処までが二人の計画なんだ？
「簡単に言うとね、皇君に電話してしばらく経ってから栂野さんから電話があってその時に話を持ちかけられたの。皇君のことを助ける気はないかってね」
「それがどうして俺を助ける理由になったんだ？」
　少なくとも俺に電話をしたあの時、夜城は俺を捕らえる気満々だった。だからこそ、俺は急に夜城が心変わりしたことに対して半信半疑だったりする。
「栂野さんから電話を受けるまでね、色々考えてたの。で、そこで私は気付いたことがあった。私は望んでこの道に進んだ訳じゃないってことを。勿論、今さら投げ出したりはしないし、今では生活の一部だと思ってるよ。ただ……」
「ただ、なんだ？」

「……どうせ正義の味方するならさ、皇君みたいに胸張って笑いながらやった方が何倍も得かなって、思っただけ」
「それじゃあの時、俺の前に現れたのは俺の決意を確かめる為か？」
「そうよ。それに沙耶ちゃんに出来る限り協力するって、聖約束したでしょ？　途中でその誓約を反故しても最終的には共闘戦線張れば守ったことになるでしょ？」
　なんと！　全ては君江さんのシナリオ通りという訳か。わざわざ俺の前に現れてピンチっぽくなって（いや、これはかなり本気っぽく見えたが）極限状態で俺の気持ちを確かめる。漫画じゃよく見かける手法だが自分がそういうのを体験するなんて、世の中何が起こるが分からないものだな。
「何だか凄まじい屁理屈のようにしか聞こえませんね。……でも俺、そういうのは嫌いじゃないですよ」
「ふふっ、聖ならそう言うと思ってたわ。……それよりこの子、早く手当てした方がいいんじゃない？」
『あっ……』
　君江さんに指摘され、俺と夜城は今頃になってガイに操られていた喜多川の存在を思い出す。なんかもうコイツ、途中から完全に空気だったな。あと俺と夜城、結局学校サボッちまったし……あぁ、明日藤原先生に会うのが怖い……。

　あれだけ騒ぎを起こしたにも関わらず、翌日の新聞やニュースには何も報道させてなかった。いくら正義の味方に悪の秘密結社が秘匿とされた組織だからと言って都心の真ん中であれだけのことをやらかしたんだ。そのことを夜城に話したらたった一言、俺に言ってきた。
『皇君、権力ってこういう時の為にあるんだよ』
　具体的に何をしたのかなんて分からないがその一言が何を意味するかはすぐに察した。考えてみれば夜城家は政界にも大きな影響力をもたらしているところだ。その気になれば報道規制ぐらい訳もな

いか。
で、とばっちりを受けた宗谷はどうなったかと言えば全治一ヶ月の怪我を負って入院している。先日、夜城と一緒にお見舞いに行ったけど俺の顔を見るや否や、気まずそうに顔を背けたのはちょっとだけ傷付いた。
薄々は分かっていた。喜多川が俺に対して劣等感を抱いていたってことは。そうは言ってもそれはあくまで俺の勝手な予想だし、喜多川宗谷という男はそこまで弱い人間じゃないという俺の先入観がもたらしたものだと思うとちょっとやりきれない。
そして現在、俺は何をしているかと言うと――

「皇君、準備はいい？」
「問題ない」
夜城の問いに答え、俺は調子を確かめるように手を握ったり開いたりする。全身を包むのはトレインチコートに良く似た真っ赤な戦闘服。まさに俺の為にあつらえた衣装だ。
「皇君……作戦、分かってるよね？」
「心配するな。まず俺が先陣を切って敵陣に飛び込む。で、そこで俺がヘマして捕まって人質になってこう叫ぶ。『夜城、俺に構わず撃てー！』そして夜城、お前はこう言うんだ。『出来ないよっ。皇君を撃つなんて私には無理だよ！』ってな」
「全然違うよっ！」
むぅ……相変わらず夜城にはユーモアというものが理解できないようだな。非凡な身体能力を見込まれて夜城と一緒に六条家の下部組織を叩く手伝いをしてしばらく経つけど未だに夜城は俺にペースを掻き乱されまくってる。……学校でもこんなことばっかしてるから夫婦漫才なんて言われるんだろうな、きっと。
「なぁ夜城……実はお前冗談と本気の区別が付かない人間なんじゃないのか？」
「皇君がややこしいだけだよっ。……まさか本当に私の話、聞いて

なかった？」
「俺が奇襲掛けて敵を混乱させる。頃合いを見計らってお前と入れ替わればいいんだろ？」
いくら夜城の手伝いをすることになったとは言え、俺の身体能力が優れていようとも結局はただのアルバイトに過ぎない。とはいえ、他のお仲間たちは各地に派遣させてる上に早々会えるような立場じゃないから俺が手伝いをしてくれることは夜城としても結構助かっている……らしい。あまり実感ないけど。
「いつも思うんだがな夜城。別に小規模程度の作戦なら俺がいる必要ないんじゃないか？」
「いーの。作戦の成功率は一パーセントでも上げておくべきなんだから」
清々しい程に正論だな。それ以前にバイトである俺が口出し出来る問題でもないからこれ以上は議論する必要もないし、研修期間と思えば実りもある。
「雑談はこのぐらいしてそろそろ行くよ」
「分かってる」
頷き、立ち上がりながら目的の建物を見やる。一見、ただの雑貨屋（ご丁寧に休店の札が掲げてある）のように見えるが侮るなかれ。あれでもれっきとした下部組織のアジトなのだ。ふざけているように思われるだろうがこの前潰した基地はもっとふざけてたんだぞ？
カレー屋の地下と聞いた時は流石の俺も呆れるしかなかった。
「いつも通り、皇君は後ろを気にしないで思い切って暴れていいよ」
「あぁ。俺もお前が後ろにいるから安心して暴れられる」
互いに視線を絡ませ、笑い合う。それが合図となり、俺は悪の根城を潰すが為に風となって疾駆した。
子供の頃、俺は正義の味方に憧れていた。そして今、俺はその正義の味方をやっている。それは夢の終わりであって、現実の始まりでもある。まさか子供の頃から渇望してたものに俺がなれるとは露ほども思ってなかったけど、確かに今、俺は夜城と肩を並べている

んだ。今はまだ夜城の後ろを走るだけの存在だけど、いつかは夜城を守れるだけの存在になりたい。いつまでも女の影に隠れるのは格好悪いからな。

目的の雑貨屋が眼前に迫ってくるのを確認し、急ブレーキを掛けて一度深呼吸をする。この瞬間だけは何度体験しても慣れない。そして多分、これから先も慣れることはないだろう。

「……」

大きく深呼吸をして高揚する胸の高鳴りを落ち着かせる。よし、もう大丈夫だ。大きく息を吐き出すと共に俺は気合いを入れて雑貨屋へと踏み込んだ。

「動くな、悪党共！」

「なっ……！　貴様、何者だッ！」

何者かって？　そんなの決まってる。俺は――

「この世の悪を裁く正義の味方、皇聖だ！」

彼女は正義の味方だった（後書き）

改めて読み返してみると自分でも正義の味方という着眼点は良かったと思う反面、しっかりとその設定を活かしきれなかったこと、現実と遊びの区別をキチンと仕切っていないと思いました。というよりもこれ書いていた時は自分でもしんどかった記憶しか……。

さて。彼女は正義の味方だった、如何でしたでしょうか？　この話はこれで完結ですがそのうち、また別のオリジナル小説を投稿します。こちらも今作と同様、既に完結済みの作品なのでそれなりのペースでｕｐできます。正義の味方と違って自分でも楽しく書いていたものですので多分、これよりはいくらか面白いかと。

でわでわ～。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5199n/

彼女は正義の味方だった

2010年10月8日12時14分発行